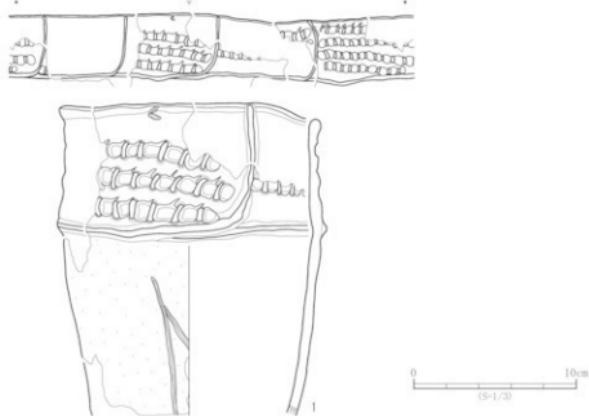


第4節 下ノ内遺跡1B区の調査



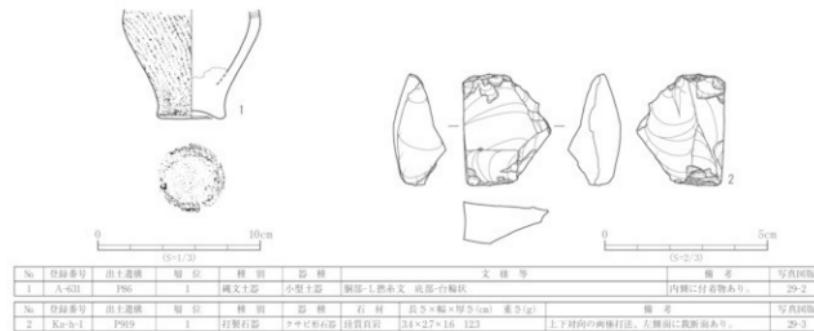
No.	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	石種	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	備考	写真図版
1	Kc-a-3	SK74	-	搬石器	石器	安山岩	8.9×8.3×5.2	522.0	搬1=1, 脱1=1。	Z-15
2	Ka-c-2-1	SK92	-	打撲石器	石器	珪質頁岩	(2.2)×1.9×0.3	(1.4)	搬部欠損。	Z-19
3	Ka-a3-1	SK95	2	打撲石器	石器	珪質頁岩	3.1×1.5×0.4	0.9	円溝織、表面に黑色付着物あり。	Z-4
4	Ka-a3-2	SK95	2-3	打撲石器	石器	鈍石英	2.5×1.5×0.5	1.0	円溝織。	Z-5
5	Ka-c1-3	SK105	1	打撲石器	不定形石器	珪質頁岩	(3.4)×(3.1)×(1.2)	(13.3)	削芯。下部欠損。欠損面に加工あり。	Z-10
6	Kd-b-1	SK104	周面	石製品	石棒	安山岩	(29.1)×(16.4)×(14.3)	(10,100.0)	頭部欠損。頭部に凹1所。底面に敲打痕あり。	Z-7

第66図 土坑出土遺物（3）



No.	登録番号	出土遺物	層位	種別	認種	文様等	備考	写真回数
1	A-185	SX89	-	繩文土器	深鉢	1面縁～胴部・背縁文区画・撫狀刻文		29-1

第67図 SX89性格不明遺構出土遺物



第68図 ピット出土遺物

IX～X層出土土器（第72図、図版30）

繩文土器 5点を第72図に図示した。1は頭部から口縁部外側に開く深鉢である。口縁部に「Y」字状あるいは横位「S」字状の隆線文が4ヶ所に配され、それらを連結する波状の隆線文上にはL縦文が押捺される。口縁～頭部は横位の刻み目を有する隆線文及び沈縦文で区画され、上下2段に配される横位に連続する山形の隆線文の一部はくずれて波状となる部分も認められる。また、胴部には綾络文が施文される。この資料はSX69から出土した小破片と接合関係にある。文様から中期前葉と考えられる。2は胴部上半に括れをもち口縁部が外反する深鉢で、口縁部直下に一条の沈線文が巡る。3・4は深鉢の胴部破片で隆沈縦文区画で文様が構成されるもので、3は隆線文が撫狀となる。これらはいずれも中期前葉と考えられる。

X層出土土器・土製品（第73～77図、図版37・38）

繩文土器55点、土製品17点を図示した。第73図1はキャリバー形の深鉢である。口縁部文様帶は渦巻隆沈縦文が

連結して区画を形成し、頭部は無文で胴部との境には横位の隆沈線文が巡る。2は2~3条で一単位の沈線文で懸垂文・曲線文が描かれる。3~14は沈線文あるいは隆沈線文で渦巻文が描かれる。上記のものは中期中葉に属する。第73図15~18、第74図1~15は隆線または隆沈線等で区画され「O」字・「C」字・「U」字等のアルファベット文が形成される。区画内にはLR・RL繩文、L・R撚糸文・刺突文が充填される。第74図3は双輪状の突起をもつ波状口縁で波頂部中央に貫通孔を有する。4は4単位の波状口縁となり、口縁部には2列の円形刺突文が巡る。第75図1・3は沈線文の幅が狭くなり、2は全体に沈線文が施される。5~7、10・11は深鉢で、口縁部直下に沈線が巡る。13は小型の深鉢である。14は小型品で壺の可能性があり、底面に木葉痕が認められる。8は小型の浅鉢で内外面には赤彩が見られる。口縁部は連続する小波状口縁で、胴部の横位の沈線下は継位あるいは斜位の沈線で埋められる。第76図6は注口土器の注口部分で外面には赤彩が残る。7は台付鉢の底部で台部には貫通孔が見られる。これらの土器は文様の特徴から中期末葉から後期初頭頃と考えられる。土製品は土製円盤17点、土偶3点を図示した。土製円盤はいずれも胴部破片を打ち欠いて成形を行っている。第77図1は土偶の脚部と考えられ、脚部の底面は僅かに凹んでいる。2・3は土偶の腕部で孔を有し、2は貫通している。

Ⅺ層出土土器（第77・78図、図版39）繩文土器3点を第77図4・5、第78図1に図示した。いずれも頭部に無文帯を有するキャリバー形の深鉢で、口縁部に4単位の渦巻突起が付き、渦巻隆沈線文により文様が区画される。第77図5は口縁部区画内に斜位の單沈線文が施され矢羽根状となる。頭部と胴部との境には沈線文または隆沈線文が巡り、胴部ではさらにここから垂下して横位に展開する渦巻沈線文が描かれる。これらは文様の特徴から中期中葉期の遺物と考えられる。

Ⅲ~Ⅵ・Ⅷ層出土土器・土製品（第79図、図版39）繩文土器11点、土製品2点を第79図に図示した。1~3はキャリバー形の深鉢の口縁部で、1は渦巻突起を有する。4は胴部から口縁部が緩やかに聞く深鉢で、口縁部直下に横位の隆沈線文が巡り、そこから2条の隆沈線文が垂下する。5は口縁部把手の一部で「S」字状のモチーフが隆沈線文で描かれる。6は沈線文による区画を有し、区画内にはL撚糸文が施される。9は小波状口縁で平行沈線で文様が構成され入組文がモチーフとなる。11は横位に平行沈線文が巡り瘤状の貼付文が施される。12の土製円盤は胴部破片を利用している。13はキノコ形土器である。時期については文様から1~4は中期中葉、5~8は中期末葉、9~11は後期前葉~中葉頃のものと考えられる。

遺構外出土の石器

Ⅻ層出土石器（第80・81図、図版40）計41点の石器が出土した。器種別の内訳は石錐2点、不定形石器4点、二次加工のある剥片3点、微細剥離痕のある剥片3点、剥片10点、石核2点、磨石6点、凹石5点、敲石2点、砥石2点、石錐1点、石皿1点であり、この内の石錐2点、不定形石器3点、磨石・敲石・凹石各1点、石皿1点を第80・81図に図示した。

第80図1・2は石錐である。二等辺三角形状で基部に抉りを持つものであるが、2は幅広である。調整加工は表裏に施されている。3~5は不定形石器である。3・4は欠損品であるが、側縁に連続した二次加工を施して刃部を作出した削器である。5は側縁に連続した二次加工を施して刃部を作出した削器である。6は磨石である。細長い棒状硃の片面の平坦面に研磨痕が認められ、器体の表裏には研磨痕よりも古い敲打痕が残る。7は敲石である。細長い棒状硃の上下端に敲打痕が認められるが、正面の削中央部にも凹みが2ヶ所認められる。8は凹石である。やや扁平な梢円錐の表裏の平坦面に2ヶ所ずつの敲打痕が認められる。第81図1は石皿の欠損品である。大型扁平硃の片面に磨りによる皿状の窪みが認められる。

Ⅹ層出土石器（第82~84図、図版34・35）

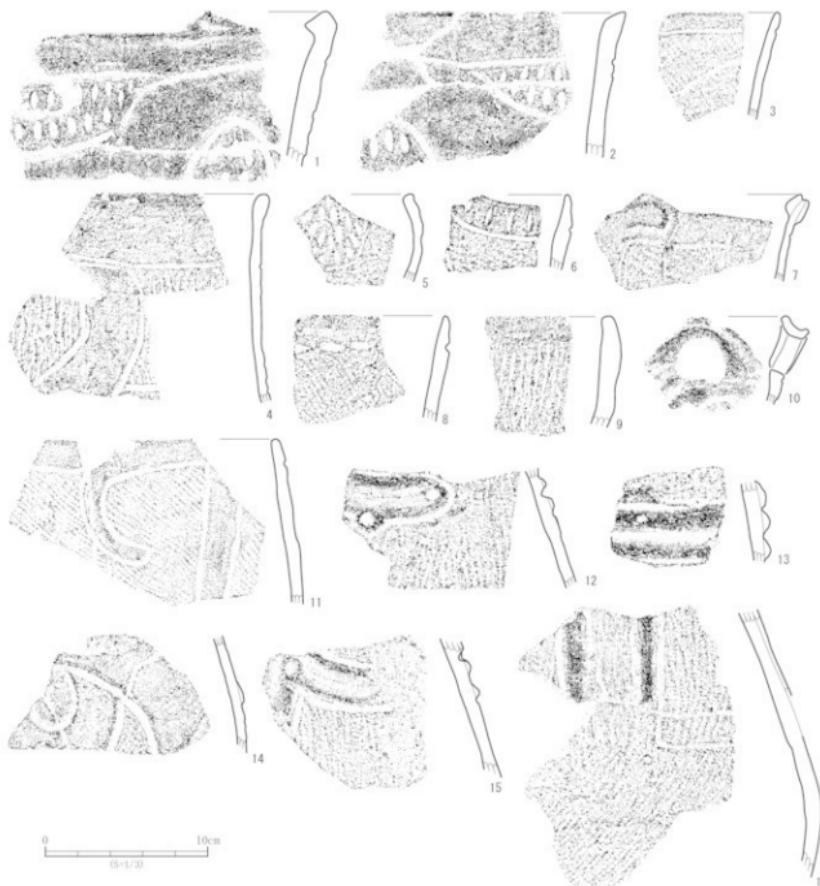
計115点の石器が出土した。器種別の内訳は石錐2点、石錐1点、石匙3点、不定形石器16点、二次加工のある剥片9点、微細剥離痕のある剥片8点、剥片36点、石核5点、磨石7点、凹石11点、敲石8点、砥石5点、石皿1



No.	登錄番号	場所	遺跡・グリッド	種別	器種	文様等	備考	写真図版
1	A-150	Ⅹ	W 330・N10	陶文土器	深鉢	口縁・側面直口直肩・有沿縫文・麻布文・口縁内側直口下部にし貝織文		29-4
2	A-195	Ⅹ	W 330・N20	陶文土器	深鉢	口縁・側部・底内口縁・沈縫文・R撲糸文・底部・側代表		29-6
3	A-57	Ⅹ	W 320・N20	陶文土器	深鉢	口縁部・上足織文		29-11
4	A-139	Ⅹ	W 320・N10	陶文土器	深鉢	側部・R上織文・降縫文		29-7
5	A-75	Ⅹ	W 320・N20	陶文土器	深鉢	口縁・側部・底内口縁・横拉沈縫文・L R上織文・底部・子母		29-5
6	A-81	Ⅹ	W 320・N20	陶文土器	小型土器	側部・沈縫文・上京綱文・底部・ナゲ		29-10
7	A-74	Ⅹ	W 320・N20	陶文土器	深鉢	側部・L撲糸文・底部・木製板	底部穿孔。	29-8
8	A-474	Ⅹ	W 320・N20	陶文土器	深鉢	把手・口縁・側部・無文		29-9
9	A-123	Ⅹ	W 320・N20	陶文土器	深鉢	側部・R上織文・底部・ナゲ		29-12

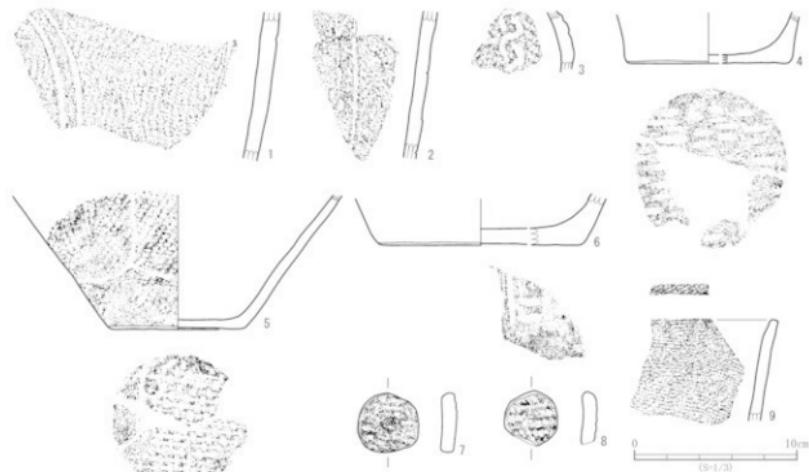
第69図 IX層出土土器（1）

第4節 下ノ内遺跡1B区の調査



No.	登録番号	類別	遺跡・グリッド	種別	器種	文様等	図考	写真頁数
1	A-108A	石	W 320・N20	圓文土器	深鉢	1)縁部-山形小切欠、沈綱文区画、斜夷文 2)縁部-沈綱文区画、斜夷文	A-108Bと同一 A-108Aと同一	29-13 29-14
2	A-109B	石	W 320・N20	圓文土器	深鉢	1)縁部-沈綱文区画、斜夷文 2)縁部-沈綱文区画、斜夷文		30-2
3	A-171	石	W 320・N10	圓文土器	深鉢	1)縁部-沈綱文区画、斜夷文		30-1
4	A-115	石	W 320・N20	圓文土器	深鉢	1)縁部-沈綱文区画、斜夷文 2)縁部-山形小切欠、沈綱文区画、斜夷文		30-3
5	A-76	石	W 320・N20	圓文土器	深鉢	1)縁部-山形小切欠、沈綱文区画、斜夷文 2)縁部-沈綱文区画、斜夷文		30-4
6	A-191	石	W 320・N20	圓文土器	深鉢	1)縁部-山形小切欠、沈綱文区画、斜夷文 2)縁部-小切欠、斜夷文区画、沈綱文		30-5
7	A-105	石	W 320・N20	圓文土器	深鉢	1)縁部-小切欠、斜夷文区画、沈綱文区画、上反繩文 2)縁部-斜夷文		30-6
8	A-102	石	W 320・N20	圓文土器	深鉢	1)縁部-斜夷文区画、斜夷文、上反繩文 2)縁部-斜夷文		30-7
9	A-50	石	W 320・N10	圓文土器	深鉢	1)縁部-斜夷文区画、斜夷文、上反繩文 2)縁部-斜夷文		30-8
10	A-104	石	W 320・N20	圓文土器	深鉢	1)縁部-斜夷文区画、斜夷文、上反繩文 2)縁部-沈綱文区画、道「丁」字状文、上反繩文		30-9
11	A-177	石	W 320・N10	圓文土器	深鉢	1)縁部-斜夷文区画、斜夷文、上反繩文 2)縁部-沈綱文区画、道「丁」字状文、上反繩文		30-10
12	A-280	石	W 320・N10	圓文土器	深鉢	1)縁部-斜夷文区画、斜夷文、上反繩文 2)縁部-沈綱文区画、斜夷文、上反繩文	A-38A・A-38Cと同一 A-38A・A-38Dと同一	30-11 30-12
13	A-153	石	W 320・N10	圓文土器	深鉢	1)縁部-斜夷文区画、斜夷文、上反繩文 2)縁部-沈綱文区画、道「丁」字状文、上反繩文		30-13
14	A-151	石	W 320・N10	圓文土器	深鉢	1)縁部-斜夷文区画、斜夷文、上反繩文 2)縁部-沈綱文区画、斜夷文、上反繩文		30-14
15	A-38C	石	W 320・N10	圓文土器	深鉢	1)縁部-斜夷文区画、斜夷文、上反繩文 2)縁部-沈綱文区画、斜夷文、上反繩文		
16	A-38A	石	W 320・N10	圓文土器	深鉢	1)縁部-斜夷文区画、斜夷文、上反繩文 2)縁部-沈綱文区画、斜夷文、上反繩文		

第70図 IX層出土土器（2）



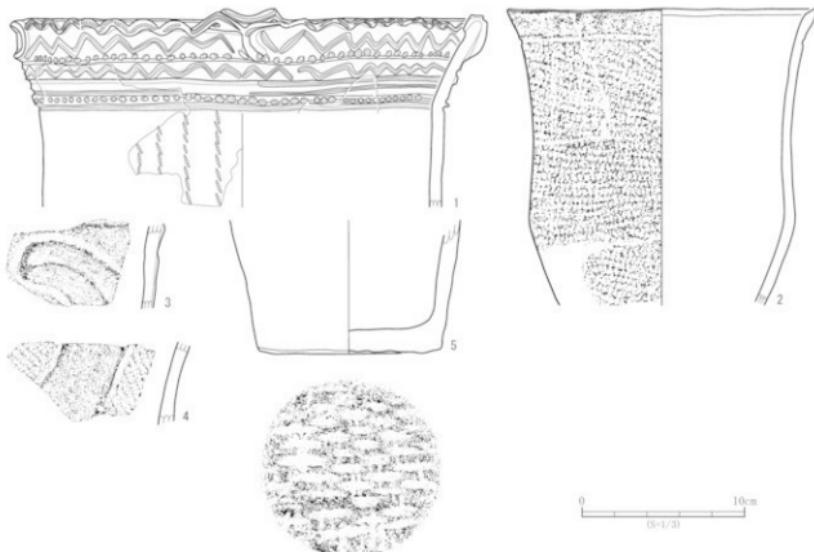
No.	登錄番号	場所	遺跡・グリッド	種別	器種	文様等	備考	写真図版
1	A-380	N	W20+N20	陶文土器	器鉢	側部-沈没文・L型鉢底		30-15
2	A-39A	N	W20+N10B手	陶文土器	器鉢	側部-沈没文・直線状の凹面	A-39Bと同一	30-16
3	A-175	N	W20+N10	陶文土器	器鉢	側部-入幅「S」字状沈没文・H-L鉢底		30-17
4	A-149	N	W20+N10	陶文土器	器鉢	側部-ナギ底-扇形代表		30-18
5	A-203	IX	W20+N10	陶文土器	器鉢	側部-ナギ底-扇形代表		30-19
6	A-140	IX	W20+N10	陶文土器	器鉢	側部-ナギ底-扇形代表		-
7	P-19	IX	W20+N10	下削円錐	上製品	L型沈没文・厚底底面	37×33×10mm 1kg	30-20
8	P-20	IX	W20+N20	下削円錐	上製品	直線文	33×32×9mm 10g	30-21
9	A-803	X	W30+N0	陶文土器	器鉢	口縁部-LR鉢底	[1]19号部-LR鉢底	30-22

第71図 IX層出土土器(3)・X層出土土器

点、砾器1点、その他2点であり、この内の石器2点、石錐1点、石匙3点、不定形石器6点、石核1点、磨石2点、敲石1点、凹石3点、砥石1点、石皿1点を第82~84図に図示した。

第82図1・2は石器である。いずれも脚部あるいは先端部を欠損する。1は側縁が直線状に広がり、脚部で内湾し、基部の抉りが大きい。2は側縁が緩やかに湾曲するもので基部の抉りが顕著である。3は錐部を欠損した石錐である。縁辺部に二次加工を加えてつまみ部を作出している。4~6は石匙である。5はつまみ部の抉りが残っていることから石匙とした。いずれも正面に二次加工を施して刃部を作出しているものであり、刃部の形状はいずれも縦型である。

第82図7~第83図3は不定形石器である。7は全周に鈍角の連続した二次加工を施して急角度の刃部を作出した掻器である。下端部に円形の刃部を作出している。また、表裏に顯著な光沢が観察された。8は側縁に二次加工を施して鋭角な刃部を作出した削器である。9は側縁部を中心に比較的急角度の二次加工を施して刃部を作出した削器としたが、上半部を欠損した石匙の可能性も考えられ、器体の表裏に光沢が観察された。第83図1・2は素材の縁辺部の一部に二次加工を施したものである。3は石刀状の縦長剥片を素材とした不定形石器で、両側縁に刃こぼれ状の小剥離が連続して認められる。4は石核である。全体の形状からやや厚手の剥片を用いたものと考えられ、剥片剥離作業は器体の正面を中心に行われ、打面転移を繰り返しながら多方向からの剥片剥離作業が行われている。5・6は磨石である。いずれもやや扁平な梢円錐の表裏の平坦面に研磨痕が認められ、6には研磨作業よりも古い凹みが表裏の中央部にある。7は敲石である。やや扁平な棒状砾の下端に敲打痕がある。第84図1~3は凹石であ



No.	登録番号	場所	遺跡・グリッド	種別	器種	文様等	備考	写真版
1	A-524	下ノ内	SX69	石器	深鉢	口縁一部縦一「V」字状切打・波状鋸歯文・押し彫文・削り文・研磨痕・研磨文	30-23	
2	A-805	下ノ内	W 320・N20	石器	深鉢	口縁一部縦一沈波文・L字彫文	30-24	
3	A-81A	下ノ内	W 315・N10	石器	深鉢	脚部・横状鋸歯文	A-84Bと同一	-
4	A-81B	下ノ内	W 320・N20	石器	深鉢	脚部・横沈波文・L字彫文	A-84Aと同一	-
5	A-196	下ノ内	W 320・N20	石器	深鉢	脚部・ナギ・底部・網代模		30-25

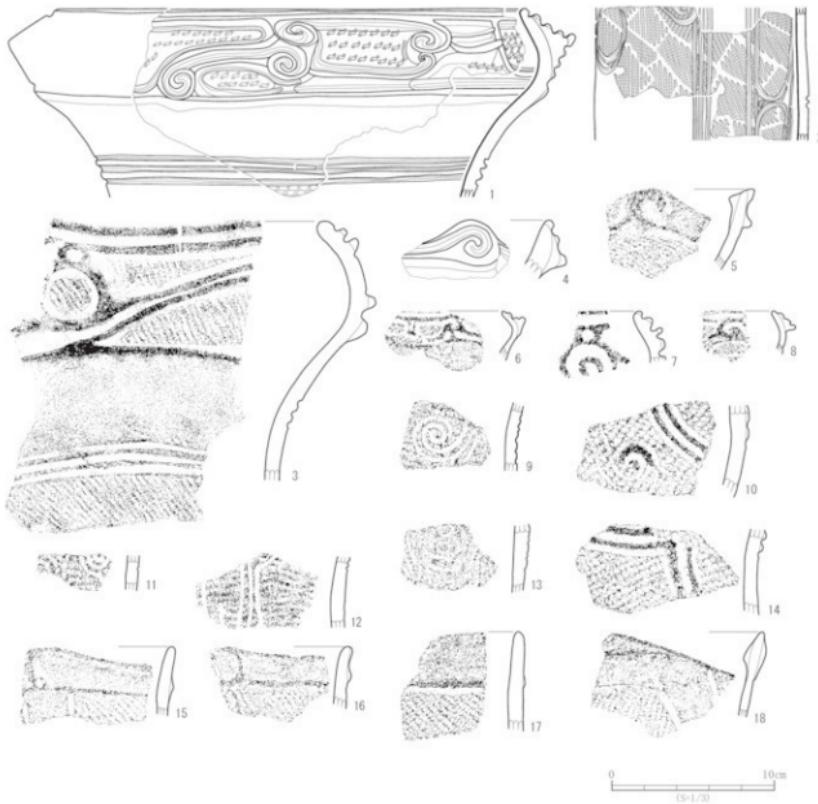
第72図 IX層～X層出土土器

る。3点ともやや扁平な円窪の表裏に1ヶ所から3ヶ所の凹みが認められ、3には凹みより古い研磨痕が表裏に観察される。4は砥石である。大型扁平窪で、縁部は全て欠損している。研磨痕は器体正面の広い範囲に顕著に認められる。5は石皿の破片で、大型扁平窪の片面が皿状に埋もるものである。

III～V層出土石器（第85・86図、図版35）

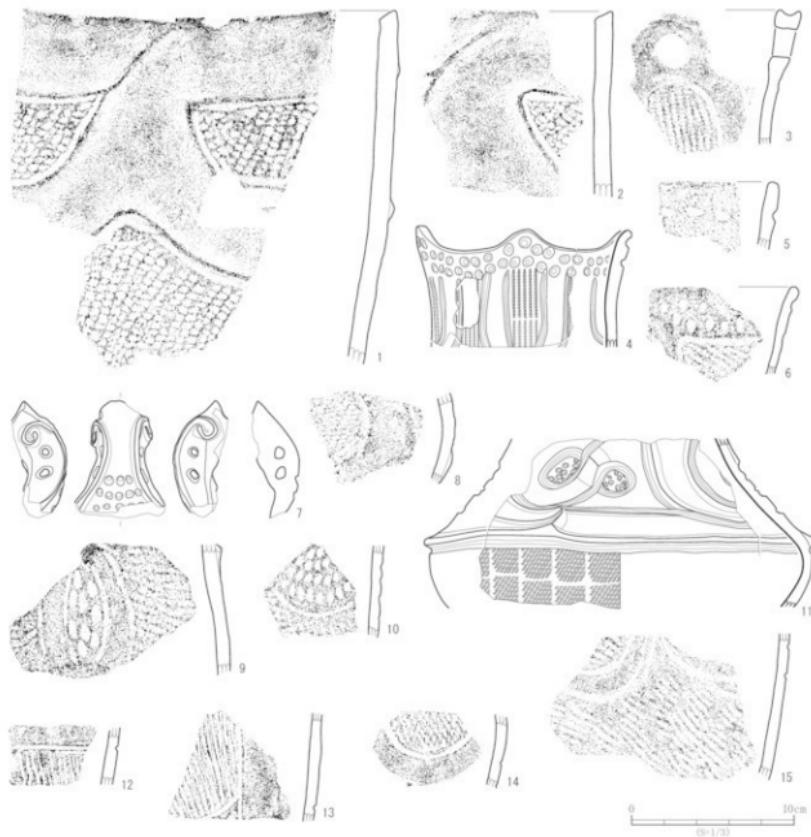
計49点である。器種別の内訳は石鍬2点、石錐1点、石匙2点、不定形石器4点、二次加工のある剥片8点、微細剥離痕のある剥片5点、剥片17点、磨石3点、凹石2点、敲石4点、石皿1点であり、そのうちの石錐1点、石錐1点、石匙2点、不定形石器1点、磨石1点、凹石1点、石皿1点を第85・86図に図示した。

第85図1は有茎石鍬である。調整加工は器体の両面に施される。両側縁が緩やかに湾曲し、基部はやや開き気味に茎部へとつながる。2は石錐である。素材の打面部側を錐部にしたものであり、つまみ部は欠損している。錐部の作り出しは裏面を中心に細かな二次加工によって作出されるが、残存するつまみ部には二次加工は施されていない。3は石匙である。素材の打面部側をつまみ部としている。調整加工はつまみ部では裏面に二次加工が施されているが、刃部では基本的に裏面から正面に向かう鋭角な二次加工が縁部を中心で施される。4・5は不定形石器である。4は刃部を中心に表裏に二次加工が施されており、刃部の形状はこの加工により端部が細くなる錐型で、刃部の左側縁は斜行する。5は端部を欠損するが、両側縁の連続する二次加工により刃部を作出したもので、削器である。6は磨石である。やや扁平な円窪の片面に研磨痕が認められる。7は凹石である。扁平な円窪の裏面に3ヶ所ずつの凹みが認められる。第86図1は石皿である。大型扁平窪の表裏に使用面が認められるものである。使



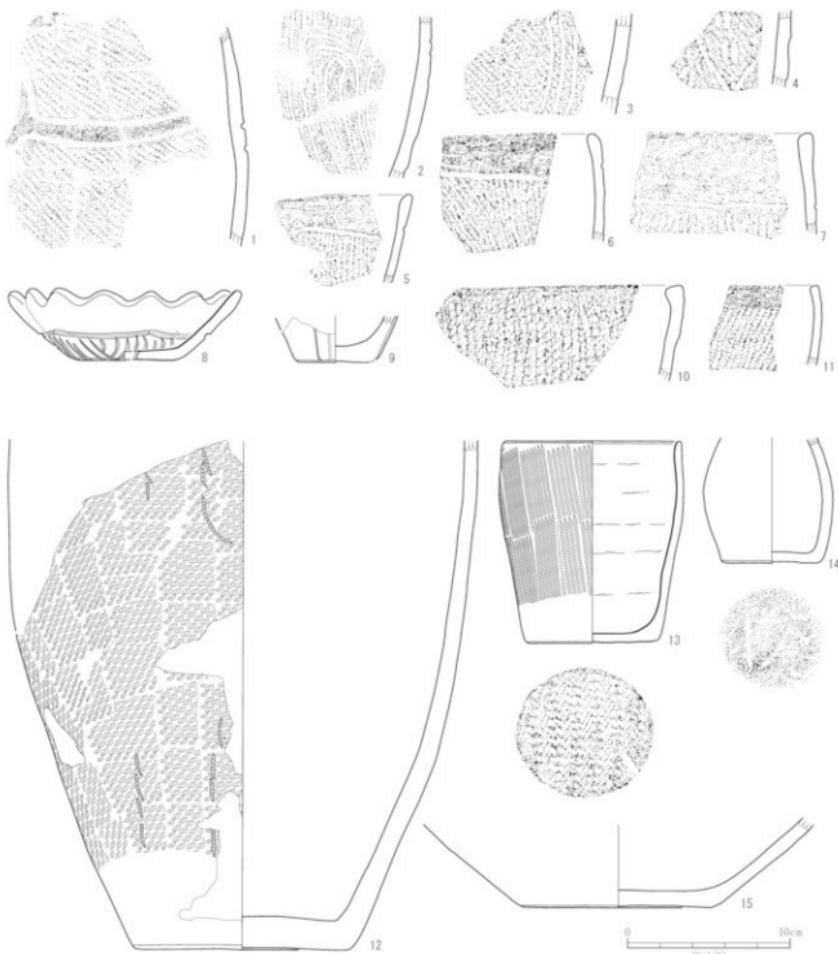
No.	登録番号	類	遺構・グリッド	種別	器種	文様等	備考	写真図版
1	A-736	Ⅲ	W 210・N 40	陶文土器	深鉢	口縁部-油唇沿沈面文X直、押江調文L1、面部-無文、側部-沈調文、足L調文	30-26	
2	A-240	Ⅲ	W 300・N 20	陶文土器	深鉢	側部-有神油唇沿沈面文、足L調文	30-2	
3	A-740	Ⅲ	W 300・N 30	陶文土器	深鉢	口縁部-油唇沿沈面文直、足L調文、面部-無文、側部-沈調文、足L調文	30-1	
4	A-361	Ⅲ	W 210・N 20	陶文土器	深鉢	口縁部-口沿突起、油唇沿沈面文	-	
5	A-472	Ⅲ	W 220・N 10	陶文土器	浅鉢	口縁部-口沿直角、油唇沿沈面文、足L調文	30-3	
6	A-731	Ⅲ	W 210・N 10	陶文土器	深鉢	口縁部-油唇沿沈面文直、足L調文、面部-無文	30-4	
7	A-737	Ⅲ	W 210・N 30	陶文土器	深鉢	口縁部-油唇沿沈面文、斜外文	30-5	
8	A-732	Ⅲ	W 210・N 25	陶文土器	深鉢	口縁部-油唇沿沈面文X直	30-6	
9	A-361	Ⅲ	W 210・N 20	陶文土器	深鉢	側部-油唇沿沈面文	30-7	
10	A-742B	Ⅲ	W 305・N 40	陶文土器	深鉢	側部-油唇沿沈面文、足L調文	30-8	
11	A-821	Ⅲ	W 300・N 20	陶文土器	深鉢	側部-油唇沿沈面文、足L調文	30-9	
12	A-296	Ⅲ	W 300・N 30	陶文土器	深鉢	側部-油唇沿沈面文、足L調文	30-10	
13	A-487	Ⅲ	W 220・N 20	陶文土器	深鉢	側部-油唇沿沈面文	30-11	
14	A-742A	Ⅲ	W 305・N 40	陶文土器	深鉢	側部-油唇沿沈面文、足L調文	A-742Bと同一	30-12
15	A-337B	Ⅲ	W 305・N 30	陶文土器	深鉢	口縫部-油唇直、斜外文、沈調文、足L調文	A-337Aと同一	30-13
16	A-337A	Ⅲ	W 305・N 30	陶文土器	深鉢	口縫部-油唇直、斜外文、沈調文、沈調文、足L調文	A-337Bと同一	30-14
17	A-332	Ⅲ	W 305・N 30	陶文土器	深鉢	口縫部-油唇直、斜外文	30-15	
18	A-499	Ⅲ	W 220・N 20	陶文土器	深鉢	口縫部-小突起、斜外文、沈調文、足L調文	内側に灰化物付着	30-16

第73図 X層出土土器（1）



No.	登録番号	種類	遺物・グリッド	性別	器種	文様等	備考	写真枚数
1	A-5150	XI	W 320・N20	陶文土器	深鉢	口縁部-押沈織文区画、足上織文	A-515Aと同一	31-17
2	A-515A	XI	W 320・N20	陶文土器	深鉢	口縁部-押沈織文区画、足上織文	A-515Bと同一	31-18
3	A-224	XI	W 300・N20	陶文土器	深鉢	口縁部-腹版状突起、貫通孔、沈織文区画、足上織文		31-19
4	A-542	XI	W 320・N10	陶文土器	深鉢	口縁部-山形突起、内折斜面文、沈織文区画、「U」字状無文帶、L字形文		31-20
5	A-581	XI	W 320・N20	陶文土器	深鉢	口縁部-刺突文、L足織文		31-21
6	A-492	XI	W 320・N20	陶文土器	深鉢	口縁部-波打丁目、刺突文、沈織文区画、L足織文		31-22
7	A-409	XI	W 310・N30	陶文土器	深鉢	史記-強羅文、刺突文		31-23
8	A-507	XI	W 320・N20	陶文土器	深鉢	側部-強羅文区画、足上織文		31-24
9	A-531	XI	W 320・N30	陶文土器	深鉢	側部-強次郎織文、沈織文区画、刺突文、L足織文		31-26
10	A-578	XI	W 330・N20	陶文土器	深鉢	側部-沈織文区画、刺突文、L足織文		31-25
11	A-552	XI	W 305・N20-30	陶文土器	盆	側部-強羅文区画、「O」字状無文帶、円形区画内に刺突文出現、足上織文		31-27
12	A-477B	XI	W 320・N20	陶文土器	深鉢	側部-刺突文、L足織文	A-477Aと同一	31-28
13	A-477A	XI	W 320・N20	陶文土器	深鉢	側部-沈織文区画、足上織文	A-477Bと同一	31-29
14	A-309	XI	W 305・N25	陶文土器	深鉢	側部-沈織文、L足織文		31-30
15	A-441	XI	W 310・N40	陶文土器	深鉢	側部-沈織文区画、L足織文		31-31

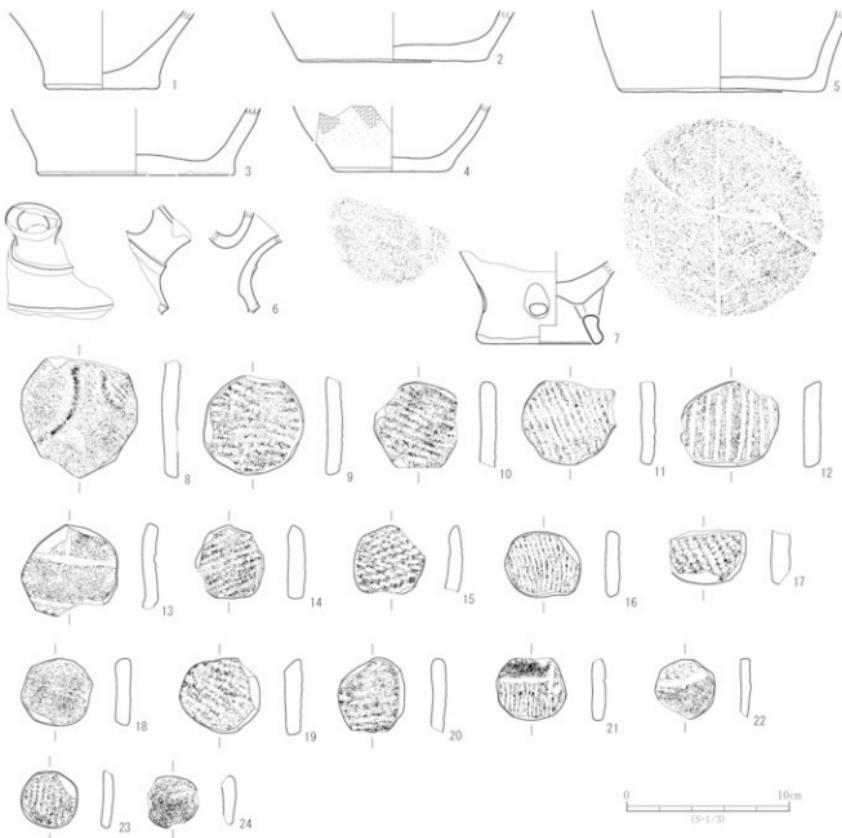
第74図 X層出土土器（2）



第75図 X層出土土器（3）

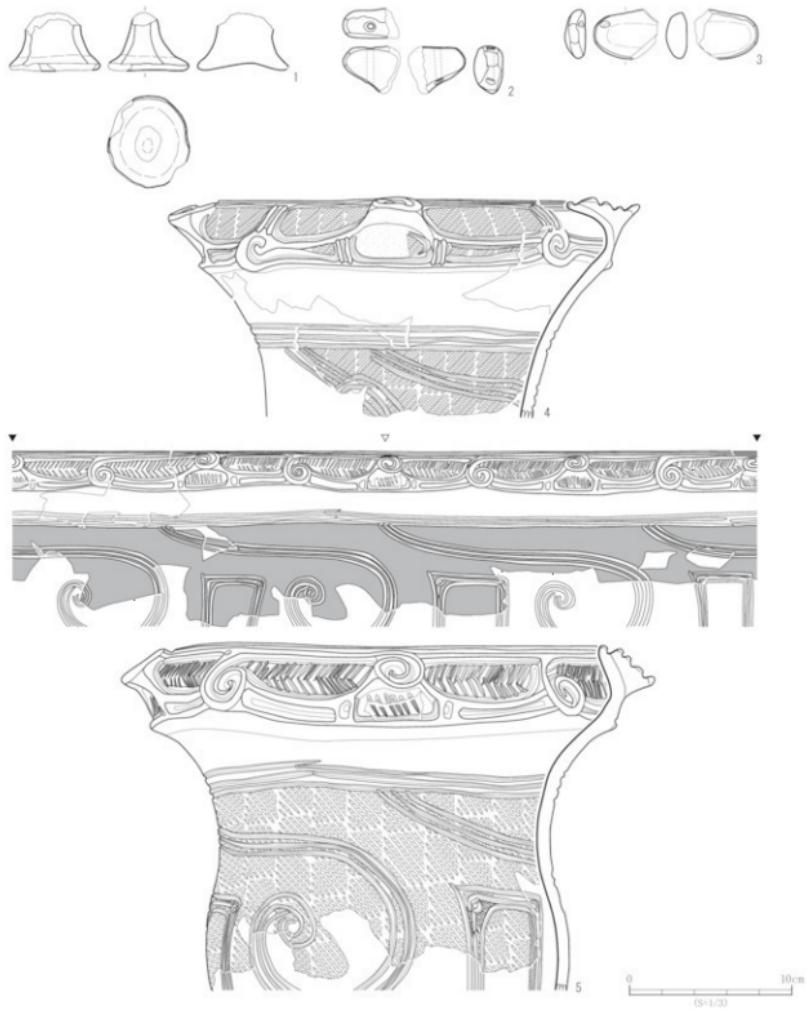
No.	登録番号	類別	遺構・アリーユ	種別	器種	文様等	備考	写真回数
1	A-253	Ⅲ	W305・310・N20・30	圓文土器	深鉢	側部-沈刷文・側面文・上口横文		31-32
2	A-594	Ⅲ	W320・N20	圓文土器	深鉢	側部-沈刷文		31-33
3	A-277	Ⅲ	W305・N20	圓文土器	深鉢	側部-沈刷文・上口横文		31-34
4	A-274	Ⅲ	W310・N20	圓文土器	深鉢	側部-沈刷文・全體布文		31-35
5	A-367	Ⅲ	W310・N20	圓文土器	深鉢	[上縁部] 沈刷文・上口横文		31-36
6	A-279	Ⅲ	W300・N30	圓文土器	深鉢	[上縁部] 沈刷文・上口横文		31-37
7	A-540	Ⅲ	W320・N30	圓文土器	深鉢	[上縁部] 沈刷文・上口横文		32-2
8	A-431	Ⅲ	W310・N30	圓文土器	小型浅鉢	[上縁部] 小口横状文 [側部] 沈刷文・底部-ナゲ	内外面に水彩模様。	32-1
9	A-231	Ⅲ	W305・N30	圓文土器	小型土器	側部-沈刷文・底部-ナゲ		32-3
10	A-495	Ⅲ	W320・N20	圓文土器	深鉢	[上縁部] 沈刷文		32-4
11	A-256	Ⅲ	W310・N20	圓文土器	深鉢	[上縁部] 上口横文	内外面に付着物あり。	32-5
12	A-211	Ⅲ	W300・305・N20・30	圓文土器	深鉢	側部-沈刷文・上口横文		32-6
13	A-92	Ⅲ	W320・N20	圓文土器	深鉢	側部-自然布文・底部-網代張		32-7
14	A-296	Ⅲ	W310・N25	圓文土器	小型土器	側部-ナゲ・底部-小數板		32-8
15	A-245	Ⅲ	W300・N20	圓文土器	浅鉢	側部-ナゲ・底部ナゲ		32-9

第4節 下ノ内遺跡1B区の調査



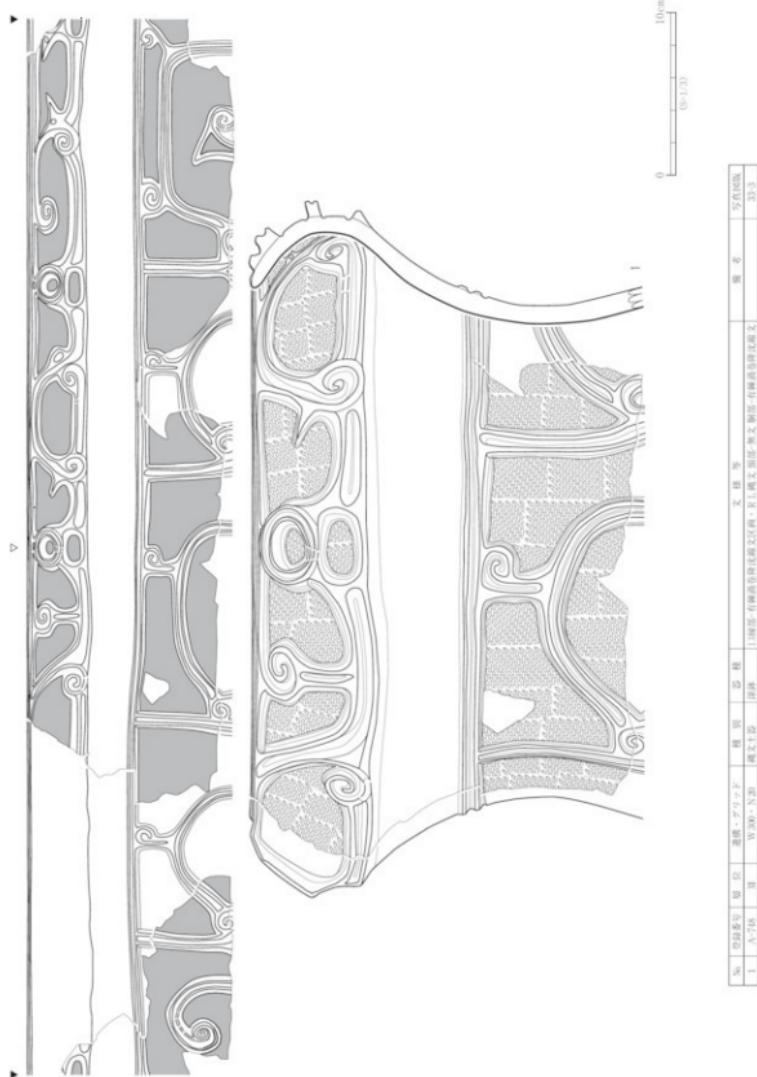
No.	登録番号	施 種	遺物・グリッド	種 別	部 位	文 標 等	備 考	写真図版
1	A-453	貝	W 310・N 40	貝殻土器	底鉢	脚部-ナデ 底部-ナデ	32-10	
2	A-203	貝	W 305・N 25	貝殻土器	底鉢	脚部-ナデ 成部-ナデ	-	
3	A-256	貝	W 310・N 30	貝殻土器	底鉢	脚部-深縫文 成部-ナデ	-	
4	A-144	貝	W 330・N 10	貝殻土器	底鉢	脚部-ナデ 植文 成部-木漿板	-	
5	A-513	貝	W 230・N 20	貝殻土器	底鉢	脚部-ナデ 植文 成部-木漿板	32-11	
6	A-592	貝	W 230・N 20	貝殻土器	口口部-側面	口口部-側面文	32-12	
7	A-405	貝	W 310・N 30	貝殻土器	口付-口部	脚-口付-ナデ	丸4-所あり	32-13
8	P-24	貝	W 210・N 30	貝殻品	上製円盤	脚部文-上製圓盤	71×20×10mm 53g	32-14
9	P-29	貝	W 305・N 30	貝殻品	上製円盤	L.R.椭文	64×60×9mm 42g	32-15
10	P-23	貝	W 320・N 20	貝殻品	上製円盤	足L.椭文	51×50×10mm 30g	32-16
11	P-25	貝	W 305・N 25	貝殻品	上製円盤	L.椭文	55×50×8mm 27g	32-17
12	P-28	貝	W 305・N 30	貝殻品	上製円盤	深縫文	58×50×10mm 36g	32-18
13	P-42	貝	W 230・N 10	貝殻品	上製円盤	深縫文-植文E.L.	55×53×8mm 27g	32-19
14	P-28	貝	W 230・N 10	貝殻品	上製円盤	足L.椭文	45×30×11mm 24g	32-20
15	P-24	貝	W 300・N 20	貝殻品	上製円盤	椭文	41×33×9mm 16g	32-21
16	P-32	貝	W 310・N 25	貝殻品	上製円盤	L.椭文	45×29×9mm 18g	32-22
17	P-30	貝	W 310・N 20	貝殻品	上製円盤	L.椭文	47×33×12mm 23g	32-23
18	P-41	貝	W 230・N 10	貝殻品	上製円盤	深縫文 E.R.	48×41×11mm 24g	32-24
19	P-43	貝	W 330・N 20	貝殻品	上製円盤	ナデ-ミガキ	43×41×10mm 21g	32-25
20	P-25	貝	W 310・N 30	貝殻品	上製円盤	L.椭文文?	44×30×9mm 17g	32-26
21	P-36	貝	W 310・N 30	貝殻品	上製円盤	深縫文-貝然ホホ文	41×36×8mm 14g	32-27
22	P-29	貝	W 230・N 10	貝殻品	上製円盤	深縫文	36×35×6mm 8g	32-28
23	P-26	貝	W 305・N 30	貝殻品	上製円盤	足L.椭文	33×33×6mm 8g	32-29
24	P-40	貝	W 320・N 20	貝殻品	上製円盤	ナデ-ミガキ	31×30×9mm 7g	32-30

第76図 X層出土土器（4）

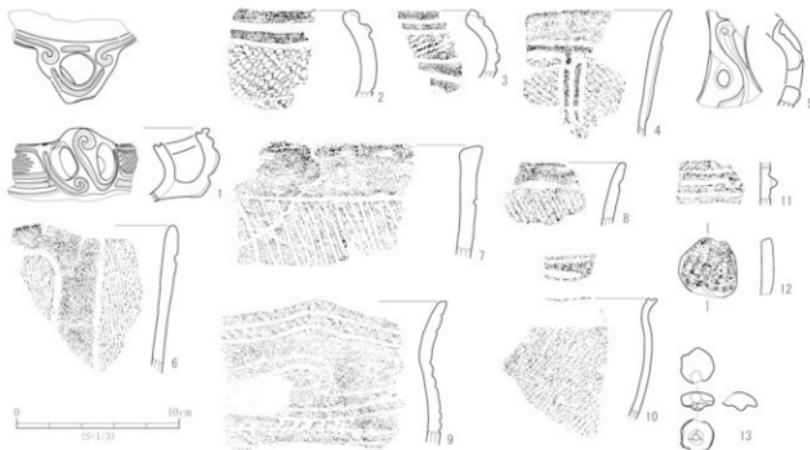


No.	登録番号	層	地	遺跡・グリッド	種別	器種	文様等	備考	写真回数
1	P-2	Ⅲ		W 310・N30	土器品	土偶	脚部-ナギ・ミガキ		32-31
2	P-21	Ⅲ		W 310・N20	土器品	土偶	脚部-ナギ・ミガキ	孔あり(背通)	32-32
3	P-4	Ⅲ		W 310・N30	土器品	土偶	脚部-ナギ・ミガキ	孔あり。	32-33
4	A-729	Ⅲ		W 300・N20	陶文土器	深鉢	口縁部-酒呑舞旋涡文、LR横文 脚部-無文 脚部-浅縞文・LR横文		33-1
5	A-749	Ⅲ・Ⅹ		W 300・N20	陶文土器	深鉢	口縁部-酒呑舞旋涡以西、矢羽根状浅縞文 脚部-無文 脚部-平行浅縞文-酒呑舞旋涡		33-2

第77図 X層出土土器（5）・XI層出土土器（1）



第78図 収留出土土器 (2)



No.	登録番号	種類	遺構・グリッド	種別	器種	文様等	備考	写真版
1	A-600	III	SK72	圓文土器	深鉢	1)縁部-渦巻突起、波出縁沈繩文、L R繩文	30-4	
2	A-739	III	W 310-N 20	圓文土器	深鉢	1)縁部-渦巻繩文、R L繩文	30-5	
3	A-649	III	SK95 2号	圓文土器	深鉢	1)縁部-渦巻文直角、R L繩文	30-6	
4	A-622	III	SK85 1号	圓文土器	深鉢	1)縁部-側面-渦巻文、L R繩文	30-7	
5	A-9	III	-	圓文土器	深鉢-把手	奥縁-渦巻縫合文、円孔	30-8	
6	A-602	III	-	圓文土器	深鉢	1)縁部-渦巻文直角、L R繩文	30-9	
7	A-669	III	SK103 1号	圓文土器	深鉢	1)縁部-渦巻文	30-10	
8	A-664	III	SK103 1号	圓文土器	深鉢	1)縁部-渦巻文、L R繩文	30-11	
9	A-7	III	W 320-N 0	圓文土器	深鉢	1)縁部-側面突起、渦巻文縫合、沈繩文、削目、R L繩文	30-12	
10	A-5	VII	W 340-N 0	圓文土器	深鉢	1)縁部-渦巻文、L R繩文	30-14	
11	A-15	III	SK21	圓文土器	深鉢	側部-粗底付文-平行沈繩文、L R繩文	30-12	
12	P-6	III	-	土製品	土製円盤	繩文貝L	35×35×7mm 10g	30-15
13	P-1	V	SK66 南西溝	土製品	土製円盤	キノコ形土製品	30-16	

第79図 III～VII層出土器

用面の一部には自然面の凹みが残されている。また、被熱によるものと考えられる黒変が認められる。

2) 弥生時代（第87図、図版36）

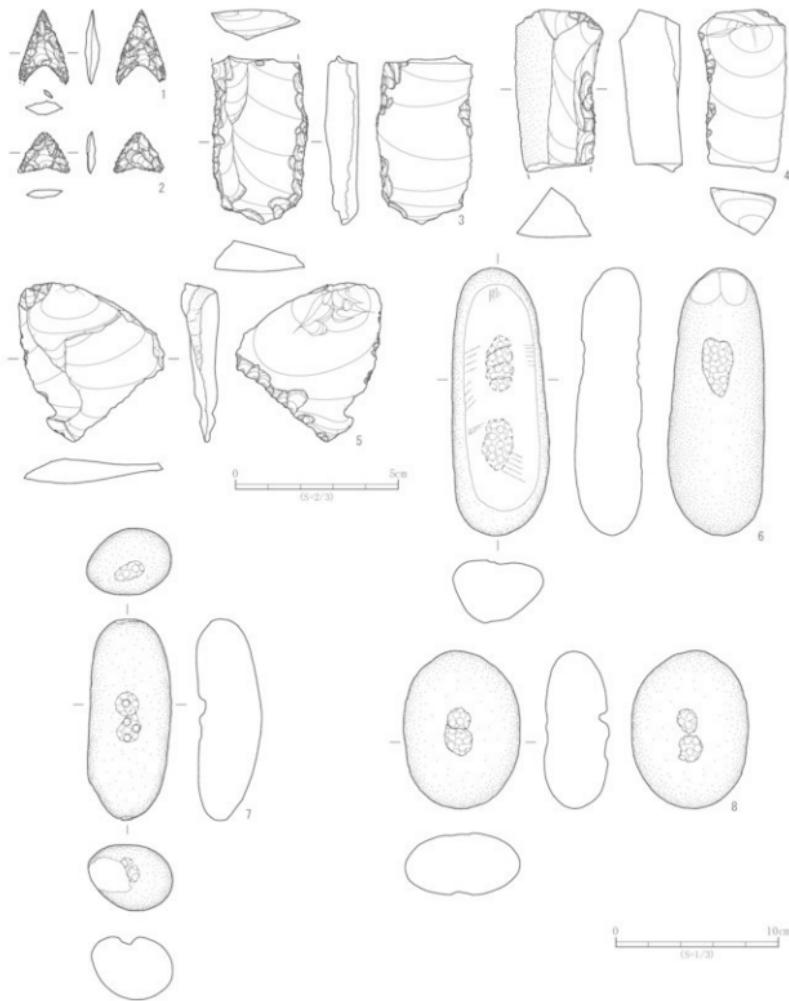
弥生時代の遺構は検出されなかったが、弥生土器が158点出土し、9点を図示した。第87図1～3は口縁部、4は頸部、5～8は胴部の破片である。やや深い沈繩文が弧状に描かれる。1は口唇部及び体部にR L繩文が施され、2は折り返し口縁である。4は交互刺突により波状文となる。6は壺で薄い作りである。9の底部には木葉痕が残る。いずれも文様・施文の特徴から後期の天王山式と考えられる。

10は所謂アメリカ式石鑿の破片である。右脚部の破片と考えられ、側縁部脚部付近の抉りが顕著に認められる。調整加工は残存部では縁辺部を中心に施されている。被熱により破損したと考えられる痕跡が観察される。

3) 古墳時代～古代（第89図、図版36） 15点出土しており、以下の10点を第89図に図示した。1・2は須恵器の环である。平底で、底部はハラ切りである。口径と底径との法量比も大きいことから8世紀の後半の所産と考えられる。3はロクロ土師器長胴甌である。4は表土から出土した土師器环である。丸底である。5は高坏の脚部である。6は土師器壺の胴部下半～底部片である。7は鉄鑿である。刃部断面はやや扁平な棱丸造りで、頭部は形態化している。茎部に樹皮巻きが施されている。8～10は砥石である。8は断面三角形で、三面ともに使用されており、端部は摩り切れている。9・10はともに上部を欠損し、正面・両側面・裏面が使用されている。

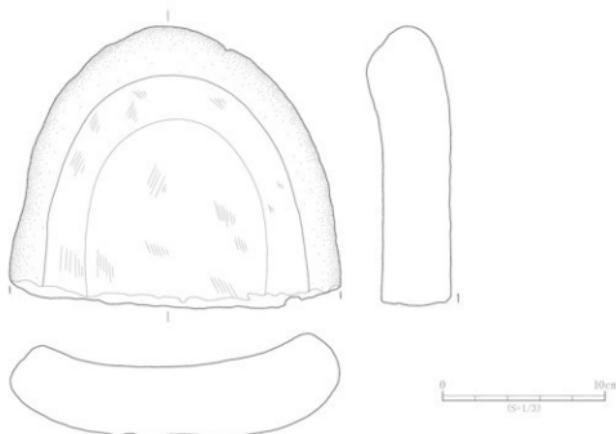
4) 中・近世（第88図、図版36） 7点出土しており、以下の5点を第88図に図示した。1～3は舶載磁器で、

第4節 下ノ内遺跡1B区の調査



No.	登録番号	種類	遺構・グリッド	種別	器種	石種	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	備考	写真図版
1	Ka-a3-3	B	W330-N10	打製石器	石器	珪質頁岩	(2.0) × 1.5 × 0.4 (0.7)		凸基面、両翼部部分欠損。	34-1
2	Ka-a3-4	B	W330-N10	打製石器	石器	珪質頁岩	(1.2) × 1.5 × (0.3) (0.4)		凸基面、両翼部端部欠損。	34-2
3	Ka-e1-4	B	西平	打製石器	不整形石器	珪質頁岩	(5.1) × (2.9) × (1.0) (18.8)		削器、左翼状剥片素材、上部欠損。	34-3
4	Ka-e1-5	B	W330-N10	打製石器	不整形石器	珪質頁岩	(4.9) × (2.7) × (1.0) (23.8)		削器、右翼状剥片素材、下部欠損。	34-4
5	Ka-e1-6	B	W320-N10	打製石器	不整形石器	珪質頁岩	4.8 × 4.4 × 1.2 14.6		削器、剥片素材。	34-5
6	Kc-a4	B	W320-N20	砸石器	砸石	安山岩	16.3 × 5.9 × 4.1 (533.0)		磨1+, 破5+1。	34-7
7	Kc-e1-1	B	W330-N10	砸石器	砸石	安山岩	12.2 × 5.1 × 3.8 298.0		磨1+, 破2+0。	34-6
8	Kc-h1	B	W330-N20	砸石器	砸石	安山岩	9.6 × 7.1 × 3.9 355.0		磨2+2。	34-8

第80図 IX層出土石器（1）

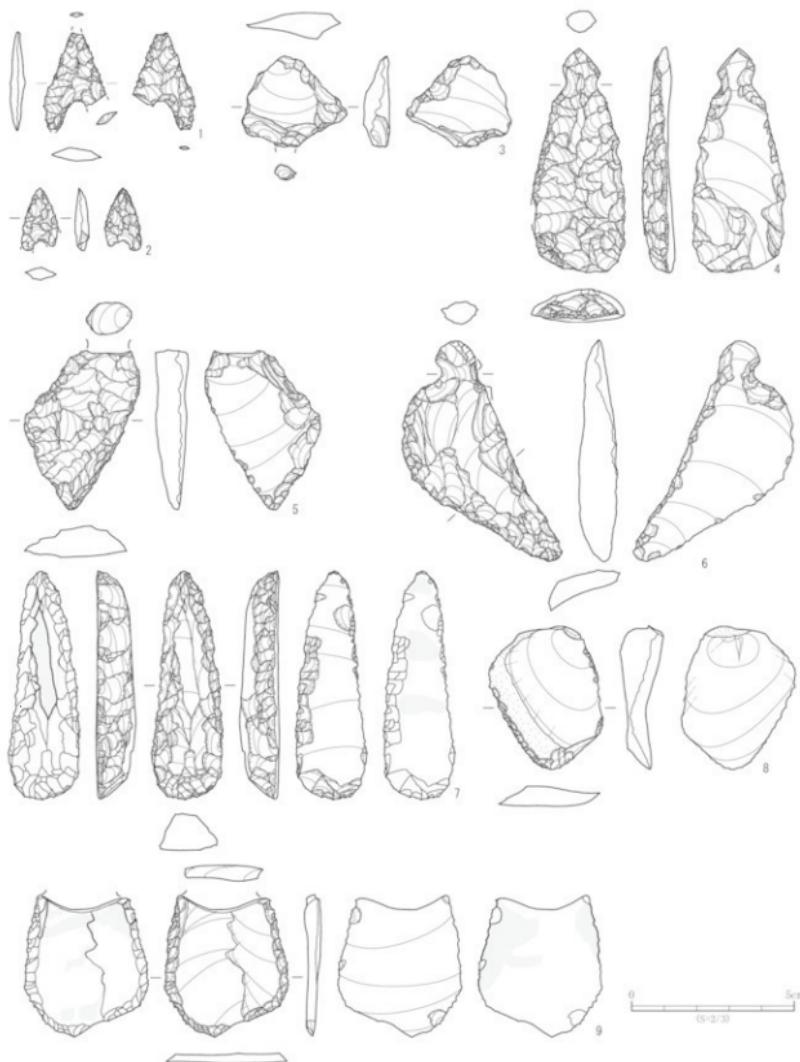


No.	登録番号	類	遺構・グリッヂ	種	判	石 材	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	備 考	写真図版
1	Kc-f-1	B	W 320・N 20	陶石器	石瓶	安山岩	(17.2) × (20.1) × (6.2)	(2,300)	根1+0、側面突起あり、下部欠損。	34-9

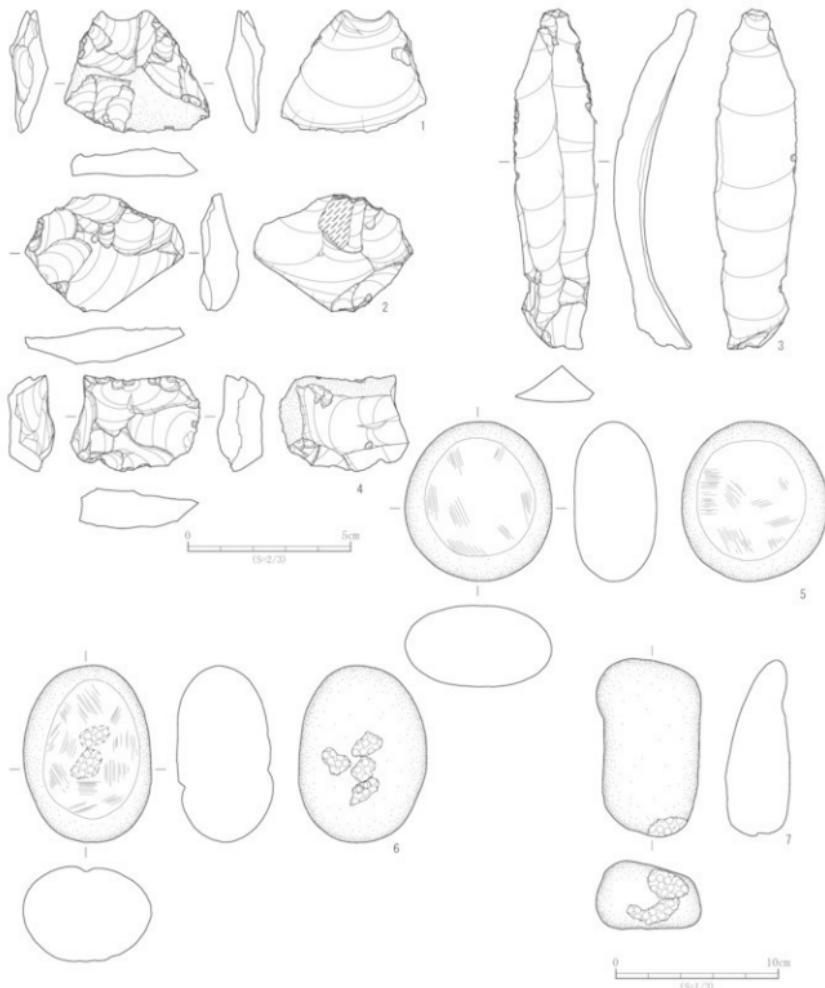
第81図 IX層出土石器（2）

1は龍泉窯系青磁碗の底部で軸調からIあるいはII類に分類される。2は龍泉窯系青磁碗連弁文碗の口縁部破片でII類に分類される。1・2とも13世紀代から14世紀前半代の製品と思われる。3は明代の染付小皿で口唇部の内側に四方撚文が染付されている。16世紀代の製品である。4は岸窯系の水注で灰釉が施釉されている。5は志野織部輪花皿で、見込みに緑釉と鉄釉により意匠不明の文様が描かれている。17世紀前半代の製品と思われる。

第4節 下ノ内遺跡1B区の調査



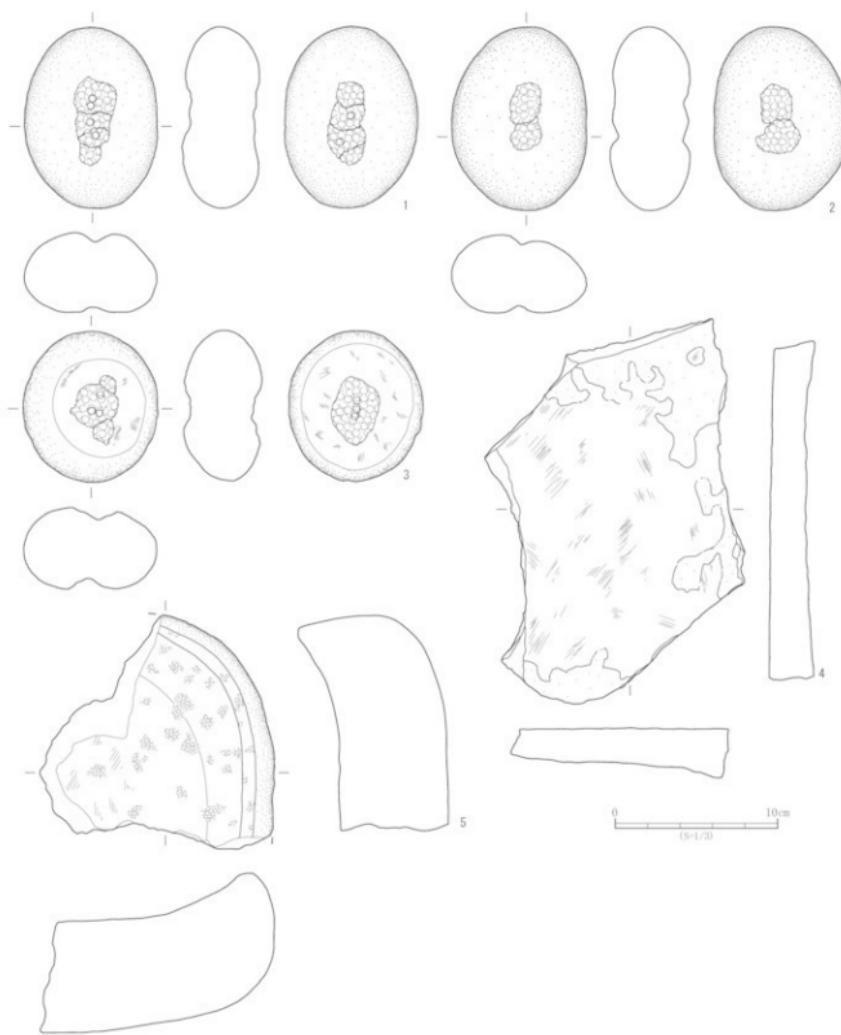
No.	登錄番号	層	遺跡・グリッド	種別	器種	石種	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	圖考	写真図版
1	Ka-a3-5	XI	W300-N20	打製石器	石核	珪質頁岩	(3.0) × (1.9) × (1.2)		円錐形、先端二面削部分欠損。	34-10
2	Ka-a3-7	XI	W300-N25	打製石器	石核	石英	(2.0) × (1.2) × (0.8)		円錐形、両側部欠損。	34-11
3	Ka-a2-2	XI	W300-N25	打製石器	石核	珪質頁岩	(2.8) × (3.2) × (0.8)	(5.2)	茎部欠損。	34-12
4	Ka-e1-1	XI	W330-N20	打製石器	石核	珪質頁岩	6.7 × 2.8 × 1.0	(16.8)	範型、左側部部分欠損。	34-13
5	Ka-e3-1	XI	W310-N20	打製石器	石核	珪質頁岩	(4.8) × (3.5) × (1.0)	(14.6)	範型、刃部斜行、つまみ部欠損。	34-14
6	Ka-e3-2	XI	W330-N20	打製石器	石核	珪質頁岩	6.7 × 4.9 × 1.2	20.8	範型、刃部斜行、右側部部分欠損。	34-15
7	Ka-e2-1	XI	W305-N30	打製石器	不定形石器	珪質頁岩	6.9 × 2.1 × 1.2	19.6	棒器、表面に光沢あり。	34-16
8	Ka-e1-7	XI	W310-N20	打製石器	不定形石器	珪質頁岩	4.3 × 3.5 × 1.4	12.6	棒器。	34-17
9	Ka-e1-8	XI	W330-N10	打製石器	不定形石器	珪質頁岩	(4.3) × 3.8 × (0.5)	(7.7)	棒器、上部欠損。表面に光沢あり。	34-18



No.	登錄番号	層	遺構・アリット	種	器種	石種	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	備考	写真図版
1	Ka-e-9	XI	W310・N30	[打製石器]	不定形石器	珪質頁岩	27×45×12	13.2	断部。	35-1
2	Ka-e-10	XI	W305・N25	[打製石器]	不定形石器	珪質頁岩	41×39×12	36.4	断部。	35-2
3	Ka-e-11	XI	W305・N25	[打製石器]	不定形石器	頁岩	10.3×26×26	27.0	[U]、鍬先石刃素材。	35-4
4	Ka-m-1	XI	W310・N30	[打製石器]	石核	珪質頁岩	29×39×14	15.8	酒片素材の可能性あり。	35-3
5	Kc-e-5	XI	W310・N30	[砸石器]	砸石	安山岩	98×90×50	625.0	砸片1。	35-5
6	Kc-e-6	XI	W305・N25	[砸石器]	砸石	安山岩	10.9×7.8×5.9	128.0	砸片1+0, 破片4。	35-6
7	Kc-e-7	XI	W300・N20	[砸石器]	砸石	安山岩	11.0×6.4×42	445.0	砸片2。	35-7

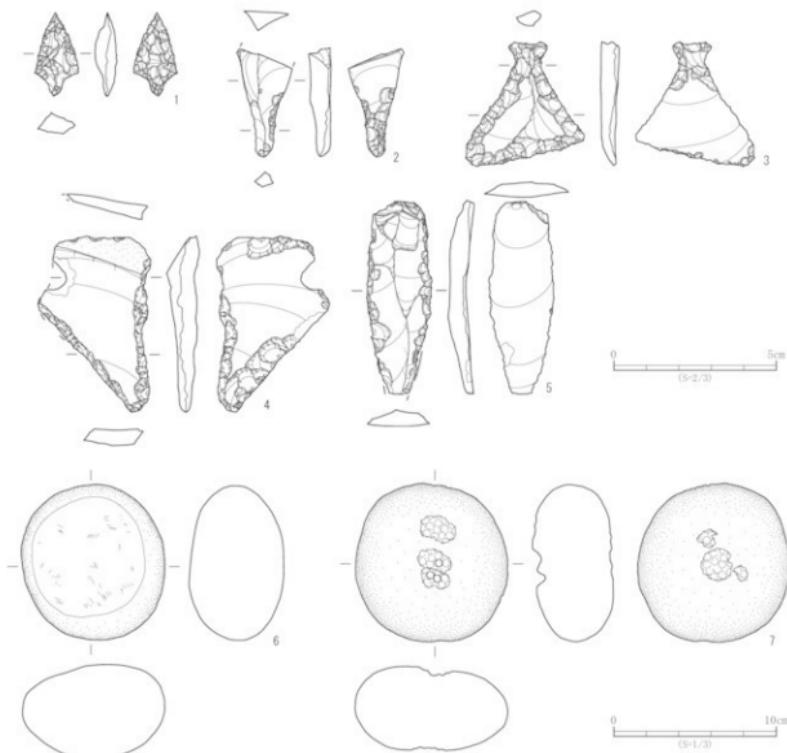
第83図 X層出土石器（2）

第4節 下ノ内遺跡1B区の調査



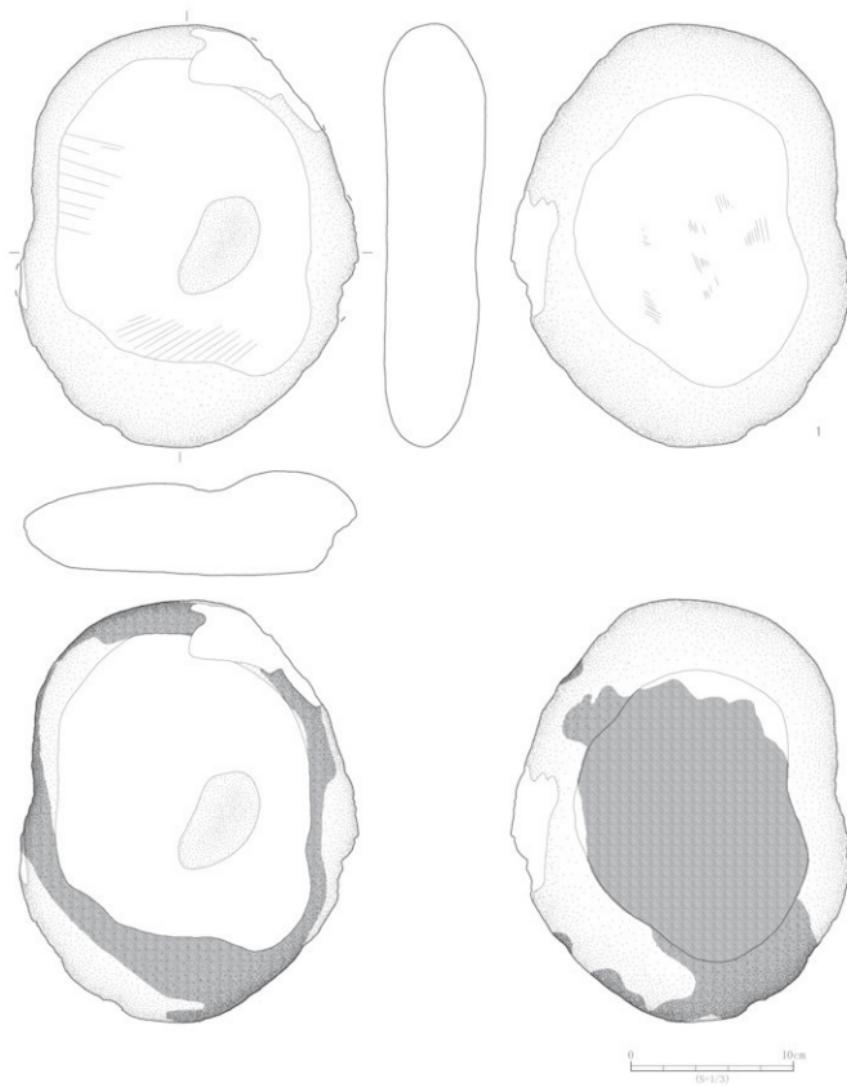
No.	登録番号	規 位	遺構・グリッド	種 別	器 標	石 材	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	備 考	写真回数
1	Kc-b-2	XI	W 300・N 20	埋石器	円石	安山岩	11.1×8.2×4.9	523.0	Pt4+4.	35-8
2	Kc-b-3	XI	W 300・N 20	埋石器	円石	安山岩	11.3×8.3×4.9	513.0	Pt2+2.	35-9
3	Kc-b-4	XI	W 300・N 30	埋石器	円石	安山岩	9.2×8.3×5.0	418.0	Pt3+1. 縁1+1.	35-10
4	Kc-d-1	XI	W 310・N 40	埋石器	砾石	安山岩	(21.7)×(15.9)×(3.4)	(1,520.0)	縁1+0. 縁辺部欠損。	35-12
5	Kc-d-2	XI	W 300・N 30	埋石器	石板	安山岩	(33.0)×(14.4)×(9.0)	(1,490.0)	縁1+0. 縁面津みあり。部分破片。	35-11

第B4図 XI層出土石器（3）



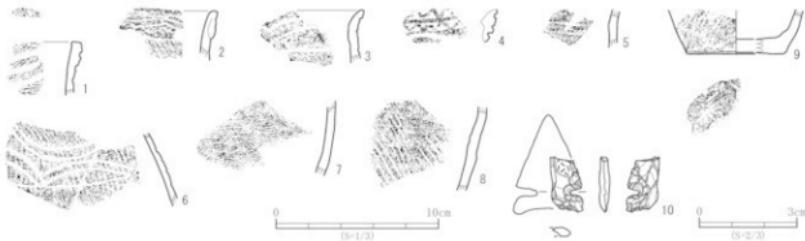
No.	登録番号	層位	遺構・グリッド	種別	器種	石種	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	備考	写真図版	
1	Ka-el-1	V	W340-N10	打製石器	石核	玉髓	26×14×7	14	有浮雕。	36-13	
2	Ka-el-3	N	SII51床面	打製石器	石核	珪質白岩	(3.0)×(1.7)×(0.7)	(1.9)	つまみ部欠損。	36-14	
3	Ka-el-1	V		小核	打製石器	石核	珪質白岩	3.8×3.6×0.5	4.6	横型。	36-15
4	Ka-el-11	B	P155	打製石器	不定形石器	珪質白岩	5.3×4.0×1.0	(9.5)	削芯。左側縫部分欠損。	36-16	
5	Ka-el-H-12	B	SD6-1層	打製石器	不定形石器	珪質白岩	(5.8)×2.0×0.8	(0.5)	削芯。底長辺片素材。下端部分欠損。	36-17	
6	Ke-w-7	B	SD9-1層	砸石器	磨石	安山岩	96×88×5.8	6050	磨1+0。	36-18	
7	Ke-w-5	B	SD6-5層	砸石器	凹石	安山岩	98×94×5.0	555.0	凹3+3。	36-19	

第85図 III~V層出土石器



第86図 Ⅲ層出土石器

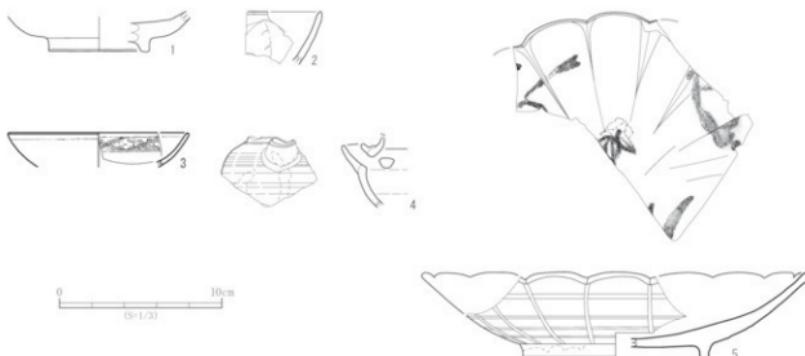
No.	登録番号	規 格	遺物・グリッド	種 別	器 様	石 材	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	備 考	写真版
1	Kc-f-3	Ⅲ	SD6 2列	擦石器	石核	安山岩	25.8×20.8×6.4	5.062(0)	鈍・L:扁平石核、横辺微削尖剥離、表面に擦痕による凹凸あり	添-20



No.	登録番号	種 位	遺物・グリッド	種 別	器 形	器 種	文 標 等	備 考	写真図版
1	B-154	V	S531 1層	陶牛子器	更・1層部	沈面文、RL輪文			36-1
2	B-17	B	S57 1層	陶牛子器	更・1層部	半熱帶文			36-2
3	B-153	V	S53 1層	陶牛子器	更・1層部	沈面文			36-3
4	B-151	V	W 210・N 20	陶牛子器	更・頭部	鈴面文、交叉斜刻文			36-4
5	B-135	V	S52 6層	陶牛子器	更・側面	半熱帶文			36-5
6	B-1	B-VI	-	陶牛子器	更・側面	沈面文、RL輪文			36-6
7	B-115	V	W 210・N 30	陶牛子器	更・頭部	RL輪文			36-7
8	B-68	V	W 210・N 30	陶牛子器	更・側面	半熱帶文			36-8
9	B-143	V	S56 1層	陶牛子器	更・頭・足部	輪部・RL輪文、底部・木葉文			36-9

No.	登録番号	種 位	遺物・グリッド	種 別	器 形	石 種	石 組	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	備 考	写真図版
10	Ka-2d-1	Va	S1408 FC ⇒ 1層	打製石器	石器	珪質頁岩	(L7) × (1.0) × (0.2) - (0.5)			アメリカ式石器。	36-10

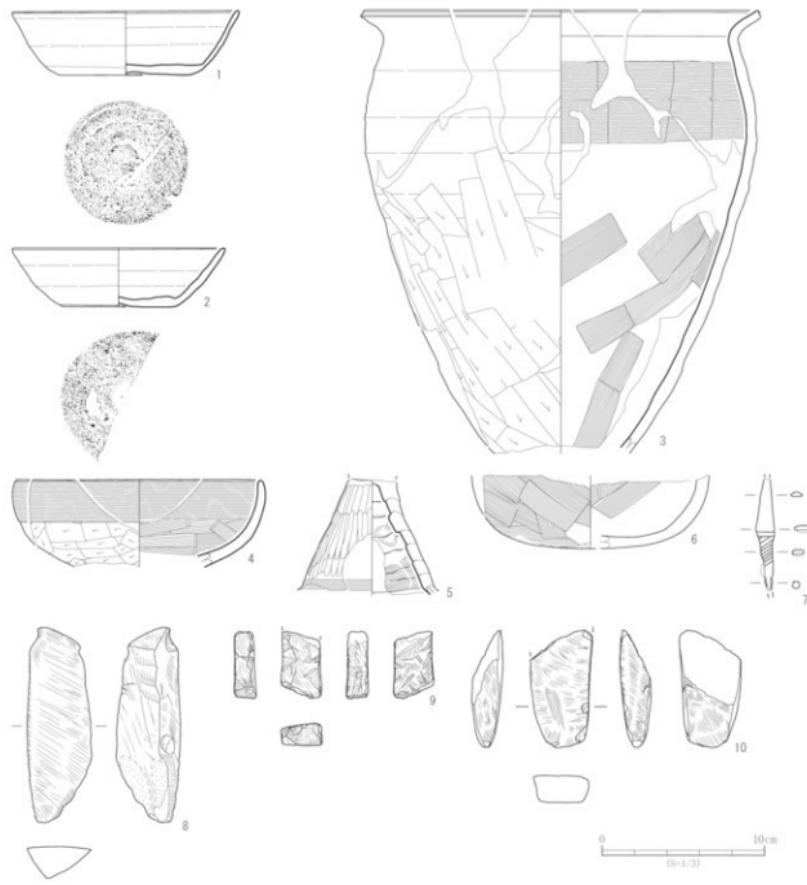
第87図 弥生時代出土遺物



No.	登録番号	種 位	遺物・グリッド	種 別	器 形	11件×灰付×器高(cm)	特 徴	来 地	時 期	写真図版
1	J-3	I	-	磁器	青磁碗	- × (6.2) × 2.1	ロクロ、青磁物、施朱紫名青磁1期	中国	13-14世紀前半	36-21
2	J-4	B	-	磁器	施朱紫文青磁碗	- × - × 高3.3	ロクロ、ハラヒヨウ上と朱書き、青磁、施朱紫青磁玉瓶	中国	13-14世紀前半	36-22
3	J-5	-	-	磁器	施付小瓶	(11.2) × - × 高2.1	ロクロ、青磁口縁部・瓶腹・内部・口縁部・内側・青磁文	中国	16世紀代	36-23
4	I-9	I	-	施釉陶器	水注	- × - × 高4.1	ロクロ、口付・瓶身・口付・内側・灰釉	台湾系	18世紀	36-24
5	I-10	I	W 200・N 20	施釉陶器	志野織部輪花瓶	口11.9×5.3	ロクロ・志野・輪花・志野・織部・輪花・志野・志野・輪花	日本・美濃系	17世紀前半	36-25

第88図 中・近世出土遺物

第4節 下ノ内遺跡1B区の調査



No.	登録番号	層	遺構・グリッド	種別	器種	寸法・底径・高さ(cm)	外面調整	内部調整	備考	写真図版
1	E-7	N	W 310+N20	須恵器	环	138×80×3.9	ロクロナデ・底部ベラ切り	ロクロナデ		30-11
2	E-8	N	W 294+N16	須恵器	环	132×68×3.6	ロクロナデ・底部ベラ切り	ロクロナデ		30-12
3	D-2	N	-	土器	束	[24.4]×[×]規272	ロクロナデ・ハラケズリ	ロクロナデ・ハラナデ		30-16
4	C-24	表土	-	土器	环	[14.8]×[×]規5.3	ハラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ハラナデ		30-13
5	C-25	N	W 310+N30	土器	高环	[×]×[規7.0]	ハラケズリ・ヨコナデ	指ナデ・シボリメ		30-15
6	C-26	N	W 307+N22	土器	束	[×]×[規4.5]	ハラナデ・ハラケズリ	ハラナデ		30-14

No.	登録番号	層	遺構・グリッド	種別	器種	寸法・底径・高さ(cm)	備考	写真図版
7	N-2	N	W 210+N20	鉄製品	鉄劍	6.9×1.1×0.3	横度合	30-17

No.	登録番号	層	遺構・グリッド	種別	器種	石	材	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	備考	写真図版
8	Kd-2	N	-	石製品	研石	繊灰岩	繊灰岩	120×38×20	88.0		30-18
9	Kd-4	N	-	石製品	研石	繊灰岩	繊灰岩	41×25×1.4	22.5		30-19
10	Kd-5	N	-	石製品	研石	繊灰岩	繊灰岩	7.2×39×1.9	51.6		30-20

第89図 古墳時代～古代出土遺物

(9) 自然科学分析－下ノ内遺跡1B区より出土した炭化種実及び加工材の樹種同定 吉川純子(古代の森研究会)

1)はじめに

下ノ内遺跡は縄文時代中期末から近世にいたる遺構を持つ複合遺跡である。縄文時代及び中・近世の遺構から若干の炭化種実を出土し、中・近世の溝状遺構からは加工材を出土した。以下に同定した結果と若干の考察を加える。なお、樹種同定に際しては東北大学理学部の鈴木三男氏に多大なご協力をいただいた。ここに記して感謝いたします。

2)炭化種実

①出土した炭化種実と若干の考察

出土した炭化種実を第1表に示す。試料O6からO8は縄文時代のフラスコ状の形態をもつ土坑から出土した炭化種実で、底面及び土坑堆積土中部の2、3層からオニグルミの炭化した破片を出土した。炭化オニグルミの出土した層位のうち底面と3層は黒褐色ではかにも細かい炭化物を多く含んでいる。出土したオニグルミの破片は互いに接合できる破片もあり、もとは半分に割れた程度の大きさがあったと考えられる。底面の炭化物は食物を保存したりする際に、活性炭のように殺菌や吸湿吸臭を意図したとも考えられる。

試料O1からO5はいずれも中・近世で、イネは塊状に炭化しており、O1からO3は溝状遺構SD6の水成堆積層から出土した。特にO3の試料は底部に近い灰色の粘土層中から出土し、稲穂塊に炭化した穎果が付着している。穎の状態で保存していたものが炭化し、その後溝中に廃棄または運搬され、塊が壊滅されずに保たれていることから、溝中はその後激しい流れがないまま静かに堆積したと考えられる。塊状のイネはいずれも穎果で、胚乳のみになったイネももとは穎がついたものがはがれてしまったものと考えられる。試料O4が出土したSK43は少し離れた土坑で、底層付近の4層からイネのほかにオオムギ近似種、ヒエ、ダイズ属近似種とマメ科を出土した。これらも燃焼作用をうけ、炭化したもののが廃棄などで堆積したと考えられる。P302の試料O5は炭化したウメの核であった。削れて内部の仁が露出している。

②特筆すべき炭化種実の記載

オオムギ近似種 *Hordeum vulgare L.*

種子は紡錘形で中央に筋があり、基部に穴がある。ここで出土したものはかなり小さく、焼け膨れおり、表面の観察がやや困難である。また幅と厚さにあまり差がないため、コムギと見分けがつきにくいことから、オオムギ近似種とした。

ヒエ *Echinochloa utilis L.*

数百個の穎果と種子を出土しており、様々な炭化状態が観察できる。互いにくっついて塊状になっているものもある。穎果は長さと厚さ、幅がほぼ同じ、つまつた紡錘形で外穎にははっきり突出した筋が数本見られる。種子は厚さのある紡錘形で基部に楕円形の胚がある。

ダイズ属近似種 *cf. Glycine*

種子は楕円形で、へそはほぼ中央からややかたより、へその端は特に突出は見られない。かなり焼け膨れている

第1表 下ノ内遺跡1B区出土炭化種実一覧表

登録番号	遺構	遺構層位	分類群	学名	
O1	SD6	3層	イネ	<i>Oryza sativa L.</i>	穎果(塊状)
O2	SD6	4層	イネ		穎果(塊状)
O3	SD6	5層	イネ		胚乳、穎果
O4	SK43	4層	イネ オオムギ近似種 ヒエ ダイズ属近似種 マメ科	<i>cf. Hordeum vulgare L.</i> <i>Echinochloa utilis L.</i> <i>cf. Glycine</i> <i>Leguminosae</i>	種子 穎果 種子 種子
O5	P302		ウメ	<i>Prunus mume L.</i>	核
O6	SK95	2層	オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia Carr.</i>	内果皮破片
O7	SK95	3層	オニグルミ		内果皮破片
O8	SK95	底面	オニグルミ		内果皮破片

が、ダイズ属に近似している。

マメ科 Leguminosae

上記のダイズ属近似種の破片と見られるものと、長さ幅がかなり小さいものがあるが、同属かほかの属かの区別が困難であった。

3) 加工材

① 加工材の樹種と若干の考察

第2表に樹種同定結果を示す。L1は下駄、L5は下駄の歯とみられる破片でいずれもクリであった。L2の木鍤は常緑樹のサカキで、現在の太平洋側の分布北限は茨城県である。製品として流通したか、持ち込まれたと考えられる。L3はヒバ（ヒノキアスナロ）の大変薄い板である。ヒバは東北では産地の青森県を中心として比較的よく出土しており、近世の仙台城三の丸跡では使用樹種の約4割がヒバであった（仙台市教育委員会 1985、山田 1993）。L4は杭のような加工材で、ブナであった。ブナも仙台城三の丸跡で約2割の利用率である（仙台市教育委員会 1985、山田 1993）。

② 出土した樹種の記載

ヒバ *Thujopsis dolabrata* Linn.fil. Sieb. et Zucc. var. *hondae* Makino

晩材部の幅がきわめて狭い針葉樹材で早材から晩材への移行は緩やかである。仮道管の壁は早材部と晩材部で著しく異なり、晩材部はかなり厚い。放射組織は単列、分野壁孔はスギ型やヒノキ型で3、4個存在する。材は均質で緻密、芳香がある。

ブナ *Fagus crenata* Blume

散孔材で道管が散在するが、年輪の前半部は大きく外側になるにつれ道管が小さく少なくなるため、年輪界は明瞭である。繊維状仮道管と軸方向柔細胞があり、放射組織は単列から非常に幅広のものがある。広い放射組織は板目ではっきりした紡錘状として認められる。板目では導管に階段穿孔が見られる。板目、板目ともにチロースが多く確認できる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 写真は試料L5

環孔材で孔圈部は広く、大道管は円形から梢円形で単独である。孔圈外では急に道管が小さくなり小道管は角張って、火炎状配列である。放射組織は単列、板目間に平行に分布している。道管は單穿孔を有し、周囲にはからみあつた仮道管が見られる。放射組織は平伏細胞からなり、孔圈部では道管を迂回するため切れ切れに見えている。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb.

散孔材で道管はきわめて小さく均等に分布し、年輪界が不明瞭である。放射組織はほぼ単列か希に2列、放射柔細胞は大型で明瞭であり、放射組織は異性で平伏、方形、直立のいずれの細胞も存在する。道管にはゆるいらせん肥厚があり、穿孔は階段状で数が多い。木繊維は厚く材は堅い。

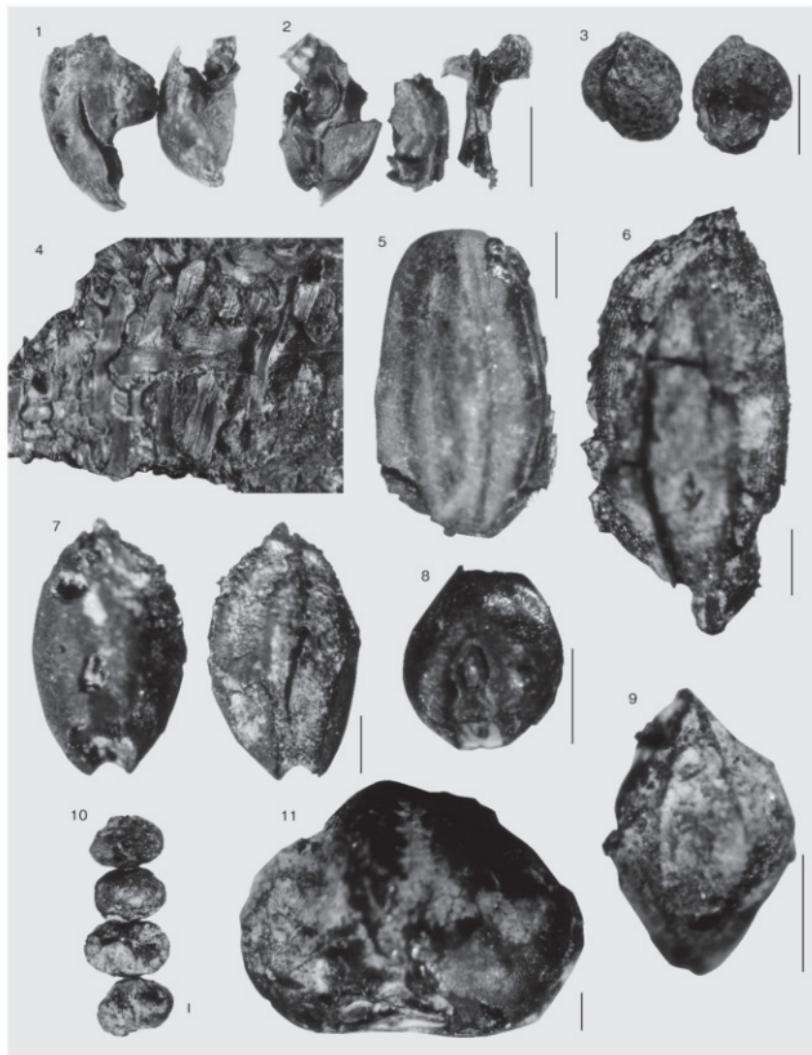
第2表 下ノ内遺跡1B区出土加工材樹種一覧表

登録番号	遺構	遺構層位	分類群	学名
L1	SD6	5層	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
L2	SD6	5層	サカキ	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.
L3	SD6	5層	ヒバ	<i>Thujopsis dolabrata</i> Linn.fil. Sieb. et Zucc. var. <i>hondae</i> Makino
L4	SD6	5層	ブナ	
L5	SD10	3層	クリ	<i>Fagus crenata</i> Blume

引用文献

仙台市教育委員会,1985.『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集

山田昌久,1993.日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史・植生史研究特別第1号,p.1-242.



1. オニグルミ、内果皮 (O6) 2. オニグルミ、内果皮 (O7) 3. ウメ、核 (O5) 4. イネ、縞み物つき塊状顆果 (O3)
5. イネ、胚乳 (O1) 6. イネ、顆果 (O1) 7. オオムギ近似種、種子 (O4) 8. ヒエ、種子 (O4) 9. ヒエ、顆果 (O4)
10. ダイズ属近似種、種子 (O4) 11. ダイズ属近似種、種子拡大 (O4)

スケールは 1-3 が 1 cm、ほかは 1 mm

写真 1 下ノ内遺跡1B区より出土した炭化種実

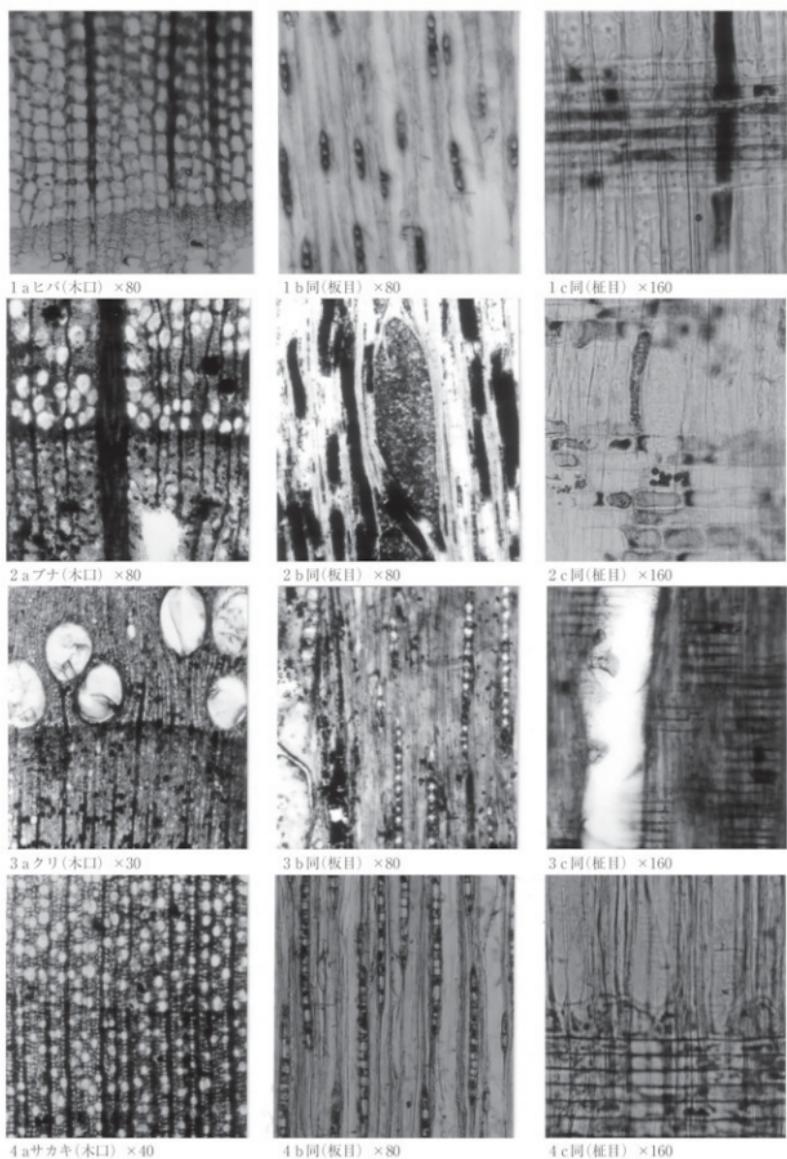


写真2 下ノ内遺跡1B区より出土した加工材の顕微鏡写真

4. 1C区の調査

1C区では基本層Ⅲ層上面（古代～近世の遺構検出面）において、土坑2基、溝跡1条、Ⅳ層上面（古墳時代～古代の遺構検出面）において、溝跡1条、水田跡、Ⅵ層上面（古墳時代～古代の遺構検出面）において、竪穴住居跡1軒、土坑3基、河川跡1条、小溝状遺構群4群、ピット9基を検出した。ピットについては遺構配置図にのみ表示した。

（1）Ⅲ層検出の遺構と遺物（第93図）

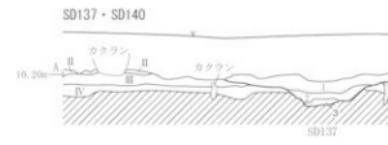
1) 土坑

SK136土坑（第90図） W310・S20グリッドで検出した。SK138、SD137と重複関係にあり、本遺構が新しい。Ⅲ層より上層からの掘り込みを確認した。平面形は梢円形で、長軸方向はN-88°-Eである。規模は長軸144cm、短軸125cm、深さ32cmで、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。断面形は幅広のU字形で、底面は皿状である。堆積土は4層に分層される。遺物は出土していない。

SK138土坑（第90図） W310・S20グリッドで検出した。SK136、SD137と重複し、SD137より新しく、他の遺構より古い。平面形は梢円形あるいは円形と思われる。規模は南北92cm、東西60cm、深さ12cmで、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

2) 溝跡

SD137溝跡（第91・93図） 調査区北側のW300～310・S20グリッドで検出した。SK136・138と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-88°-Wで、規模は長さ9.10m、幅85～150cm、深さ14～21cmである。断面形は幅広の逆台形で、堆積土は3層に分層される。遺物は出土していない。



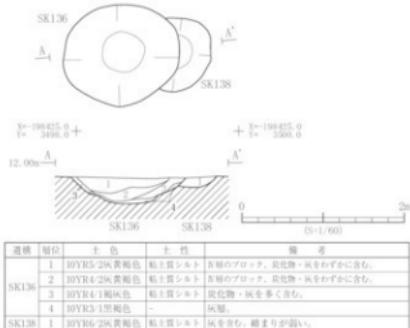
（2）Ⅳ層検出の遺構と遺物（第94図）

1) 溝跡

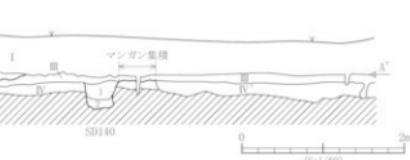
SD140溝跡（第92・94図、図版6） W300～310・S20グリッドで検出した。方向はN-81°-Wで、規模は長さ8.2m、幅55～106cm、深さ15～30cmである。断面形は幅広の逆台形である。堆積土は3層に分層される。遺物は出土していない。

2) 水田跡（第91・94図） W305～290・S25～40グリッドで、SD140溝跡の南側を沿うように1条と、

SK136・SK138



第90図 SK136・138土坑平面図・断面図

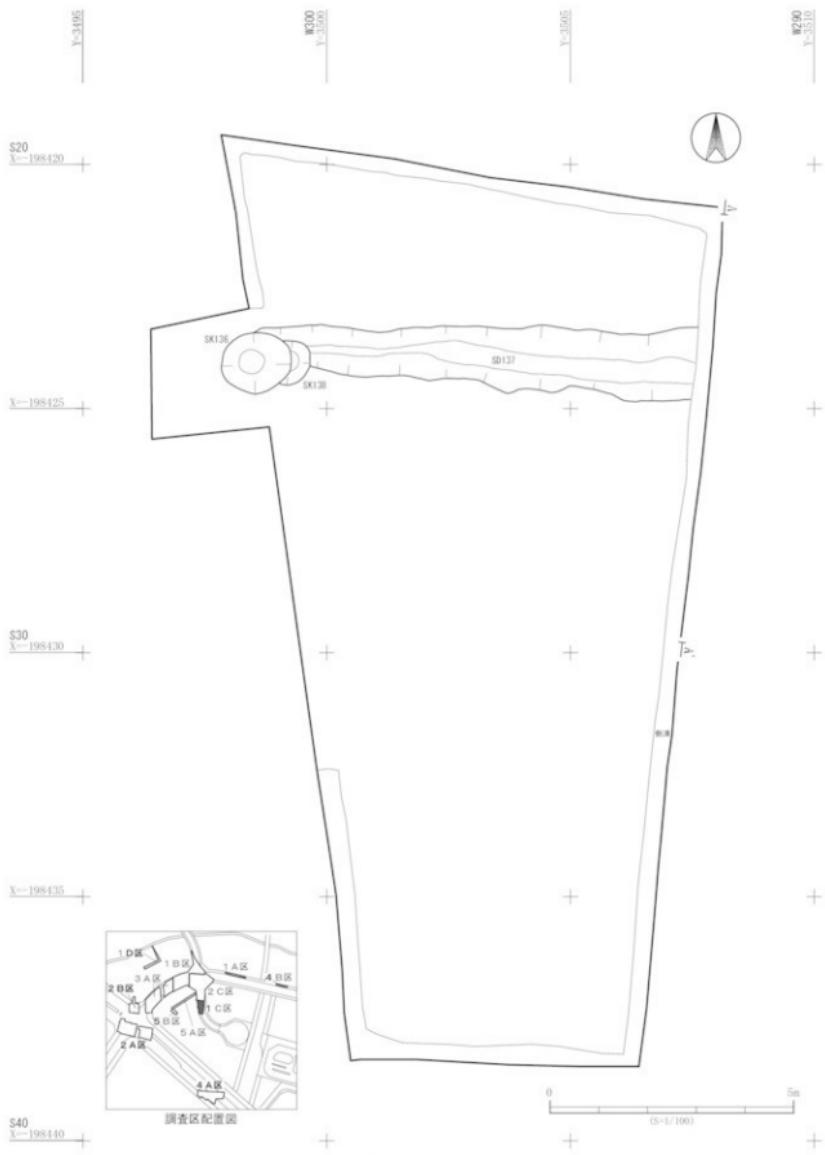


第91図 SD137溝跡断面図

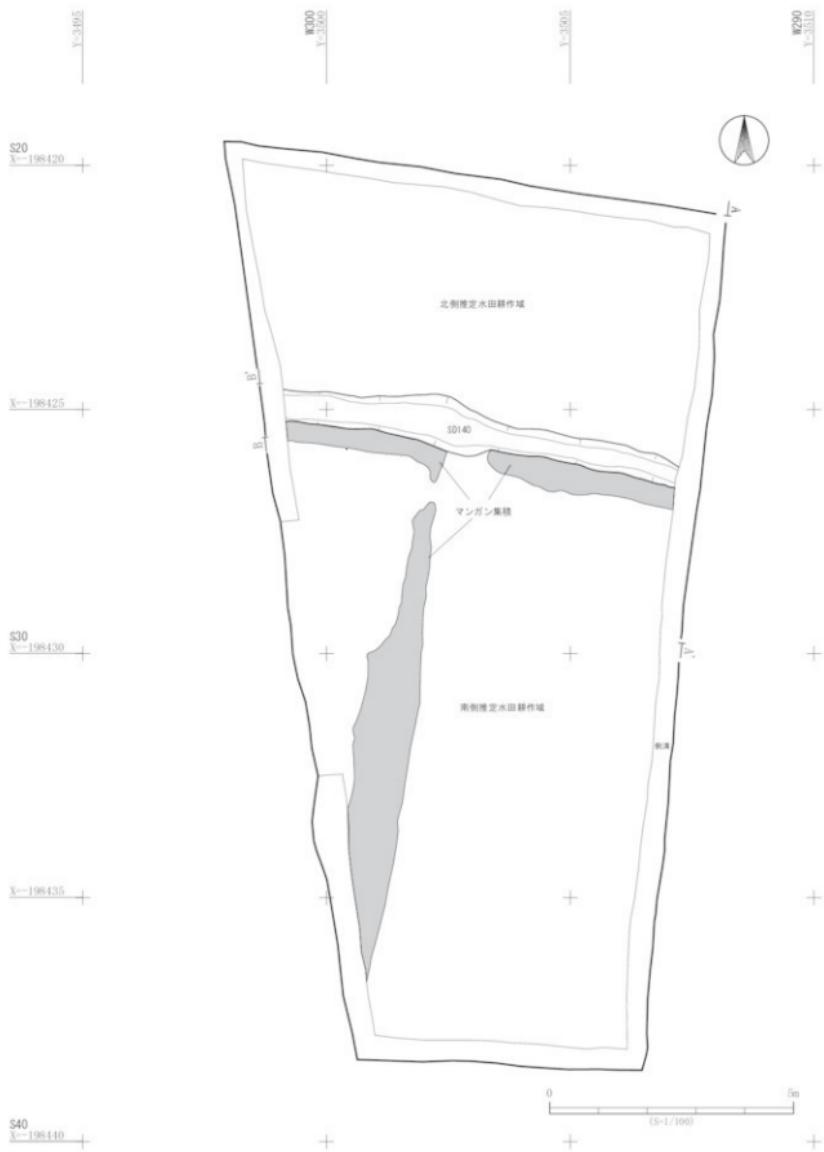


第92図 SD140溝跡断面図

第4節 下ノ内道路1C区の調査



第93図 下ノ内道路1C区Ⅲ層構造配置図



第94図 下ノ内遺跡 1C区IV層構造配置図

その南側に直交するような1条のマンガン集積痕が検出され、Ⅲ層で削平された畦畔の痕跡の可能性が考えられた。後述するプラントオパール分析結果は、基本層Ⅲ層を耕作土とする水田の存在を指摘するものであった。SD140溝跡はマンガンの集積と関連する可能性はあるが、水田に伴う水路かどうかは不明である。

(3) VI層検出の遺構と遺物(第95図)

1) 壁穴住居跡

SI144壁穴住居跡(第96・97図、図版6)

【位置】W300~310、S20~30グリッドに位置する。

【新旧関係】小溝状遺構II-3・4と重複関係にあり、本遺構が新しい。

【規模・形態】東西4.45m、南北4.30mのはば方形である。

【主軸方位】カマド基準でN-16°-Eである。

【堆積土・構築土】21層に分層した。1~5層は住居跡堆積土、6~18層はカマド関連層位、19~21層は掘り方埋土である。

【壁面】周溝の底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西側では床面から40cmである。

【床面】床面は南東角に向かって緩やかに傾斜し、中央部の2.60×1.70mの範囲に硬化面が認められる。

【カマド】住居跡北壁中央に位置している。構造・規模は両袖部が壁面から並行して延び、袖部の長さは70~73cm、高さは床面から26cmである。燃焼部は奥行き63cm、幅50cmで、煙道部は長さ150cm、幅19~23cm、深さ38~44cmで、先端部に向かい緩やかに傾斜し、煙出しピットに接する煙道先端付近はトンネル状に残存していた。

【掘り方】深さ5~13cmで、部分的に土坑状の浅い掘り込みや凹凸がある。

【出土遺物】堆積土から須恵器、土師器片が出土し、以下の6点を第98・99図に図示した。第98図1・2は須恵器环である。底部ヘラ切りである。3は鉄鎌である。鑿頭式で、茎部に樹皮巻きが遺存している。4はロクロ不使用の長胴壺で、第99図1・2はロクロ整形の土師器の長胴壺である。口径と底径との法量比の大きな須恵器环と非ロクロ長胴壺とロクロ長胴壺が混在していることから、本住居跡の年代は9世紀の前半と考えられる。

2) 土坑

SK145土坑(第100図) W300・S30グリッドで検出し、西側の調査区外へ延びる。平面形は梢円形と思われ、検出した規模は南北113cm、東西72cm、深さ5~12cmで、壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状で、底面は浅い皿状である。遺物は出土していない。

SK146土坑(第100図) W310・S20グリッドで検出した。南東部を除き側溝で削平され、平面形は不明である。検出した規模は南北60cm、東西45cm、深さ7cmで、壁面は緩やかに立ち上がる。断面形、底面ともに皿状である。遺物は出土していない。

SK147土坑(第100図) W300・S20グリッドで検出した。平面形は梢円形で、長軸方向は南北正方位である。規模は長軸55cm、短軸46cm、深さ41cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

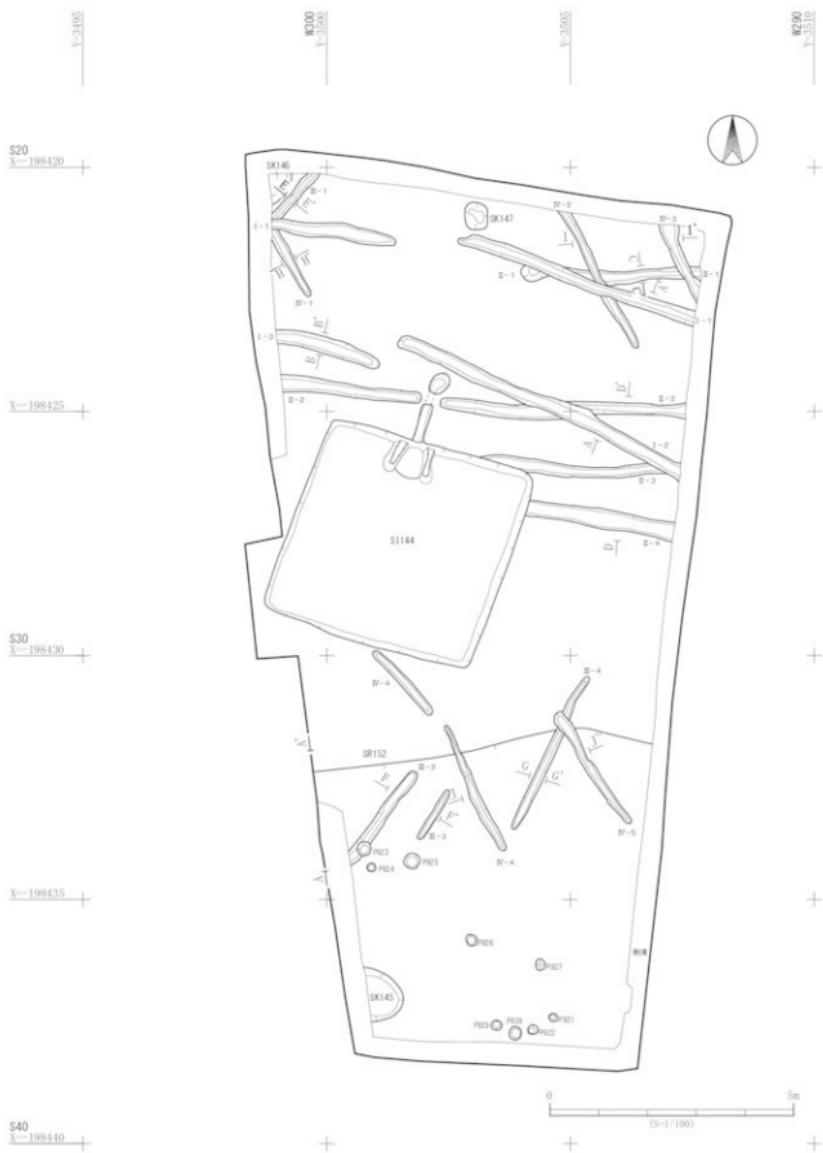
3) 河川跡

SR152河川跡(第95・101図) W300~310・S30グリッドで検出した。幅6.5m以上で、南北方向にトレンチを設定して深さ1.85mまで掘り下げた。トレンチ底までの堆積土は12層に分層され、遺物は出土していない。

4) 小溝状遺構群

畑耕作の痕跡と考えられる遺構群であり、方向と重複関係からI~IV群に分けられ、Ⅲ群からⅣ群、Ⅳ・Ⅲ・Ⅱ群からI群への変遷が考えられる。

I群(第95・102図) W300~310・S20グリッドで検出され、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群と重複関係にあり、本群が新しい。3条の小溝で構成されている。方向はN-65~77°-Wで、検出長2.20~9.00m、幅16~40cm、深さ1~13cm、小溝の



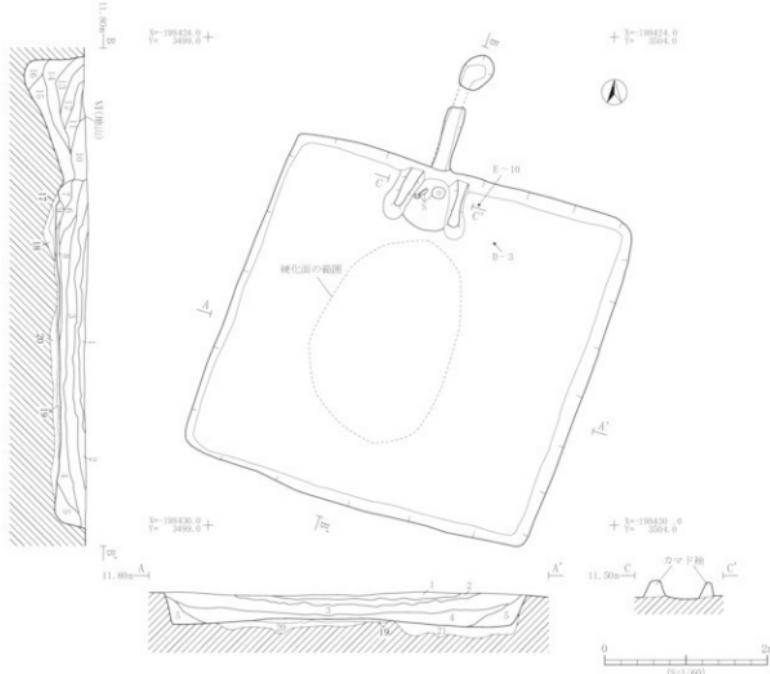
第95図 下ノ内遺跡 1C区VI層遺構配置図

第4節 下ノ内遺跡1C区の調査

間隔は0.40~2.10mとばらつきがある。断面形はU字形で、遺物は出土していない。

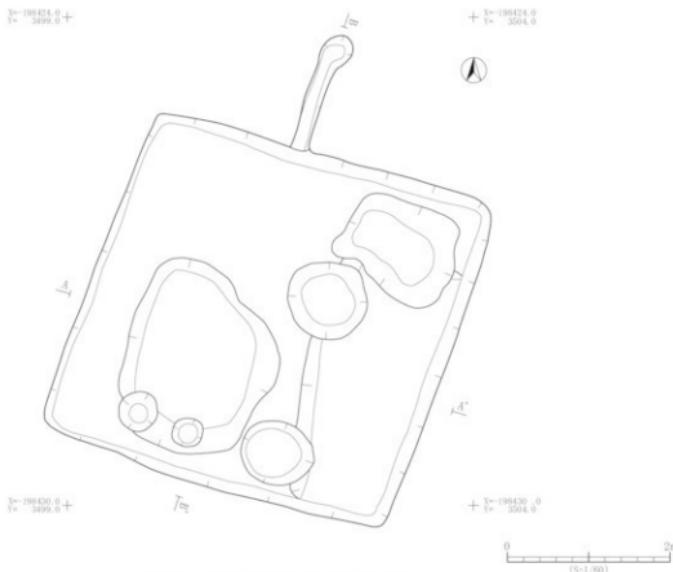
II群（第95・102図） W300~310・S20グリッドで検出され、SI144、I・IV群と重複関係にあり、本群が古い。4条の小溝で構成されている。方向はN-81°~89°-W前後で、検出長3.05~8.30m、幅20~42cm、深さ2~11cm、小溝の間隔はII-1からII-2までが2.30mと距離があるが、他はII-2~II-4までは0.5~0.7mである。断面形はU字形で、遺物は出土していない。

III群（第95-102図） W300~310・S20~30グリッドで検出され、I・IV群、P923と重複関係にあり、本群が古い。4条の小溝で構成されている。方向はN-26°~41°-Eで、検出長1.15~3.50m、幅15~28cm、深さ1~8cm、小溝の間隔はIII-1から2までは約8.00mと距離があるが、他は0.6~1.4mである。断面形はU字形で、遺物は出土していない。

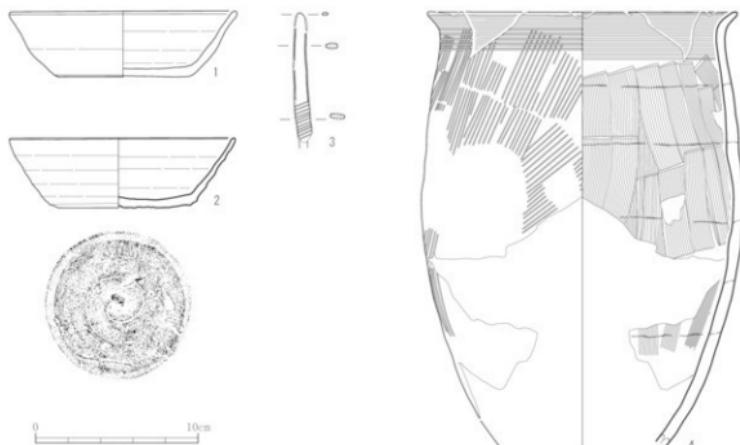


遺構	層位	土色	土性	施 作	遺構	層位	土色	土性	施 作
SI144	1 0YR35.4C-45.4D褐色	シルト	に凹く黄褐色シルト粘土を多量含む。		12 2SY5.4C-45.4D褐色	砂質シルト	地土粒を多量含む。		
	2 2SY6.4C-45.4D褐色	シルト	に凹く黄褐色シルト粘土を多量含む。		13 2SY5.5C-45.5D褐色	砂質シルト	地土粒を多量含む。		
	3 0YR34.3C-45.4D褐色	シルト	明黄褐色シルト粘土を少量含む。		14 2SY4.4C-45.4D褐色	砂質シルト	地土粒を多量含む。		
	4 0YR35.3C-45.4D褐色	シルト	明黄褐色シルト粘土を多量含む。		15 2SY5.5C-45.5D褐色	砂質シルト	地土粒を多量含む。		
	5 10YR3.3C褐色	シルト	明黄褐色シルト粘土を少量、泥化物-地土粒を含む。		16 2SY4.4C-45.4D褐色	砂質シルト	地土粒を多量含む。		
	6 10YR6.6H褐色	シルト	地土粒を少量含む。		17 10YR6.6H-45.6H褐色	シルト	地土と灰化物の混入。		
	7 10YR6.6H褐色	シルト	地土とゴツテを多量含む。		18 10YR6.6H-45.6H褐色	シルト	地土と灰化物の混入。プロックを若干含む。(6-18層は「焼土層」を指す。)		
	8 10YR6.4C-45.4D褐色	シルト	地土粒、灰化物、灰を多量含む。		19 10YR5.2H褐色	砂質シルト	堅く締まる。		
	9 10YR5.2H褐色	シルト	灰層、地土粒を多量含む。		20 2SY5.6H褐色	砂質シルト	堅く締まる。		
	10 2SY5.4C-45.4D褐色	砂質シルト	地土粒を若干含む。		21 2SY6.4C-45.4D褐色	砂質シルト	堅まりがある。(19-21層類似)		
	11 2SY5.4C-45.4D褐色	砂質シルト	地土粒を若干含む。						

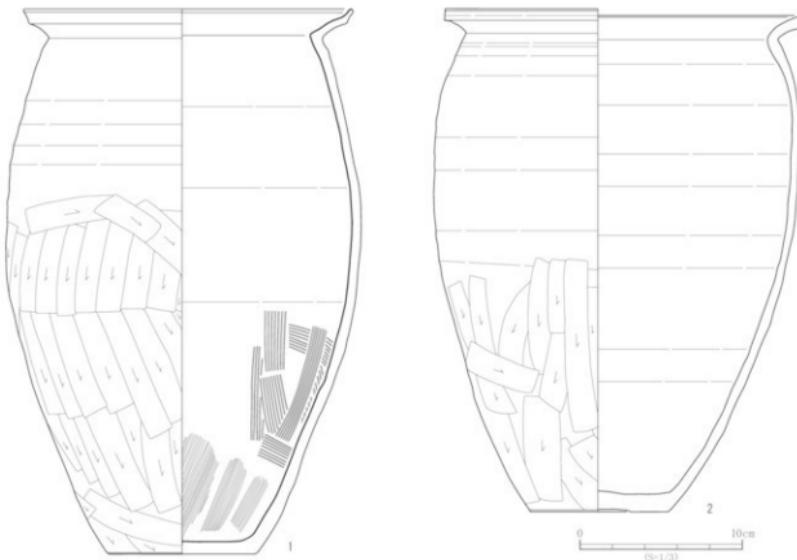
第96図 SI144堅穴住居跡平面図・断面図



第97図 SI144堅穴住居跡掘り方平面図

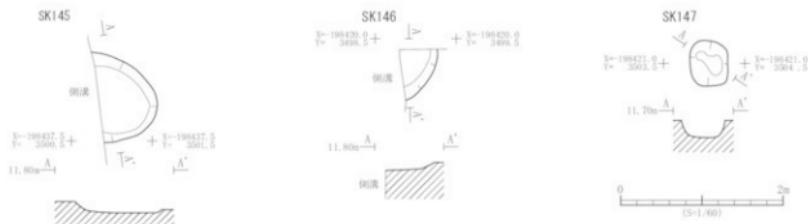


第98図 SI144堅穴住居跡出土遺物（1）



No.	登録番号	出土遺物	層	状	種	面	記	種	外観調査	内観調査	備考	写真図版
1	D-3	SI144	3	土器	甕				[30.2] × 9.0 × 33.5	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ・ハケメ・ナデ	37-4
2	D-4	SI144	床	土器	甕				[22.2] × 8.4 × 30.9	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	37-3

第99図 SI144堅穴住居跡出土遺物（2）

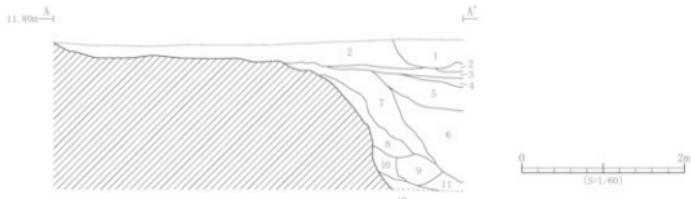


第100図 SI145～147平面図・断面図

IV群（第95-102図） W300～310・S20～30グリッドで検出され、I・II・III群と重複関係にあり、I群より古くII・III群より新しい。5条の小溝で構成されている。方向はN-26°～34°-Wで、検出長1.55～4.90m、幅10～42cm、深さ2～8cm、小溝の間隔はIV-1からIV-2が約5.50mと距離があるが、他は1.4～1.9mである。断面形はU字形で、遺物は出土していない。

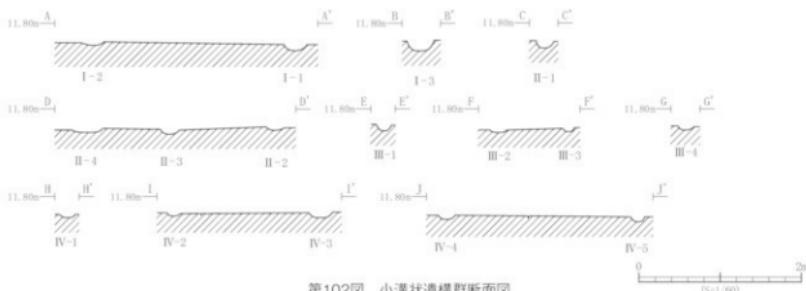
5) ピット（第95図）

調査区南側に分布し、合計9基のピット（921～929）を検出した。遺物は出土していない。



遺構	層位	土色	土性	備考		遺構	層位	土色	土性	備考	
				A'	B'					A'	B'
SR152	1	10YR7-30/45-45黄褐色	砂	φ10mm以下の礫を含む。		7	10YR8-29灰白色	砂砂		10YR8-29灰白色	砂砂
	2	10YR7-25/45-45黄褐色	細砂	-		8	10YR8-29灰白色	細砂	に赤い黃褐色土・褐灰色土ブロックを含む。	10YR8-29灰白色	砂砂
	3	10YR7-25/45-45黄褐色	細砂	マンガンを多く含む。		9	-	-	に30mm以下一粗砂・砂が礫状に丸屈をなす。	-	-
	4	10YR8-29灰白色	細砂	-		10	10YR8-29灰白色	細砂	に赤い黃褐色土・褐灰色土ブロックを含む。	10YR8-29灰白色	砂砂
	5	10YR7-25/45-45黄褐色	細砂	粗砂と礫(φ10mm以下)・粗砂・砂が礫状に丸屈をなす。		11	10YR8-29灰白色	細砂	-	-	-
	6	-	-	礫(φ10mm以下)・粗砂・砂が礫状に丸屈をなす。		12	-	-	灰白色細砂と赤い黃褐色細砂が互層に地層。	-	-

第101図 SR152河川断面図



第102図 小溝状遺構群断面図

(4) 自然科学分析－下ノ内遺跡のプラント・オバール分析

株式会社 古環境研究所

1)はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石(プラント・オバール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オバール(植物珪酸体)分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定及び古植生・古環境の推定などに応用されている。

JR長町駅の南西約2km、名取川左岸の自然堤防上に立地する下ノ内遺跡の発掘調査では、1C区において水田跡とみられる遺構が検出された。そこで、当該遺構における稲作の検証ならびに耕作城の確認を目的に、プラント・オバール分析を行うことになった。

2)試料

調査区の基本土層は、下位よりに赤い黄褐色細砂(VI層)、下面の乱れる褐灰色粘土質シルト(VB層)、に赤い黄褐色シルト(Va層)、南半でマンガンを多く含むに赤い黄褐色シルト(IV'層)、マンガンを多く含むに赤い黄褐色シルト(IV層)、IV層との境にマンガンを含むに赤い黄褐色シルト(III層)、しまりの弱い褐灰色シルト(II層)、現代の耕作土でしまりのない擾乱土(I層)である。

分析試料は、南側推定水田耕作城ではIII層、IV層、Va層の3点、南側マンガン集積部分ではIV層とVa層の2点、北側推定水田耕作城ではIII層、IV層、Va層の3点の計8点である。

第3表 下ノ内遺跡のプランツ・オバール分析結果
検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）\試料	南側推定水田耕作域			南側マンガン集積部分		北側推定水田耕作域		
	III	IV	Va	IV	Va	III	IV	Va
イネ科 GramineaeZ (Grasses)								
イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	46	7	7	15		28	15	
ススキ属型 <i>Misanthus</i> type	20	7	15	23		15	20	
タケ亜科 <i>Bambusoideae</i> (Bamboo)								
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Neasa</i> type	26	54	73	75	86	42	52	34
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Myakosasa</i>) type	46	48	37	38	79	64	59	34
その他 Others	105	75	44	60	79	21	37	54
未分類等 Unknown	336	449	453	596	410	332	384	197
プランツ・オバール総数	579	640	628	807	655	487	562	339
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m ² ・cm）								
イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.38	0.19	0.21	0.37		0.74	0.39	
ススキ属型 <i>Misanthus</i> type	0.25	0.08	0.18	0.24		0.16	0.23	
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Neasa</i> type	0.13	0.25	0.34	0.30	0.38	0.18	0.22	0.15
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Myakosasa</i>) type	0.35	0.35	0.27	0.24	0.55	0.42	0.39	0.23

3) 方法

プランツ・オバールの抽出と定量は、「プランツ・オバール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

① 試料土を絶乾（105°C・24時間）する。

② 試料土約1gを秤量後、ガラスピーズ（直径約40μm、約0.02g）を添加する。

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

③ 電気炉灰化法により有機物を処理する。

④ 超音波（300W・42KHz・10分間）により試料を分散する。

⑤ 沈底法により微粒子（20μm以下）を除去後乾燥する。

⑥ 封入剤（オイキット）中に分散しプレラートを作成する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプランツ・オバール（以下、プランツ・オバールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプランツ・オバール個数（試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプランツ・オバールとガラスピーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻³g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネ（赤米）は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属型（ススキ）は1.24、ネザサ節型は0.48、クマザサ属型（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

4) 分析結果

分析の結果、イネ、ウシクサ族（ススキ属型）、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）及び未分類のプランツ・オバールが検出された。これらについて定量を行い、その結果を第3表、第103～105図に示した。主要な分類群については巻末に顕微鏡写真（写真3）を示す。

5) 考察

（1）下ノ内遺跡における稲作跡

水田跡の探査あるいは検証を行なう場合、通常、イネのプランツ・オバールが試料1gあたりおよそ5,000個以上の密度で検出されれば、稲作跡である可能性が高いと判断される。ただし、仙台平野では、これまでの調査事例において密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、判断基準値を3,000個/gとしている。また、当該層においてプランツ・オバール密度にピークが認められれば、上層からの混入の危険性は考えにくいことから、

密度が基準値に満たなくとも稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。以上のことを基準として稲作の可能性について検討を行う。

1C区の南側推定水田耕作層、マンガン集積部分及び北側推定水田耕作層について分析を行った。その結果、南側推定水田耕作層ではⅢ層、Ⅳ層及びVa層、マンガン集積部分ではⅣ層、北側推定水田耕作層ではⅢ層とⅣ層よりそれぞれイネのプラント・オパールが検出された。このうちⅢ層では、南側推定水田耕作層でプラント・オパール密度が4,600個/gと水田跡の判断基準値である3,000個/gを上まわっている。また、北側推定水田耕作層でも2,800個/gと基準値にほぼ達する密度である。したがって、Ⅲ層については南側・北側とも当時の水田耕作層であったと判断される。

Ⅳ層では、プラント・オパール密度は耕作層で700個/g、畦で1,500個/g、非耕作層でも1,500個/gといずれも低い値である。こうしたことから、Ⅳ層に関しては水田層である可能性が考えられるものの、他所からプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。仮にⅣ層において稲作が行われていたとするならば、なおかつプラント・オパール密度の低いことの要因として次のことが考えられる。すなわち、1) 耕作期間が非常に短かった、2) 稲叢の大部分が水田の外に持ち出されていた、3) 稲の生産性が低かった、4) 耕作土が流失あるいは人為的に移動された、などである。

Va層では、南側推定水田耕作層のみでイネのプラント・オパールが検出されている。ただし、密度は700個/gと低い値であることから、当該層で稲作が行われていたことは考えられなくはないが、他所からの混入である可能性が高い。

(2) プラント・オパール分析から推定される植生・環境

各層ともネザサ節型やクマザサ属型のタケア科が優勢であり、ほかにススキ属型が検出されている。また、未分類ではあるものの、イネ科の草本起源とみられるプラント・オパールが高い密度で検出されている。こうしたことから、調査区周辺には多くはないがネザサやクマザサなどのタケ類及びススキ、さらにイネ科の雑草が多く生育していたと思われる。なお、ヨシ属がまったく検出されていないことから、各層堆積時は調査区周辺は比較的乾いた環境であったと思われる。

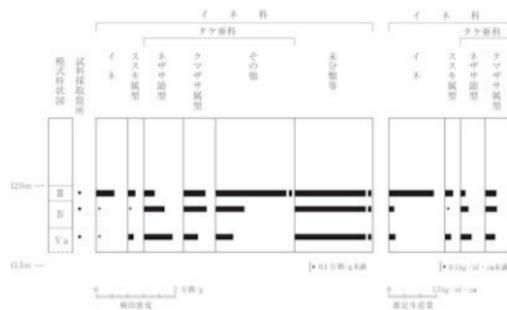
6)まとめ

下ノ内遺跡においてプラント・オパール分析を行い、Ⅲ層、Ⅳ層及びVa層における稲作の可能性を検討した。その結果、Ⅲ層では調査区の広い範囲で稲作が行われていたと判断された。Ⅳ層に関しては耕作層であった可能性は考えられたものの、上層あるいは他所からプラント・オパールが混入した危険性も残された。Va層については耕作層であった可能性は否定できなかった。

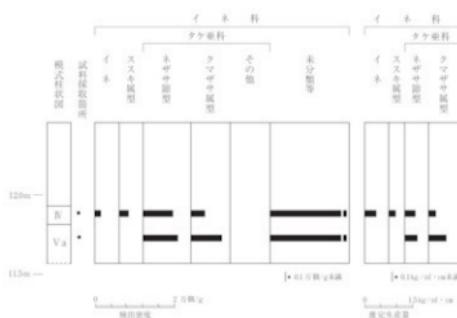
参考文献

- 杉山真二 (1987) タケア科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-、考古学と自然科学、9、p.15-29.
- 藤原宏志 (1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜臼式)水田及び群馬・
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-、考古学と自然科学、17、P.73-85.

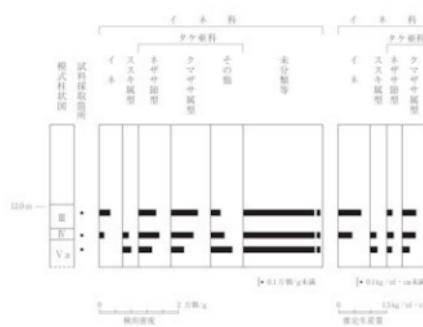
第4節 下ノ内遺跡1C区の調査



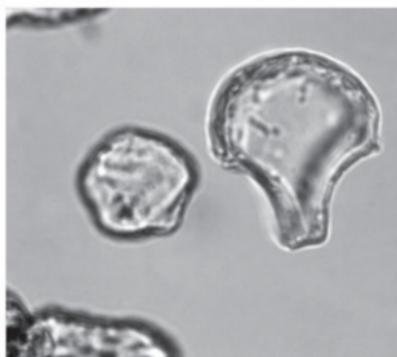
第103図 下ノ内遺跡（南側推定水田耕作域）のプラント・オパール分析結果 ※主な分類群について表示



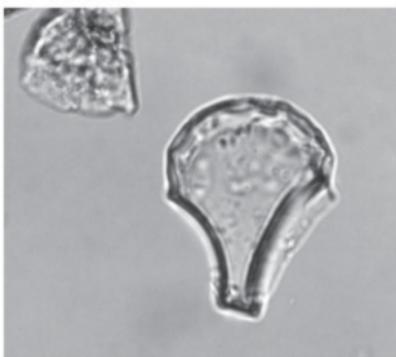
第104図 下ノ内遺跡（南側マンガン集積部分）のプラント・オパール分析結果 ※主な分類群について表示



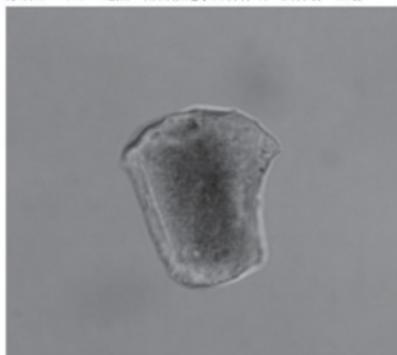
第105図 下ノ内遺跡（北側推定水田耕作域）のプラント・オパール分析結果 ※主な分類群について表示



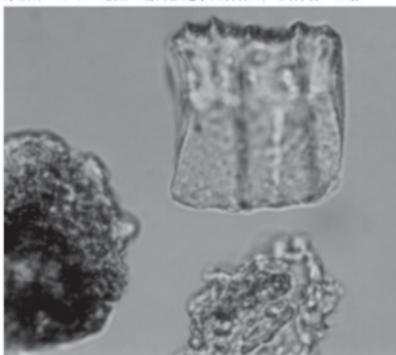
分類群：イネ 地点：南側推定水田耕作域 試料名：Va層



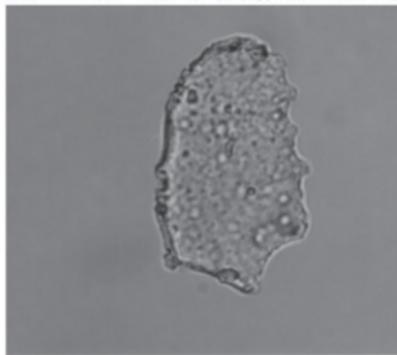
分類群：イネ 地点：北側推定水田耕作域 試料名：V層



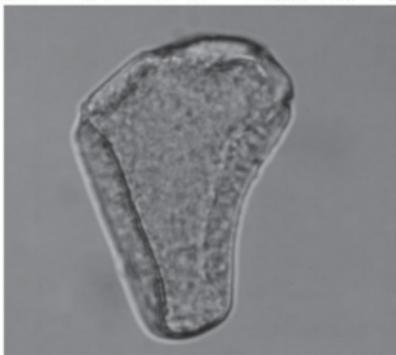
分類群：ウシクサ族（ススキ属） 地点：南側推定水田耕作域 試料名：Va層



分類群：タケ亜科（ネザサ跡型） 地点：マンガン集積部分 試料名：Va層



分類群：タケ亜科（クマザサ属型） 地点：マンガン集積部分 試料名：Va層



分類群：ウシクサ族大型 地点：マンガン集積部分 試料名：V層

写真3 プラント・オパール（植物珪酸体）の顕微鏡写真

5. 1D区の調査

1D区では基本層Ⅲ層上面（古代～近世の遺構検出面）において井戸跡1基、土坑1基、性格不明遺構1基、溝跡1条を検出した。

（1）Ⅲ層検出の遺構と遺物（第108図）

1) 井戸跡

SE148井戸跡（第106図） W360~370・N30~40グリッドで検出した。南側の調査区外に延びる。平面形はほぼ円形で、断面形は円筒形である。規模は径93cmで、深さは不明である。堆積土は2層に分層される。

2) 土坑

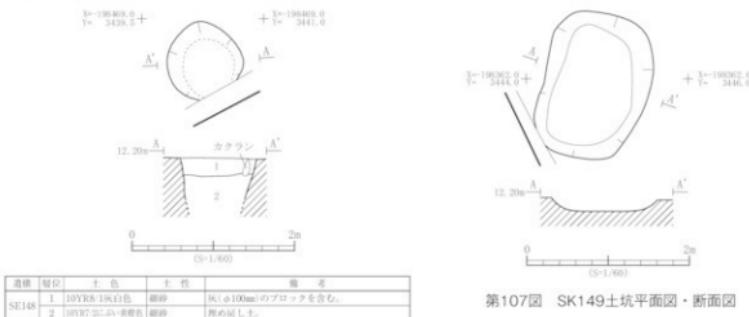
SK149土坑（第107図） W360・N40グリッドで検出した。平面形は隅丸長方形で、長軸方向はN-10°-Eである。規模は長軸184cm、短軸130cm、深さ13cmで、壁面は開きぎみに立ち上がる。断面形は幅広のU字形で、底面はほぼ平坦である。遺物は、土師器が出土しており、第109図1～3の3点を図示した。長胴壺である。このうち1・2はロクロ土師器である。1は、頸部に平行タタキがみられ、2の内面は回転ハケメ及びハケメ調整が施される。3は非ロクロ土師器長胴壺である。ロクロ土師器と非ロクロ土師器が混在していることから、本遺構の年代は9世紀前半以降と考えられる。

3) 性格不明遺構

SX145性格不明遺構（第110図） W360・N50グリッドで検出した。東西の調査区外へ延びる。平面形は梢円形または隅丸長方形と考えられ、長軸方向はN-79°-Wと思われる。検出した規模は東西320cm、南北230cm、深さ15cmである。堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

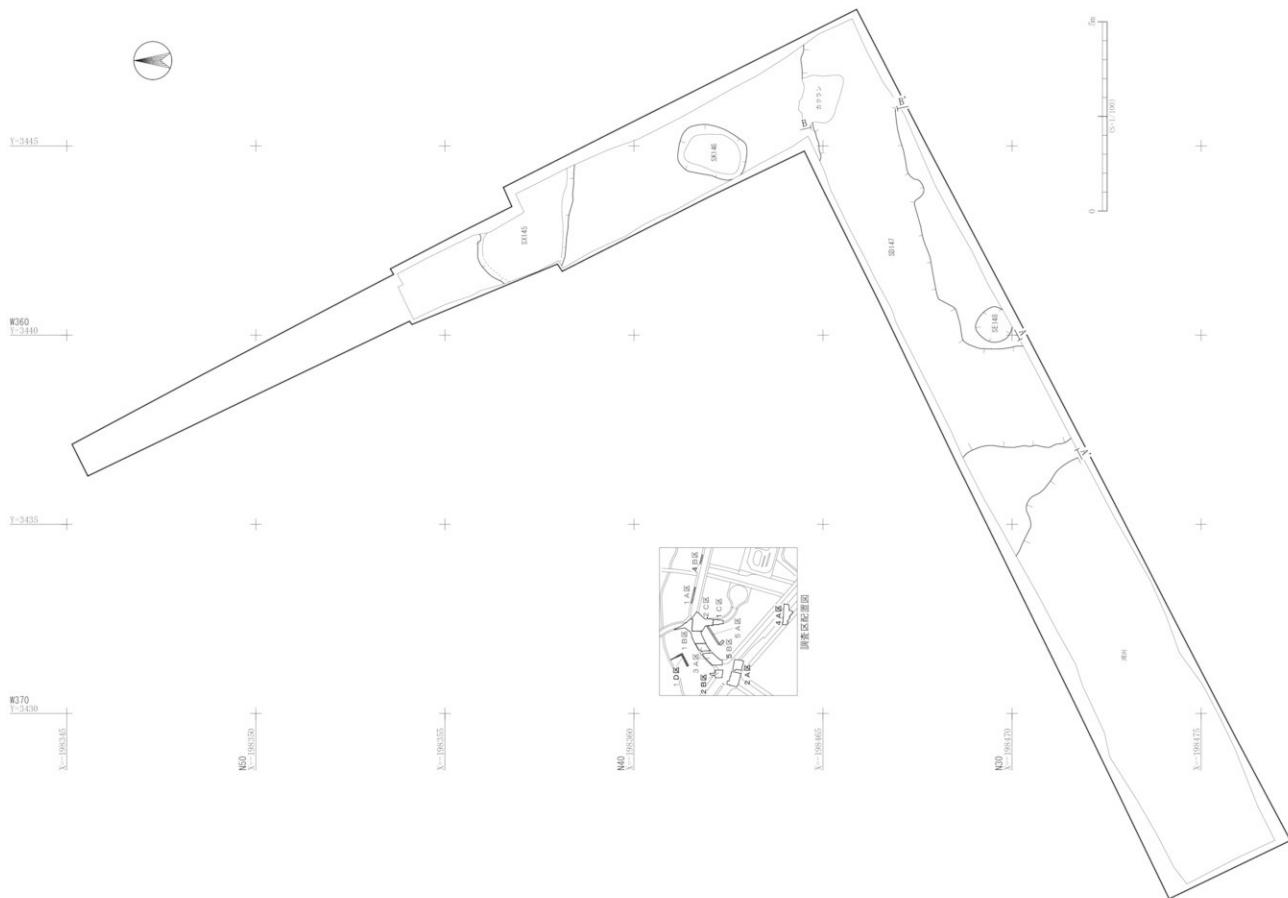
4) 溝跡

SD147溝跡（第108・111図） W360~370・N30~40グリッドで検出した。底面は検出できなかった。逆L字状に屈折して調査区外に延びており、東西方向はN-84°-E、南北方向はN-4°-Wである。規模は長さ13.00m、幅210~270cmであるが、一部深さ80cmまで掘り下げる。断面形は不明である。堆積土は7層に分層される。遺物は出土していない。



第106図 SE148井戸跡平面図・断面図

第107図 SK149土坑平面図・断面図

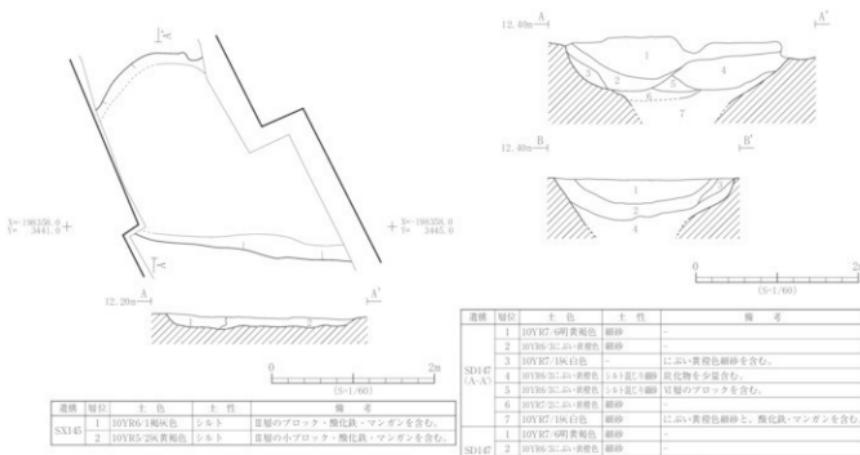


第108図 下ノ内遺跡1D区III層遺構配置図



No.	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	寸法×底径×高さ(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	D-5	SK149	-	土加器	甌	21.3××深31.9	ヨクナダ・タキ・ハラナダ	ヨクナダ・ハラナダ	37-9	
2	D-6	SK149	-	土加器	甌	19.8××深23.5	ヨクナダ・タキ・ハラナダ	ヨクナダ・ハラナダ	37-7	
3	C-28	SK149	-	土加器	甌	19.6××深2.7	ヨクナダ・ハラナダ	ヨクナダ・ハラナダ	37-8	

第109図 SK149土坑出土遺物



第110図 SX145性格不明遺構平面図・断面図

遺構	層位	土色	土性	備考
SD147	1	10YR7/6褐色	砂	-
	2	10YR6/3-4褐色	砂	-
	3	10YR7/1褐色	-	に赤い黄褐色細糸を含む。
	4	10YR6/3-4褐色	砂	赤褐色を含む。
	5	10YR6/3-4褐色	砂	赤褐色を含む。
	6	10YR7/2-3褐色	砂	黄色のブロックを含む。
	7	10YR7/1褐色	砂	-
(D-B')	1	10YR7/6褐色	砂	に赤い黄褐色細糸と、焼化鉄・マンガンを含む。
	2	10YR6/3-4褐色	砂	-
	3	10YR6/3-4褐色	砂	黄褐色のブロックを含む。
	4	10YR6/3-4褐色	砂	灰白色細糸を含む。

第111図 SD147溝跡断面図

6. 2A区の調査

2A区では基本層V層上面（古墳時代～古代の遺構検出面）において、土坑4基、河川跡3条を検出した。

(1) V層検出の遺構と遺物（第113図）

1) 土坑

SK153土坑（第112図） W410・S60グリッドで検出し、北側は調査用の削溝で削平されている。平面形は楕円形または円形と思われる。検出した規模は東西212cm、南北68cm、深さ57cmで、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。断面形は逆台形で、底面には凹凸がある。堆積土は3層に分層される。遺物は出土していない。

SK154土坑（第112図） W400・S60グリッドで検出し、南側の調査区外へ延びる。平面形は不整椭円形で、長軸方向はN-64°-Eである。検出した規模は長軸110cm、短軸55～80cm、深さ5～30cmで、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。断面形は柄杓状で、底面には凹凸がある。遺物は出土していない。

SK155土坑（第112図） W410・S60グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で径42cm、深さ13cmである。壁面はやや開きぎみに立ち上がり、断面形はU字形で、底面は擂鉢状である。堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

SK156土坑（第112図） W410・S60グリッドで検出した。平面形は不整椭円形で、長軸方向はN-2°-Wである。規模は長軸70cm、短軸50cm、深さ18cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形はU字形で、底面は緩やかな擂鉢状である。堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。



遺構	場所	土色	土性	層
1	10V15-294黄褐色	砂質シルト	V層のブロック（幅30cm）を含む。	
2	10V15-294黄褐色	砂質シルト	V層のブロックを少量含む。	
3	10V15-1楕円色	砂質シルト	楕円色砂質シルトブロック（幅30cm）・灰黃褐色砂質シルトブロック（幅30cm）・V層を含む。	
SK153	-	-	-	
1	10V15-36-2a小黄褐色	砂質シルト	炭化木片をわずかに含む。	
2	-	砂	砂土、2a-2b黄褐色砂質シルト小ブロックを含む。	
SK155	-	-	-	
1	10V14-284黄褐色	砂質シルト	炭化木片をわずかに含む。	
2	-	砂	砂土、2a-2b黄褐色砂質シルト小ブロックを含む。	
SK156	-	-	-	
1	10V14-284黄褐色	砂質シルト	木片をわずかに含む。	
2	-	砂	砂土、2a-2b黄褐色砂質シルト小ブロックを含む。	

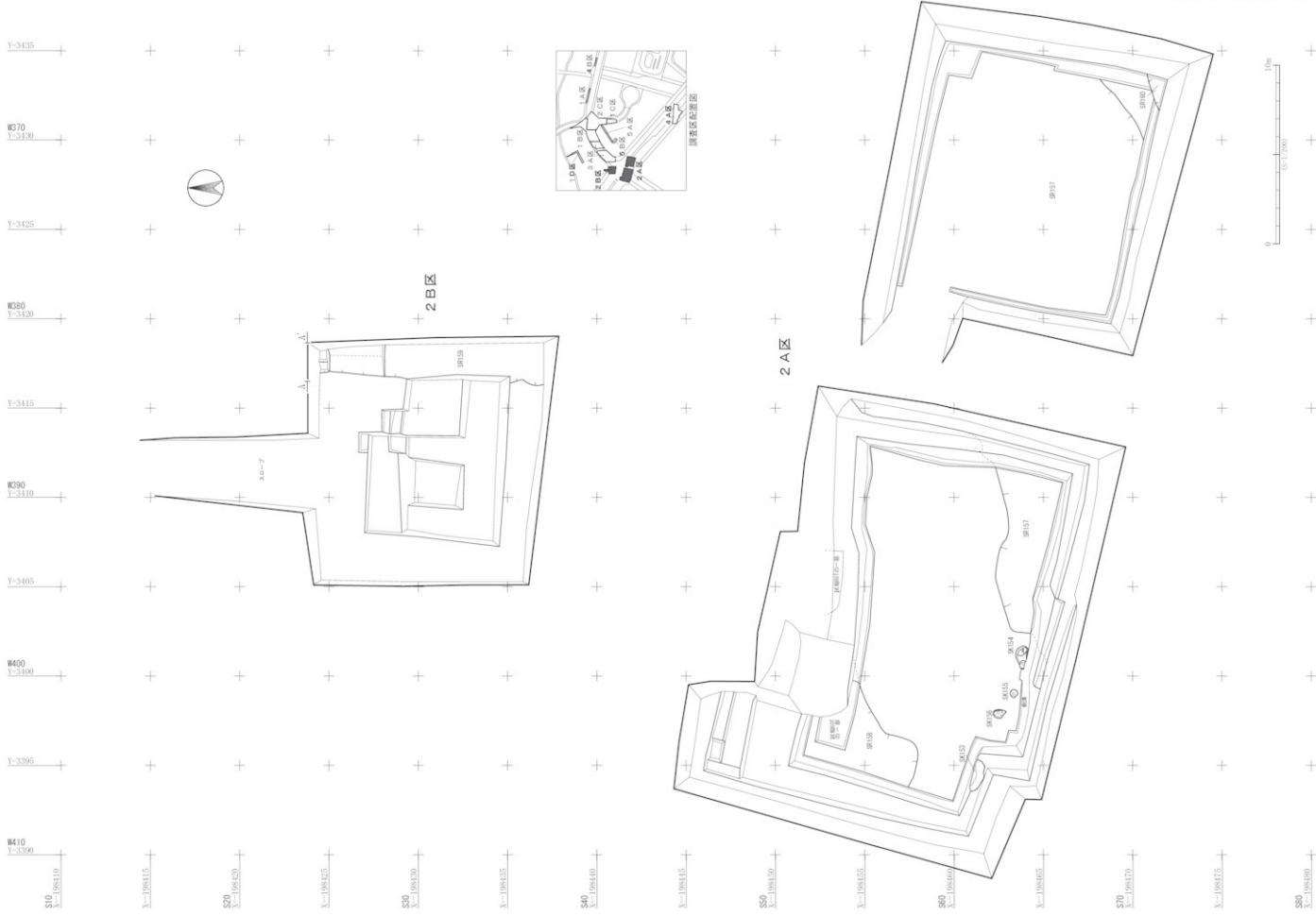
第112図 SK153～156土坑平面図・断面図

2) 河川跡

SR157河川跡（第113図） W370～400・S50～70グリッドで検出した。東西方向で規模は幅32.4m以上、深さは不明である。遺物は出土していない。

SR158河川跡（第113図） W410・S40～50グリッドで検出した。部分的な確認のため、方向や規模などは不明である。遺物は出土していない。

SR160河川跡（第113図） W370・S70グリッドで検出した。東西方向と思われるが、部分的な確認のため、規模等は不明である。遺物は出土していない。



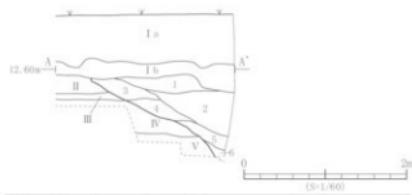
7. 2B区の調査

2B区では基本層V層上面（古墳時代～古代の遺構検出面）において河川跡1条を検出した。

（1）V層検出の遺構（第113図）

1) 河川跡

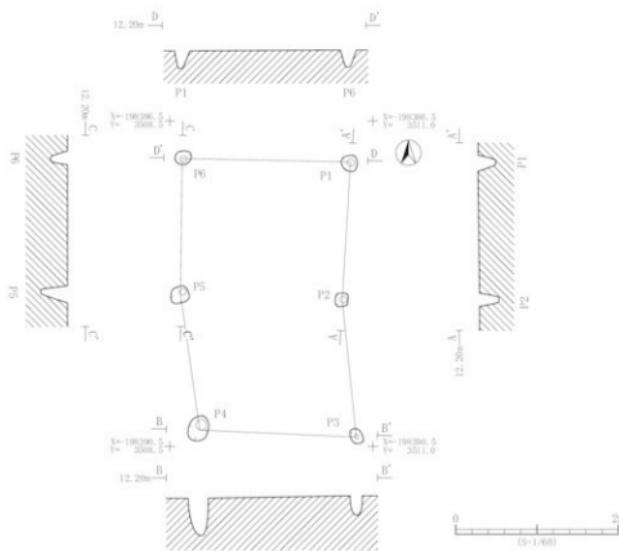
SR159河川跡（第113・114図） W390・S20～30
グリッドで検出した。南北方向のもので北側の一部を調査し、検出面から深さ98cmまで掘り下げる。幅は2.4m以上で、堆積土は6層に分層され、本来は断面から、Ⅱ層からの掘込みであることがわかる。遺物は出土していない。



第114図 SR159河川跡断面図

8. 2C区の調査

2C区では基本層III層上面（古代～近世の遺構検出面）において、掘立柱建物跡5棟、土坑28基、性格不明遺構1基、溝跡17条、ピット229基、V層上面（古墳時代～古代の遺構検出面）において、堅穴住居跡3軒、溝跡2条、小溝状遺構群1群、ピット20基、VI層上面（古墳時代～古代の遺構検出面）において、堅穴住居跡1軒、土坑4基、性格不明遺構13基、溝跡1条、小溝状遺構群3群、ピット47基、XI層上面（縄文時代中期～後期の遺構検出面）において、埋設土器5基、性格不明遺構1基、廻層上面（縄文時代中期の遺構検出面）において、堅穴住居跡2軒、土坑48基、性格不明遺構2基、ピット18基を検出した。ピットは建物等の組み合わせを検討したが、明確なものは確認されなかった。ピットについては遺構配置図にのみ表示している。



第115図 SB 1 掘立柱建物跡平面図・断面図

(1) III層検出の遺構と遺物(第117図、図版7)

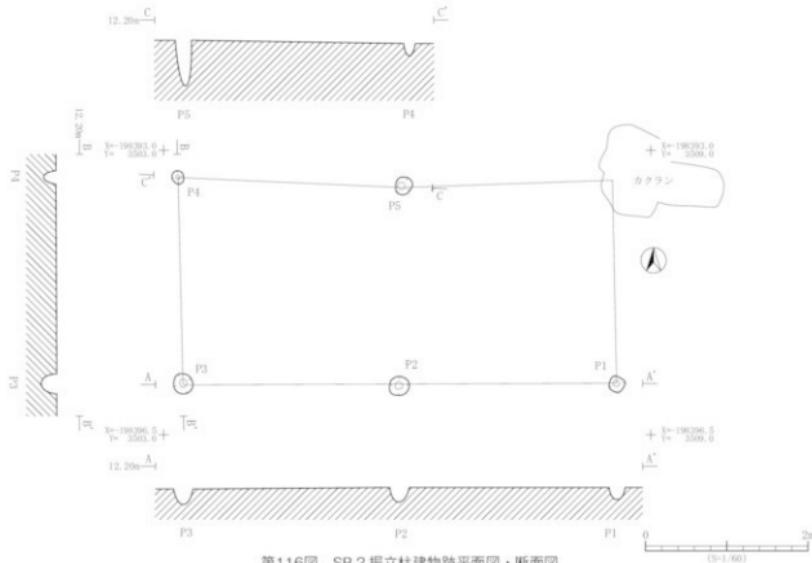
1) 振立柱建物跡

SB 1 振立柱建物跡(第115図) W290~300・N10~20グリッドで検出した。桁行2間(西列北から1.65m+1.65m、総長3.30m・東列北から1.65m+1.65m、総長3.30m)、梁行1間(南列1.95m・北列2.10m)の南北棟の建物である。桁行柱列方向は南北正方位である。柱穴掘り方の規模は径16~32cmの円形または楕円形で、遺構検出面からの深さは16~46cmである。柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

SB 2 振立柱建物跡(第116図) W300・N10グリッドで検出した。北東隅の柱穴が搅乱により削平されている。桁行2間(北列西から2.70m+不明、南列西から2.70m+2.70m、総長5.40m)、梁行1間(西列2.55m・東列不明)の東西棟の建物である。桁行柱列方向はN-89°-Eである。柱穴掘り方の規模は径15~25cmの不整形の円形で、遺構検出面からの深さは13~55cmである。柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

SB 3 振立柱建物跡(第118図) W300・N10グリッドで検出した。SD 4と重複関係にあり、本遺構が新しい。桁行3間(北列西から1.50m+1.35m、総長4.35m・南列西から1.50m+1.50m+1.20m、総長4.20m)、梁行1間(西列2.85m・東列3.00m)の東西棟の建物である。桁行柱列方向はN-88°-Eである。柱穴掘り方の規模は径22~30cmの円形または楕円形で、遺構検出面からの深さは25~47cmである。柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

SB 4 振立柱建物跡(第119図) W300・N10グリッドで検出した。SK172、SD 4と重複関係にあり、SK172より新しく、SD 4より古い。桁行3間(北列西から1.95m+1.95m+1.80m、総長5.70m・南列西から2.10m+1.95m+不明)、梁行1間(西列3.75m・東列不明)の東西棟の建物である。桁行柱列方向はN-89°-Eである。柱穴掘り方の規模は径17~30cmのはば円形で、遺構検出面からの深さは28~60cmである。柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。



第116図 SB 2 振立柱建物跡平面図・断面図

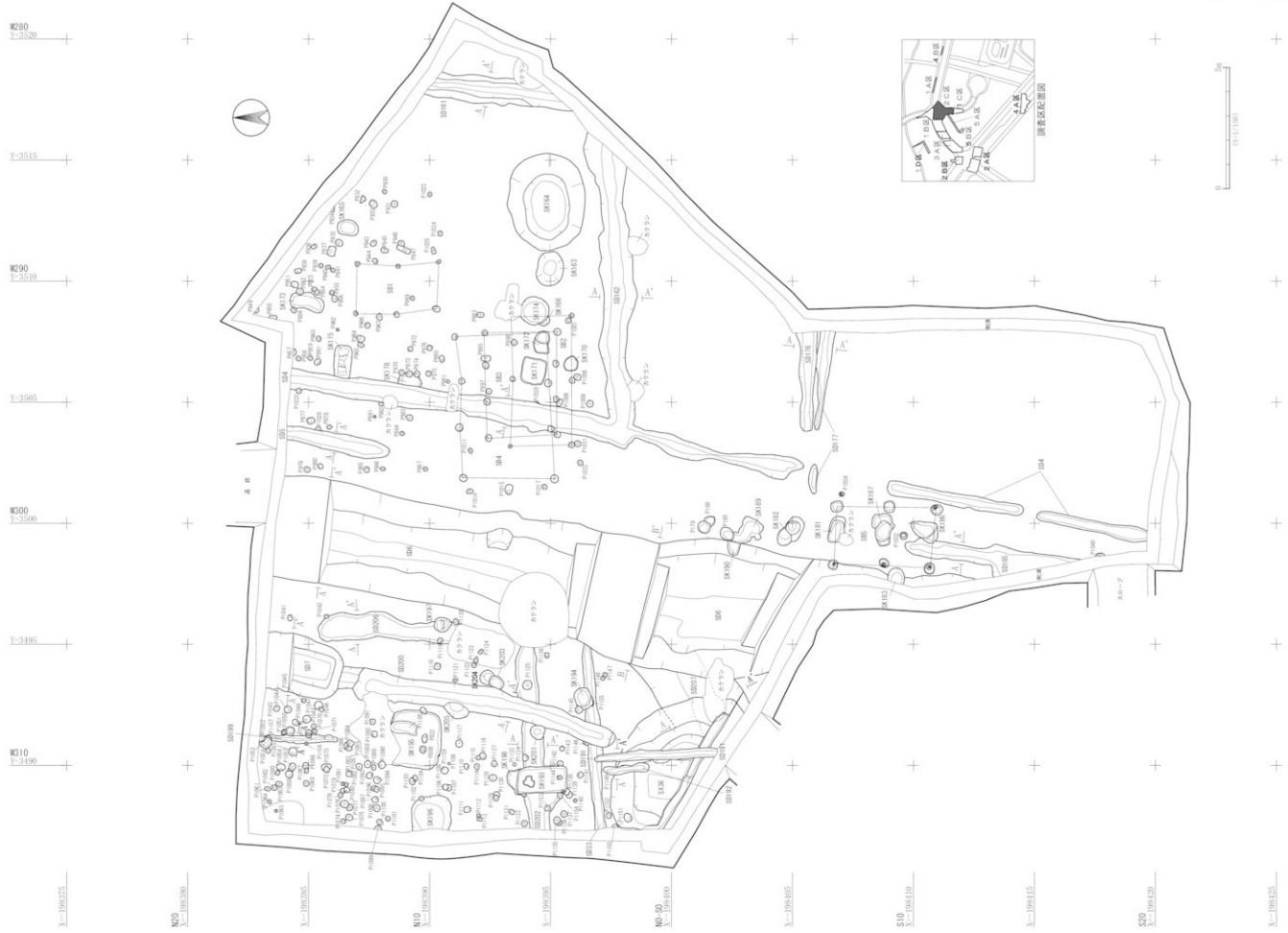
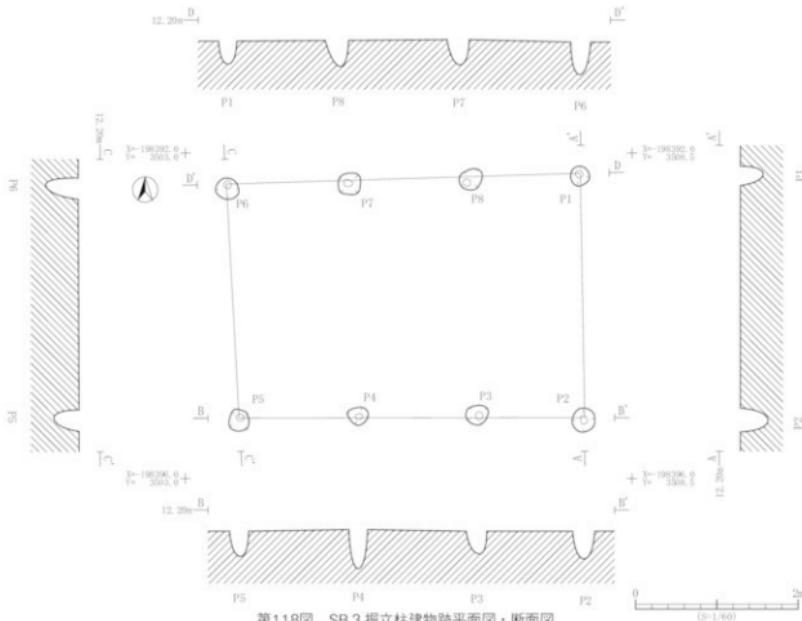


図117 下ノ内道路2C区調査点図



第118図 SB3 挖立柱建物跡平面図・断面図

SB 5 挖立柱建物跡（第120図、図版9） W300~310・N0~S0~S1グリッドで検出した。SD 6と重複関係にあり、本遺構が新しい。桁行2間（西列北から2.10m+1.95m、総長4.05m・東列北から2.10m+1.95m、総長4.05m）、梁行1間（北列2.40m、南列2.40m）の南北棟の建物である。桁行柱列方向はN-3°-Eである。柱穴掘り方の規模は径37~52cmの円形または楕円形である。遺構検出面からの深さは20~50cmである。P 3 ~ 6の底面には直径10~18cmの落ち込みがみられ、柱の位置を示すものと考えられる。遺物は出土していない。

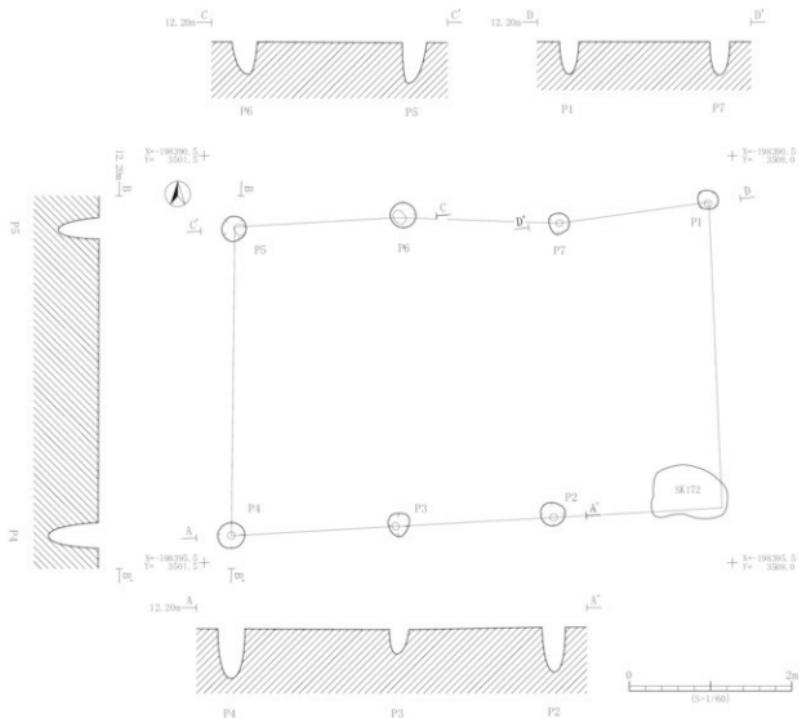
2) 土 坑

SK163土坑（第121図、図版7） W290~300・N10グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長軸方向はN-74°-Wである。規模は長軸145cm、短軸108cm、深さ52cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形はU字形で、底面は擂鉢状である。堆積土は3層に分層される。遺物は、土師器小片が出土した。

SK164土坑（第121図、図版7） W290・N10グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長軸方向はN-86°-Eである。規模は長軸402cm、短軸320cm、深さ82cmで、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分層される。遺物は、近世陶器と砥石、須恵器甕小片等が出土し、近世陶器と砥石を第124図1・2・5に図示した。1・2は在地産の擂鉢で、19世紀前半代の製品である。5は一部に自然面が残っている。

SK165土坑（第121図） W290・N20グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長軸方向はN-10°-Eである。規模は長軸88cm、短軸64cm、深さ8cmで、壁面は比較的緩やかに立ち上がる。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK166土坑（第121図、図版7） W300・N10グリッドで検出した。SK174と重複関係にあり、本遺構が古い。



第119図 SB 4 挖立柱建物跡平面図・断面図

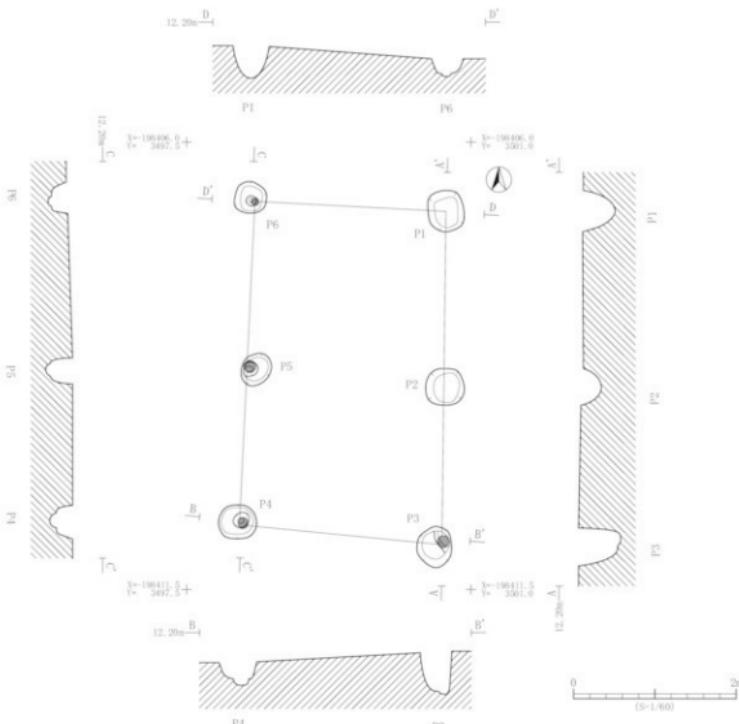
平面形は円形または楕円形と思われ、規模は北西から南東50cm、北東から南西の検出長25cm、深さ14cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

SK170土坑（第121図） W300・N10グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、規模は径60cm、深さ12cmである。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK171土坑（第121図） W300・N10グリッドで検出した。平面形は隅丸方形で、長軸方向はN-75°-Wである。規模は長軸105cm、短軸101cm、深さ5cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK172土坑（第121図、図版7） W300・N10グリッドで検出した。平面形は不整楕円形で、長軸方向はN-76°-Wである。規模は長軸95cm、短軸60cm、深さ6～15cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は柄杓状で、底面は段差を有し、東側が低く、西側が高い。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK173土坑（第121図、図版7） W300・N20グリッドで検出した。P952と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不整楕円形で、長軸方向はN-10°-Eである。規模は長軸144cm、短軸60～70cm、深さ7～18cmで、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で南側に傾斜している。堆積土は単層である。遺物は、土師器甕小片が出土した。



第120図 SB 5 振立柱建物跡平面図・断面図

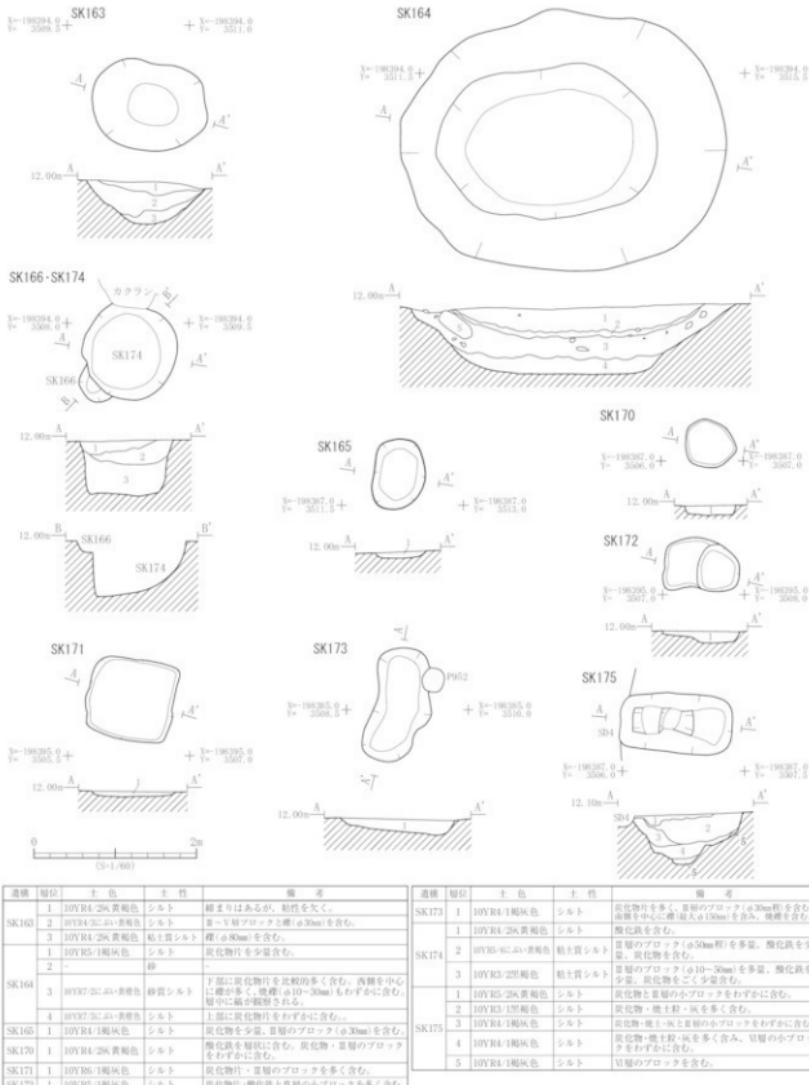
SK174土坑（第121図） W300・N10グリッドで検出した。SK166と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形はほぼ円形である。規模は径115cm、深さ68cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。断面形は逆台形で、底面はやや凹凸がある。堆積土は3層に分層される。遺物は、近世土器、土師器小片が出土し、近世土器を第123図3に図示した。ロクロ成形のかわらけである。底部は回転糸切りである。

SK175土坑（第121図、図版7） W300・N20グリッドで検出した。SD4と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は隅丸長方形で、長軸方向はN-87°-Wである。規模は長軸137cm、短軸73cm、深さ22~60cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は概ね漏斗形で、底面には段差があり、中央部が低く、壁側が高い。堆積土は5層に分層される。遺物は、土師器小片と敲石が出土しており、敲石を第124図7に図示した。左側縁部が被熱した後に敲打されている。

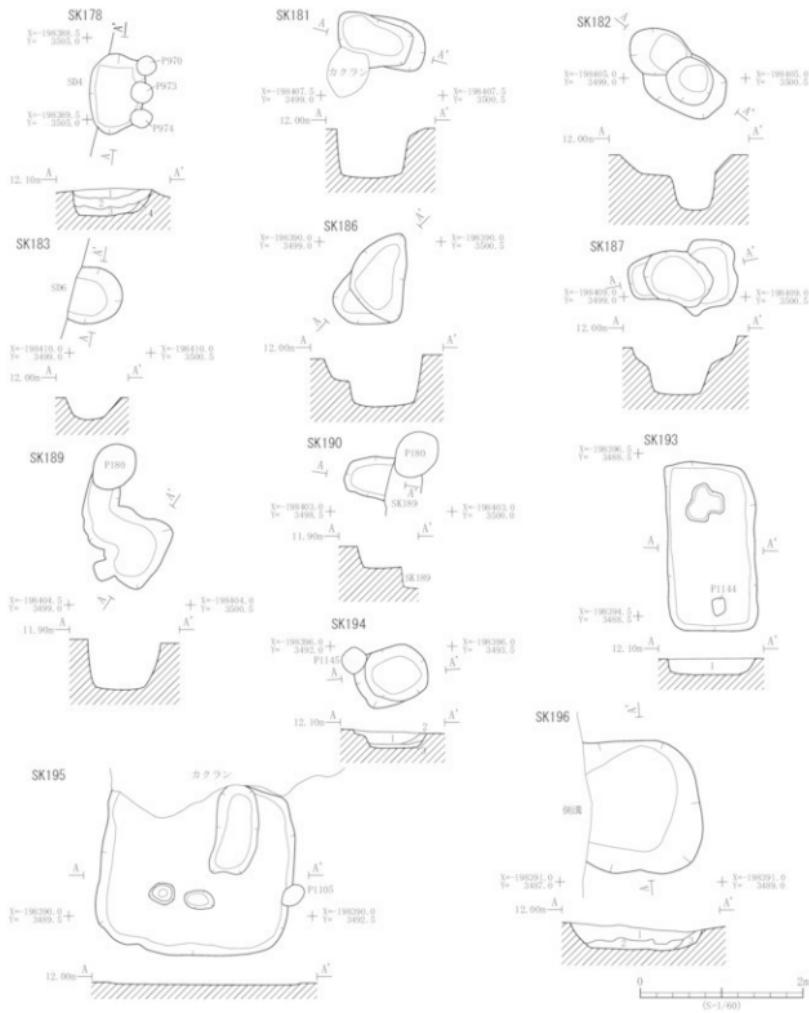
SK178土坑（第122図、図版7） W300・N20グリッドで検出した。SD4、P970・973・974と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は梢円形で、長軸方向はN-5°-Eである。規模は長軸100cm、短軸68cm、深さ32cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分層される。遺物は、土師器小片が出土した。

SK181土坑（第122図） W300~310・N0-S0グリッドで検出した。平面形は梢円形で、長軸方向はN-73°-W

第4節 下ノ内遺跡2C区の調査



第121図 SK163～166・170～175土坑平面図・断面図



遺構	部位	土色	土性	備考
SK178	1 10YR4/1 黄灰褐色	シルト	炭化物・焼土・瓦等の小ブロックを含む。	
	2 10YR5/2 黄黄褐色	シルト	炭化物・焼土・瓦・瓦屑のブロックを含む。	
	3 10YR5/1 黑褐色	シルト	炭化物・焼が多し、瓦・瓦屑のブロックを含む。	
	4 10YR5/1 黑褐色	シルト	瓦・瓦屑のブロックを多く含む。	
SK190	1 10YR4/2 黄褐色	シルト	第1部層のブロック（φ100~200mm）を大半に含む。瓦等のシルト・灰黃褐色シルトを多く分量多く、焼化物・磚（φ100mm）と瓦面にサンダーハンを含む。	
遺構	部位	土色	土性	備考
SK194	1 10YR5/2 黄黄褐色	シルト	炭化物・瓦・瓦屑の小ブロックをわずかに、マングローブを含む。	
	2 10YR5/2 黄黄褐色	シルト	炭化物・瓦・瓦屑のブロックを多量のブロックを含む。	
SK196	1 10YR6-1 黄褐色	シルト	炭化物・瓦・瓦屑の小ブロックを含む。	
	2 10YR6-1 黄褐色	シルト	炭化物・瓦・瓦屑の小ブロックを含む。	
	3 10YR6-2 黄黄褐色	シルト	炭化物の小ブロックを含む。	

第122図 SK178・181~183・186・187・189・190・193~196土坑平面図・断面図

である。規模は長軸115m、短軸65cm、深さ55cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

SK182土坑（第122図、図版8） W300～310・N0-S0グリッドで検出した。平面形は不整形円形で、長軸方向はN-65°-Wである。規模は長軸136cm、短軸80cm、深さ23～70cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は柄杓状で、底面には段差があり、南東側が低く、北西側が高い。遺物は出土していない。

SK183土坑（第122図） W310・N0-S0グリッドで検出し、西側の調査区外へ延びる。平面形は梢円形または円形と思われ、検出した規模は南北70cm、東西の検出長60cm、深さ32cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形はU字形で、底面は描鉢状である。遺物は出土していない。

SK186土坑（第122図、図版8） W300～310・N0-S0～S10グリッドで検出した。SD185と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は不整形円形で、長軸方向はN-36°-Eである。規模は長軸125cm、短軸85cm、深さ25～64cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は柄杓状で、底面には段差があり、北東側が低く、南西側が高い。遺物は、土師器壺の小片が出土した。

SK187土坑（第122図） W300～310・N0-S0グリッドで検出した。平面形は不整隔丸長方形で、長軸方向はN-87°-Eである。規模は長軸133cm、短軸45～93cm、深さ15～72cmで、壁面は底面から急角度で立ち上がり、上部は開きぎみとなる。断面形は漏斗形で、底面には段差があり、中央部が低い。遺物は出土していない。

SK189土坑（第122図） W300～310・N0-S0グリッドで検出した。SK190、P180と重複関係にあり、SK190より新しく、P180より古い。平面形は不整形で、長軸方向はN-38°-Wである。規模は長軸145cm、短軸40～90cm、深さ57cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。遺物は、土師器壺小片が出土した。

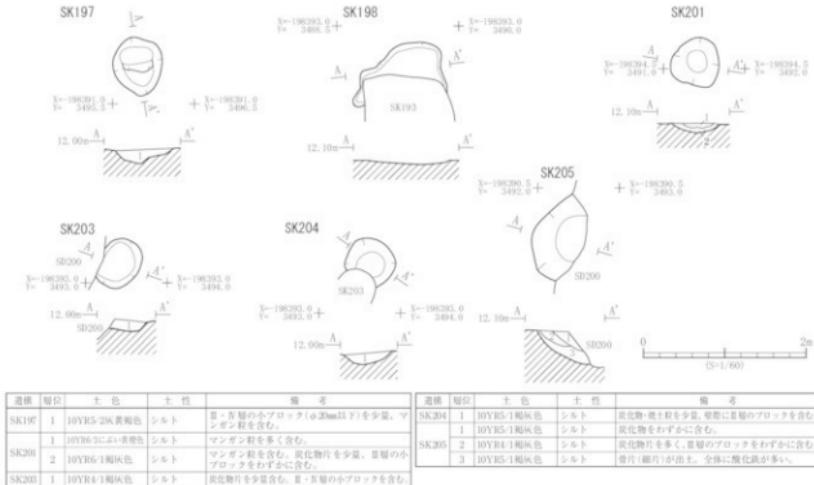
SK190土坑（第122図） W310・N0-S0グリッドで検出した。SK189、P180と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は梢円形と思われ、長軸方向はN-84°-Wである。検出した規模は長軸方向55cm、短軸53cm、深さ27cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

SK193土坑（第122図、図版8） W320・N10グリッドで検出した。SK198、SD202、P1138・1142・1144と重複関係にあり、P1144より古く、他の遺構より新しい。平面形は隔丸長方形で、長軸方向はN-5°-Wである。規模は長軸208cm、短軸105cm、深さ19cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は逆台形で、底面北側には不整形の掘り込みが確認された。遺物は、大堀相馬碗小片、土師器小片が出土した。

SK194土坑（第122図、図版8） W310・N10グリッドで検出した。SD33、P1145と重複関係にあり、SD33より新しく、P1145より古い。平面形は隔丸長方形で、長軸方向はN-70°-Eである。規模は長軸90cm、短軸70cm、深さ21cmで、壁面は急角度で立ち上がるが、西壁の上部は開きぎみになる。断面形は概ね逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分層される。遺物は出土していない。

SK195土坑（第122図、図版8） W310～320・N10～20グリッドで検出し、北部を搅乱で削平されている。P1105と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は隔丸長方形と思われ、長軸方向はN-85°-Wである。規模は長軸238cm、短軸205cm、深さ2～6cmで、壁面は緩やかに立ち上がる。断面形は皿状で、底面には3ヶ所の窪みが確認された。遺物は、舶載磁器が出土し、第124図4に図示した。中国産の龍泉窯系青磁、鎬連弁文碗の破片である。14世紀前半代の製品である。

SK196土坑（第122図） W320・N10～20グリッドで検出し、西側の調査区外へ延びる。平面形は隔丸長方形と思われ、検出した規模は南北160cm、東西135cm、深さ15～36cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分層される。遺物は、近代磁器皿小片、肥前産磁器皿小片、砥石等が出土し、砥石を第124図6に図示した。上部を欠損している。



第123図 SK197・198・201・203~205土坑平面図・断面図

SK197土坑（第123図） W310・N10グリッドで検出した。SD206と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は梢円形で、長軸方向はN-10°-Wである。規模は長軸70cm、短軸60cm、深さ15cmで、壁面は開きぎみに立ち上がる。断面形は柄杓状で、底面は段差があり、北側が低く、南側が高い。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK198土坑（第123図） W320・N10グリッドで検出した。SK193、SD202と重複関係にあり、SD202より新しく、他の遺構より古い。平面形は不明であり、検出した規模は東西115cm、南北70cm、深さ13cmで、壁面は緩やかに立ち上がる。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

SK201土坑（第123図） W310・N10グリッドで検出した。SD200・202と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形はほぼ円形で、規模は径60cm、深さ13cmで、壁面は開きぎみに立ち上がる。断面形はU字形で、底面は皿状である。堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

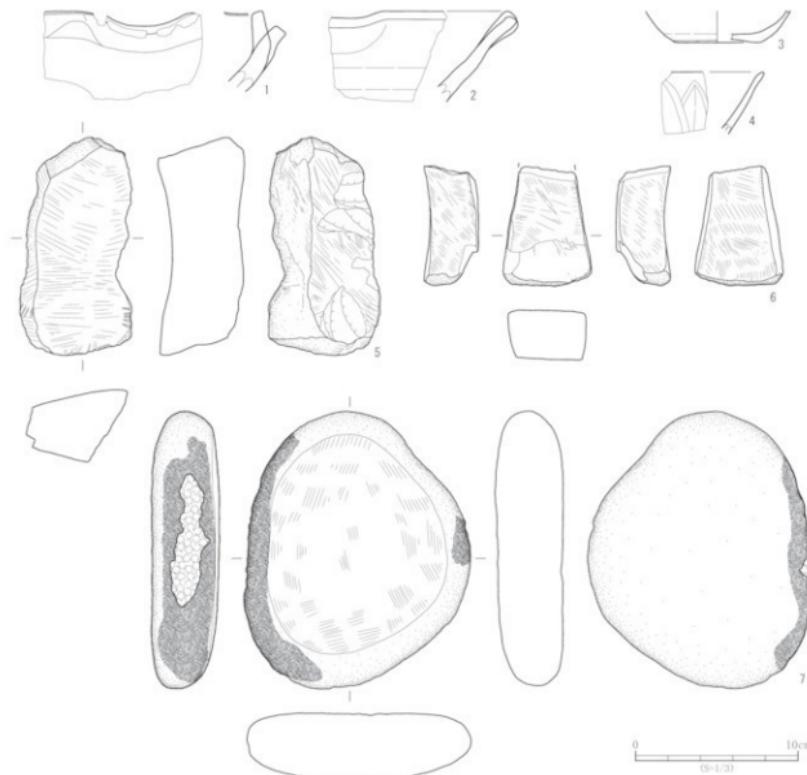
SK203土坑（第123図） W310・N10グリッドで検出した。SD200、SK204と重複関係にあり、SK204より新しく、SD200より古い。壁面はやや開きぎみに立ち上がる。平面形は梢円形と思われ、長軸方向はN-47°-Eである。規模は長軸63cm、短軸48cm、深さ10cmである。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層である。遺物は、内黒土師器坏小片が出土した。

SK204土坑（第123図） W310・N10グリッドで検出した。SK203と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形はほぼ円形と思われ、規模は径60cm、深さ8cmで、壁面は開きぎみに立ち上がる。断面形はU字形で、底面は擂鉢状である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK205土坑（第123図） W310・N10グリッドで検出した。SD200と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不明で、検出した規模は南北105cm、東西63cm、深さ30cmで、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。断面形はU字形で、底面は擂鉢状である。堆積土は3層に分層される。遺物は出土していない。

3) 性格不明遺構

SX36性格不明遺構（第125図、図版9） W310~320・N0~S0~N10グリッドで検出し、南側の調査区外へ延びる。

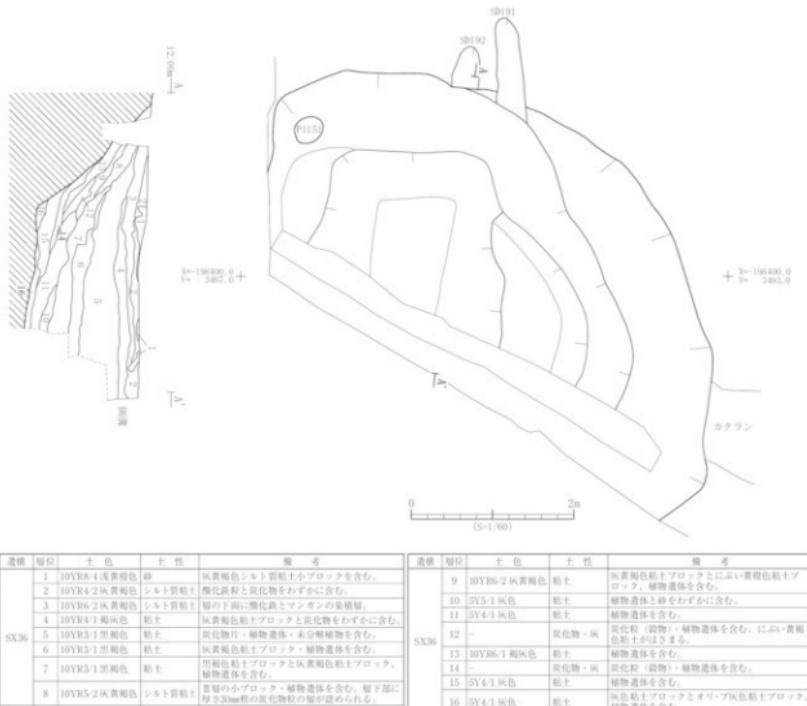


第124図 土坑出土遺物

SD191・192・207、P1151と重複関係にあり、SD207より新しく、他の遺構より古い。平面形は不整円形と思われ、検出した規模は東西645cm、南北550cm、深さ95~103cmである。底面には段差があり、中央部が低く、東側と西側が高い。堆積土は16層に分層される。遺物は、須恵器、土師器小片が出土した。

4) 溝跡

SD 4溝跡（第117・126図）W300~310・N20~S10グリッドで検出した。SD5と並行する。1B区で確認された溝跡と同一の溝と考えられる。SB3・4、SK175・178、SD162、P982・1033と重複関係にあり、SK175・178より新しく、他の遺構より古い。また、SD162と同一の溝の可能性がある。方向はN-10°-Eの南北溝で、部分



第125図 SX36性格不明遺構平面図・断面図

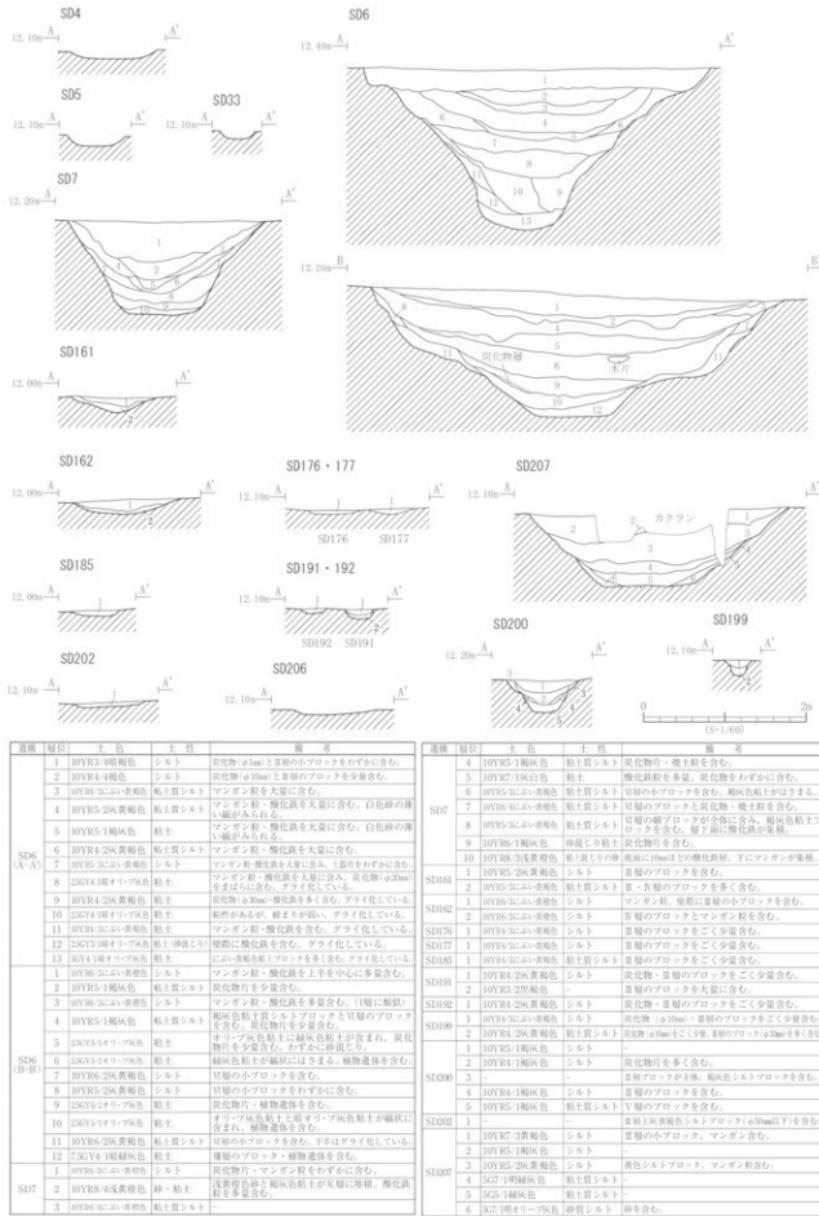
的に途切れる。規模は長さ36.00m、幅30~125cm、深さ3~17cmである。断面形はU字形または逆台形である。遺物は、土師器壺小片が出土した。

SD 5溝跡（第117・126図） W300・N20グリッドで検出した。SD 4と並行する。1B区で確認された溝跡と同一の溝と考えられる。P1028と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-10°-Eの南北溝で、規模は長さ4.30m、幅55~80cm、深さ11~14cmである。断面形はU字形である。遺物は、土師器内黒坏小片が出土した。

SD 6溝跡（第117・126図、図版10） W300~310・N20~S10グリッドで検出した。1B区で確認された溝跡と同一の溝と考えられる。SB 5、SD33・207、SK183・190と重複関係にあり、SK190より新しく、他の遺構より古い。方向はN-10°-Eの南北溝で、規模は長さ19.30m、幅275~385cm、深さ124~180cmである。断面形は逆台形または漏斗形で、堆積土は13層に分層される。遺物は、3点出土し、第127図に図示した。1は須恵器壺の底部片である。2は近世土器の七輪、3は茶臼の下白である。

SD 7溝跡（第117・126図） W310・N20グリッドで検出した。1B区で確認された溝跡と同一の溝と考えられる。北側の調査区外へ延び、南側はSD200と重複しているが、同一の溝の可能性がある。方向はN-10°-Eで、規模は長さ3.15m、幅240cm、深さ115cmである。断面形は逆台形で、堆積土は10層に分層される。遺物は、赤焼土器、須恵器壺、内黒土師器壺、土師器等の小片、茶臼が出土し、茶臼を第127図4に図示した。上白である。

第4節 下ノ内跡遺2C区の調査



第126図 SD4～7・33・161・162・176・177・185・191・192・199・200・202・206・207溝跡断面図

SD33溝跡（第117・126図） 調査区西側のW310～320・N10グリッドで検出した。1B区で確認された溝跡の延長部分にあたり同一の溝と考えられる。SK194、SD191・200・1146と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-85°-Eの東西溝で、規模は長さ7.80m、幅30～60cm、深さ6～12cmである。断面形はU字形である。遺物は、土師器小片が出土した。

SD161溝跡（第117・126図） W290・N10～20グリッドで検出した。方向はN-5°-Eの南北溝である。規模は長さ6.25m、幅95～120cm、深さ15～21cmである。断面形はU字形で、堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

SD162溝跡（第117・126図） W290～300・N10グリッドで検出した。SD4と接続しており、同一の溝の可能性がある。方向はN-86°-Eの東西溝である。規模は長さ12.00m、幅85～160cm、深さ9～15cmである。断面形はU字形で、堆積土は2層に分層される。遺物は、土師器内黒坏小片等が出土した。

SD176溝跡（第117・126図） W300・N0-S0グリッドで検出した。SD177と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-89°-Wの東西溝である。規模は長さ4.10m、幅40～90cm、深さ3～9cmである。断面形はU字形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD177溝跡（第117・126図） W300・N0-S0グリッドで検出した。SD176と重複関係にあり、本遺構が古い。一部途切れるが、方向はN-80°-Wの東西溝である。規模は長さ6.80m、幅20～60cm、深さ4～7cmである。断面形はU字形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD185溝跡（第117・126図） W310・N0-S0～S10グリッドで検出した。SK186と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-9°-Eの南北溝である。規模は長さ7.25m、幅45～135cm、深さ1～9cmである。断面形はU字形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD191溝跡（第117・126図） W310・N0-S0グリッドで検出した。SX36、SD33と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-2°-Wの南北溝である。規模は長さ5.05m、幅26～45cm、深さ8～10cmである。断面形はU字形である。堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

SD192溝跡（第117・126図） W310～320・N10グリッドで検出した。SX36と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-3°-Wの南北溝である。規模は長さ1.95m、幅26～40cm、深さ4cmである。断面形は皿状である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

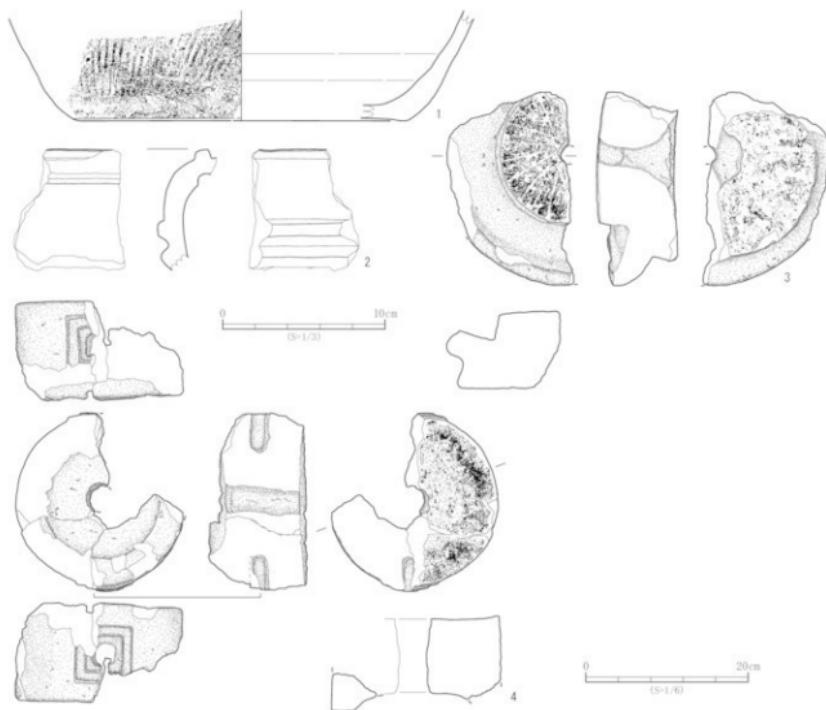
SD199溝跡（第117・126図） W310・N20グリッドで検出した。P1050～1053・1069・1156と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-2°-Eの南北溝である。規模は長さ3.00m、幅20～34cm、深さ12～15cmである。断面形はU字形である。堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

SD200溝跡（第117・126図） W310・N10～20グリッドで検出した。SD7と接続しており、同一の溝の可能性が考えられる。SK201・203・205、SD33・202、P1146と重複関係にあり、SK201より古く、他の遺構より新しい。方向はN-13°-Eの南北溝である。規模は長さ11.75m、幅75～130cm、深さ14～46cmである。断面形は逆台形である。堆積土は5層に分層される。遺物は出土していない。

SD202溝跡（第117・126図） W310～320・N10グリッドで検出した。SK193・198・201、SD200、P1125・1134・1153・1154と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-86°-Eの東西溝である。規模は長さ7.60m、幅50～150cm、深さ3～5cmである。断面形は皿状である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD206溝跡（第117・126図） W310・N10～20グリッドで検出した。SK197、P1042・1119・1120と重複関係にあり、本遺構が古い。方向はN-2°-Eの南北溝である。規模は長さ5.80m、幅65～115cm、深さ10cmである。断面形は逆台形と思われる。遺物は出土していない。

SD207溝跡（第117・126図） W310・N10～N0-S0グリッドで検出した。SX36、SD6と重複関係にあり、本



第127図 溝跡出土遺物

遺構が古い。方向はN-60°-Eの東西溝で、規模は長さ2.30m、幅は不明、深さ10cmである。断面形は逆台形と思われる。堆積土は6層に分層される。遺物は、赤焼土器、内黒土師器、土師器甕等が出土した。

5) ピット（第117図）

233基のピット（P179・180・188・930～1028・1030・1032～1058・1060～1156・1158・1159）を検出した。調査区中央から東側のE290～310・N210に分布している。

また、P179・180内には根石が確認された。遺物は土師器坏、内黒土師器坏、土師器甕、須恵器坏、須恵器甕、近世陶磁器小片などが出土している。そのうちP179から出土した舶載磁器小片を第128図に図示した。中国産の青白磁合子の蓋と考えられる。



第128図 P179 出土遺物

(2) V層検出の遺構と遺物 (第131図、図版9)

1) 壁穴住居跡

SI208壁穴住居跡 (第129図、図版10)

【位置】 W 290~300・N 10~20グリッドに位置する。

【新旧関係】 小溝状造構 I-9・11・13と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

【規模・形態】 北東～南西3.50～3.85m、北西～南東2.80～3.20mの方形である。周溝は検出されていない。

【主軸方位】 カマド基準でN-53°-Wである。

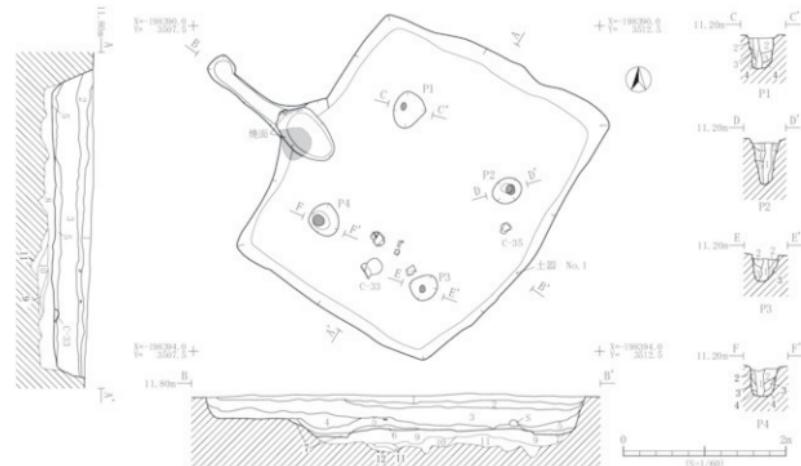
【堆積土・構築土】 12層に分層した。1～7層は住居堆積土、8～12層は掘り方理土である。

【壁面】 床面からやや外傾して立ち上がり、壁高は東側では床面から51cmである。

【柱穴】 配置・規模からP1～4が主柱穴と考えられ、全てに径10～15cm程の柱痕跡が検出されている。柱穴掘り方の規模は径35～49cm、深さは39～58cmである。

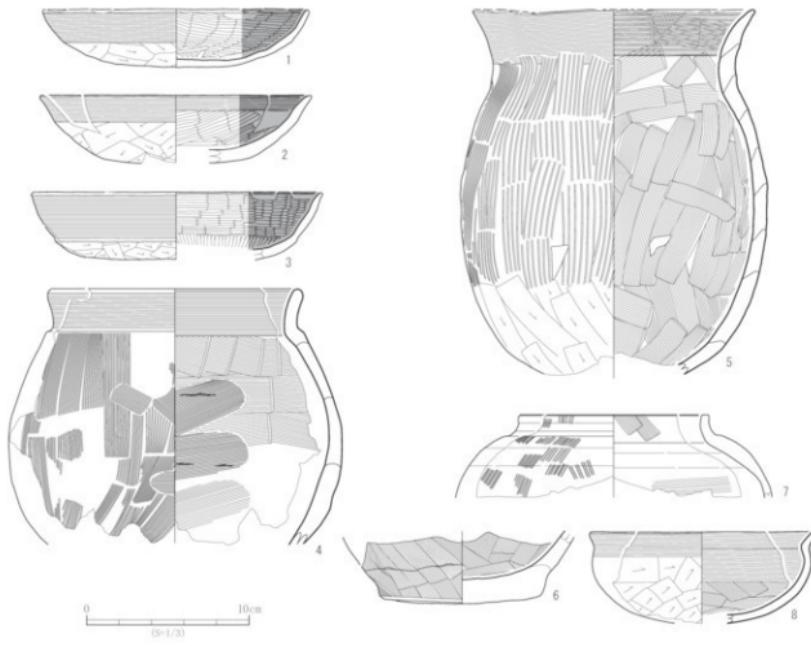
【床面】 掘り方理土の上面を床面にしている。中央部分がわずかに高くなっている。

【カマド】 住居跡北西壁中央に位置しており、両袖部分は残存していない。燃焼部は奥行82cm、幅50cmである。煙道部は長さ105cm、幅21～33cm、深さ25cmで、ほぼ水平に延び先端部で立ち上がる。焼面は燃焼部の奥壁周辺と西側で認められた。



遺構	層位	土色	土性	備考	遺構	層位	土色	土性	備考
SI208	1	10YR4-26暗褐色	粘土質シルト	炭化物少量、燒土・マンガン鉱を含む。	SI208 P1	1	10YR5-29M黒褐色	粘土	(柱穴)
	2	10YR5-42S-黄褐色	粘土質シルト	炭化物少量、燒土・マンガン鉱(深さ50cm)を含む。		2	10YR4-4褐色	粘土	-
	3	10YR4-5C-AS-黃褐色	粘土	炭化物少量、燒土(φ30mm程)・マンガン鉱・礫(φ10mm)を含む。		3	10YR5-42S-黄褐色	粘土質シルト	-
	4	10YR4-4褐色	粘土	炭化物(φ30～50mm)・燒土・マンガン鉱を含む。		1	10YR5-29M黒褐色	粘土	(柱穴)
	5	10YR3-4B褐色	粘土	炭化物少量、燒土・マンガン鉱を含む。		2	10YR5-42S-黄褐色	粘土	-
	6	10YR4-4褐色	粘土	黄褐色跡・シルト・マンガン鉱を含む。炭化物・焼土をわずかに含む。		3	10YR4-4褐色	粘土	-
	7	10YR3-3C褐色	粘土	燒土・炭化物を含む。(カマド燃焼部)		4	10YR4-4褐色	粘土	-
	8	10YR3-3D褐色	粘土	-		5	10YR3-4B褐色	粘土	(柱穴)
	9	10YR4-4褐色	粘土質シルト	炭化物・燒土を大量に含む。		1	10YR5-29M黒褐色	粘土	(柱穴)
	10	10YR4-5C-AS-黄褐色	粘土質シルト	-		2	10YR5-42S-黄褐色	粘土質シルト	-
	11	10YR5-4C-AS-黄褐色	粘土質シルト	-		3	10YR5-4B褐色	粘土質シルト	-
	12	10YR4-6褐色	粘土質シルト(8～12層理方理土)	-		1	10YR5-4B褐色	粘土	(柱穴)
	13	10YR4-6褐色	粘土質シルト	燒土を大量に含む。		2	10YR5-42S-黄褐色	粘土質シルト	-
	14	10YR4-6褐色	粘土質シルト	-		3	10YR5-4B褐色	粘土質シルト	-
	15	10YR4-6褐色	粘土質シルト	-		4	10YR5-6黄褐色	粘土質シルト	-

第129図 SI208壁穴住居跡平面図・断面図



No.	登録番号	出土遺物	解 位	種 別	器 様	寸法・底径・器高(cm)	外面調整	内面調整	備 考	写真回数
1	C-29	SI208	2	土師器	环	[16.2] × [6.9] × 3.5	ヨコナデ・ヘラケズリ	ハラミガキ・黒色處理	39-1	
2	C-30	SI208	5	土師器	环	[16.2] × × 施E1	ヨコナデ・ヘラケズリ	ハラミガキ・ココナデ・黒色處理	39-2	
3	C-31	SI208	1	土師器	环	[17.7] × × 施E2	ヨコナデ・ヘラケズリ	ハラミガキ・黒色處理	39-3	
4	C-32	SI208	1	土師器	束	[15.7] × × 施E56	ヨコナデ・ハケメ・西ナデ	ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	39-4	
5	C-33	SI208	5	土師器	束	[17.2] × × 施E23	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	39-5	
6	C-34	SI208	5	土師器	束	× 9.3 × 施E2	ヘラナデ	ハナデ	39-6	
7	E-12	SI208	1	須恵器	短頭壺	70.9 × × 施E10	ログロナデ・タタキ	ロクロナデ・ヘラナデ	39-7	
8	C-35	SI208	5	土師器	环	[13.8] × × 施E5.5	ヨコナデ・ヘラケズリ	既入か?	39-8	

第130図 SI208竪穴住居跡出土遺物

【掘り方】深さ8~29cm、底面の中央が掘り盛る形状である。

【出土遺物】堆積土から多くの須恵器、土師器片が出土している。そのうち、8点を第130図に図示した。1~3は土師器環である。有段丸底環であり、黒色処理が施されている。4~6は土師器束である。4は頭部に段をもち、外反する短い口縁部を持つ球胴の束である。5は長胴で丸底の束である。6は束の底部である。7は須恵器短頭壺の上半部破片である。外面には一部タタキ痕が残されている。8は土師器環である。丸底で頭部に強い屈曲をもち、短く外反する。他に小片のため図示はできなかったが、手持ちヘラケズリ調整の須恵器環底部などが出土している。1~3の有段丸底環、5のやや下影れた丸底の長胴束などから、本住居跡の年代は、7世紀末~8世紀初頭と考えられる。

SI209竪穴住居跡（第132・133図、図版12）

【位置】W 300・N 10~20グリッドに位置する。

【新旧関係】SD326、小溝状構造I-13と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

【規模・形態】東西5.20m、南北3.80~4.45mの方形である。周溝は検出されていない。



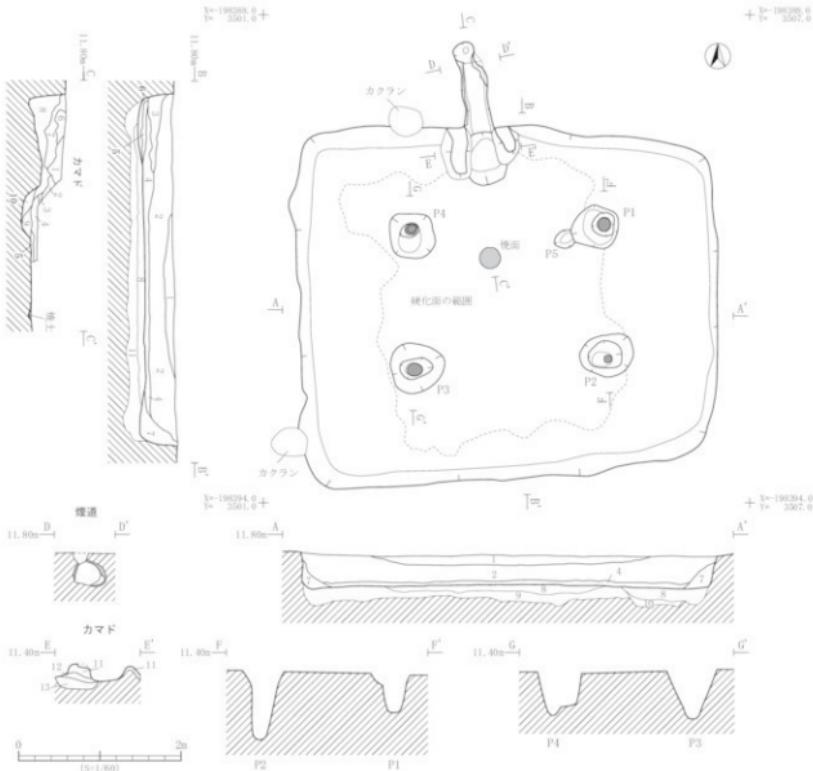
図131図 下ノ内道路2C区Y解消構造圖

【主軸方位】カマド基準でN-5°-Wである。

【堆積土・構築土】11層に分層した。1～7層は住居堆積土、8～11層は掘り方埋土である。カマド関連層位は1～13層に分層した。

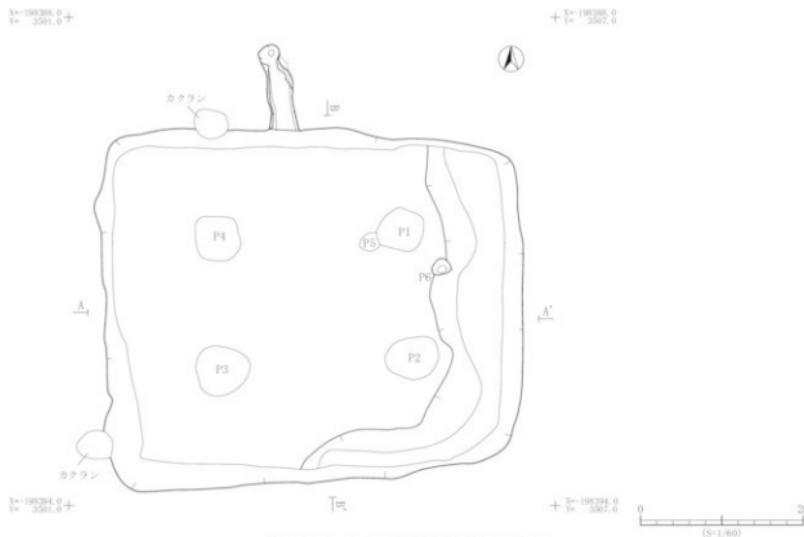
【壁面】周溝の底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東側では床面から42cmである。

【柱穴】配置・規模からP1～4が主柱穴と考えられ、全てに径8～20cmの柱痕跡が認められる。柱穴掘り方の規

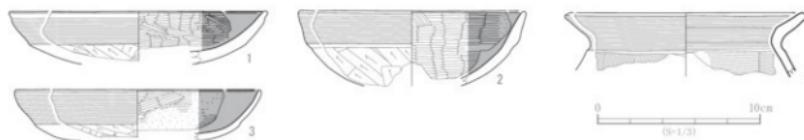


遺構 層位 土色 土性				遺構 層位 土色 土性			
				参考			
1	3Y3/296オリーブ色	シルト	下部に炭化物・焼土の層がある。	1	3Y3/296-301・黄褐色	シルト	焼土ブロックをわずかに含む。
2	3Y6/4リップ色	シルト	炭化物・焼土をわずかに含む。	2	7.5Y6/196色	シルト	焼土ブロックを含む。
3	3Y6/296オリーブ色	砂質シルト	炭化物を多くわずかに含む。	3	-	-	焼土ブロック。(カマド下井部分?)
4	3Y7/296白色	砂質シルト	青苔植物をくわわげに含む。カマド周辺には炭化物・焼土を多く含む。	4	3Y7/296白色	砂質シルト	炭化物・焼土を多く含む。
5	-	シルト	炭化物・焼土ブロックが多く、焼灰になってしまい。	5	-	-	炭化物・焼土薄層となって継続している。
6	3Y6/296オリーブ色	砂質シルト	炭化物を多くわずかに含む。	6	-	-	焼土層。(堆積基盤?)
7	2.5Y15/296オリーブ色	シルト	炭化物・焼土をわずかに含む。	7	2.5Y6/301-302・黄褐色	シルト	焼土の小ブロックを含み、縫まりが良い。
8	2.5Y5/3青褐色	砂質シルト	青苔植物ブロックを含み、表面に堅く締まる。	8	-	-	焼土ブロック1体・シルトを含む。
9	2.5Y5/296白色	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む。	9	7.5Y6/301・黄褐色	砂質シルト	焼土ブロックを多く含み、焼土・シルトを含む。
10	2.5Y5/3青褐色	シルト	青苔植物ブロックを多く含む。豆棚のブロックを含む。	10	3Y7/296白色	砂質シルト	炭化物・焼土・灰を多く含む。
11	2.5Y6/301-302・黄褐色	シルト	豆棚のブロックを含む。	11	2.5Y7/302・黄褐色	砂質シルト	明黄色地砂質ブロックを含み、堅く締まる。
SI209				12	5Y6/3オリーブ色	砂質シルト	炭化物・焼土を含み、縫まりがある。
				13	2.5Y6/296黄色	シルト	炭化物片をわずかに含む。(11-13層地盤)

第132図 SI209堅穴住居跡平面図・断面図



第133図 SI209竪穴住居跡掘り方平面図



第134図 SI209竪穴住居跡出土遺物

模は径50~67cm、深さは48~85cmである。

【床面】掘り方理土の上面を床面としている。ほぼ平坦であるが、中央部分がわずかに高く、固く締まっている。

【カマド】住居跡北壁中央に位置している。構造・規模は両袖部が壁面から並行して延び、袖部の長さは48~54cm、高さは床面から11cm程残存している。燃焼部は奥行き70cm、幅32cmで、煙道部は長さ110cm、幅21~32cm、深さ22~31cmで、先端部に向かい傾斜し、奥壁際でピット状になり、垂直に立ち上がる。カマド内での焼面は明瞭でなかつたが、P1とP4の間で直径25cmの範囲に焼面が確認された。

【掘り方】深さ13~25cmで、底面東側が低くなってしまっており、若干凹凸があるが、ほぼ平坦である。

【出土遺物】堆積土から少量の土師器が出土しており、4点を第134図に図示した。1~3は有段丸底の壺である。2は1・3に比べてやや深い器形である。4は甕である。1~3より本住居跡の年代は、7世紀末~8世紀初頭と考えられる。

SI210堅穴住居跡（第135図）

【位置】 W310・N10グリッドに位置する。

【新旧関係】 小溝状遺構I-8と重複関係にあり、本住居跡が古い。搅乱とⅢ層検出のSD6により東部を削平されている。

【規模・形態】 南北4.12m、東西の検出長4.10mで、平面形は方形と思われる。カマドは検出されていないが、北壁に旧カマドと思われる短い煙道を検出した。規模は長さ80cm、幅25~46cm、深さ39~51cmである。

【主軸方位】 旧煙道を基準にするならば、N-8°-Eである。

【堆積土・構築土】 10層に分層した。1~3層は住居堆積土、4層は周溝内堆積土、5~7層はピットの堆積土、8~10層は掘り方埋土である。旧カマドは4層に分層した。

【壁面】 周溝の底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西側では検出面から25~38cmである。

【柱穴】 住居床面からはピットが2基検出された。規模は径51・68cm、深さは62・65cmである。P1は位置的に柱穴の可能性がある。

【床面】 掘り方埋土の上面を床面にしている。ほぼ平坦で特に目立った硬化面などはみられなかった。

【周溝】 北西・南西のコーナー付近に遺存し、断面形はU字形である。規模は幅10~22cm、深さ9~11cmである。

【掘り方】 深さ5~40cmで、底面は住居中央が窪まる形状である。

【出土遺物】 堆積土から土師器片・須恵器片が少量出土しており、そのうち土師器3点を第136図に図示した。1は有段丸底壺であり、内面に黒色処理が施されている。2は中型の甕で、厚い平底の底部に薄作りの口縁部をもつ。3は甕で、胴部の中心よりやや下に最大径をもつ。1・2から、本住居跡の年代は、7世紀末~8世紀初頭頃と考えられる。

2) 溝 跡

SD211溝跡（第131・137図） W300~320・N0~S0~N10グリッドで検出した。小溝状遺構I-21と重複関係にあり、本遺構が新しい。方向はN-64°-Wの東西溝である。規模は長さ23.60m、幅70~120cm、深さ26~38cmである。断面形はU字形で、堆積土は3層に分層される。遺物は出土していない。

SD326溝跡（第131・137図、図版10） W300・N10~20グリッドで検出した。SI209、小溝状遺構I-2・3・16・17と重複関係にあり、SI209より古く、他の遺構より新しい。方向はN-15°-Eの南北溝である。規模は長さ15.15m、幅60~110cm、深さ26~37cmである。断面形はU字形で、堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

3) 小溝状遺構群

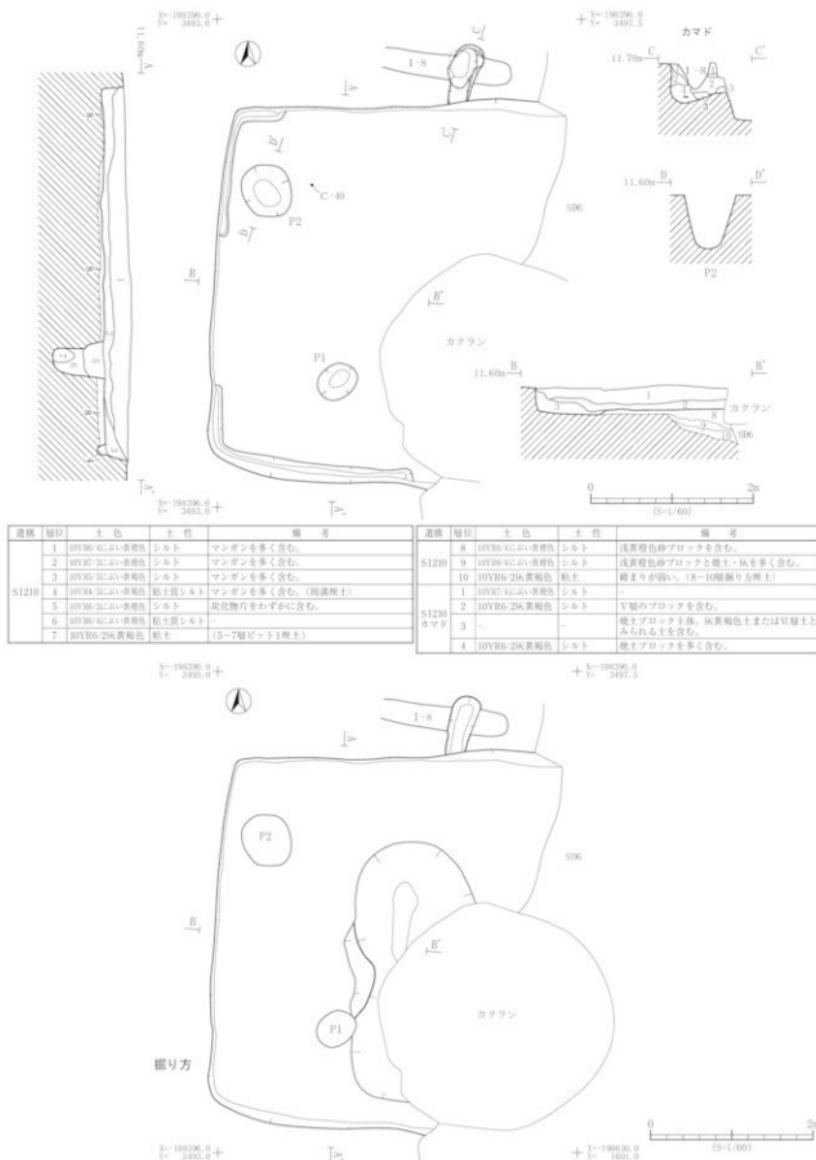
畑耕作の痕跡と考えられる遺構群であり、I群を検出した。

I群（第131・138図） ほぼ調査区全域で検出されている。東西方向の小溝状遺構群で、26条の小溝で構成されている。方向はN-74~88°-W、東西・N-84°-Eで、検出長1.25~24.90m、幅15~52cm、深さ2~22cm、小溝の間隔は0~2.2mである。断面形はU字形である。遺物は出土していない。

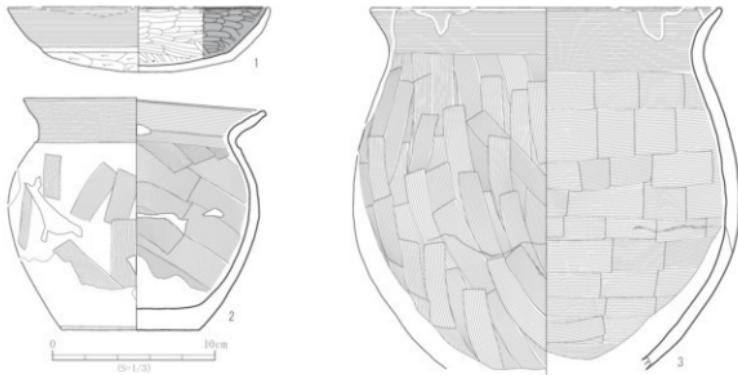
4) ピット（第131図）

20基のピット（P785・845、P1162~1179）を検出した。主に調査区中央から北東側に散漫に分布している。遺物は出土していない。

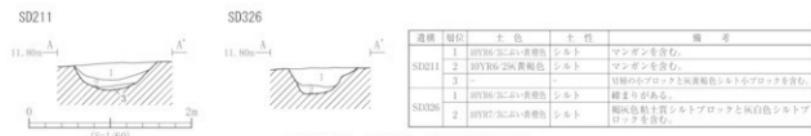
第4節 下ノ内遺跡2C区の調査



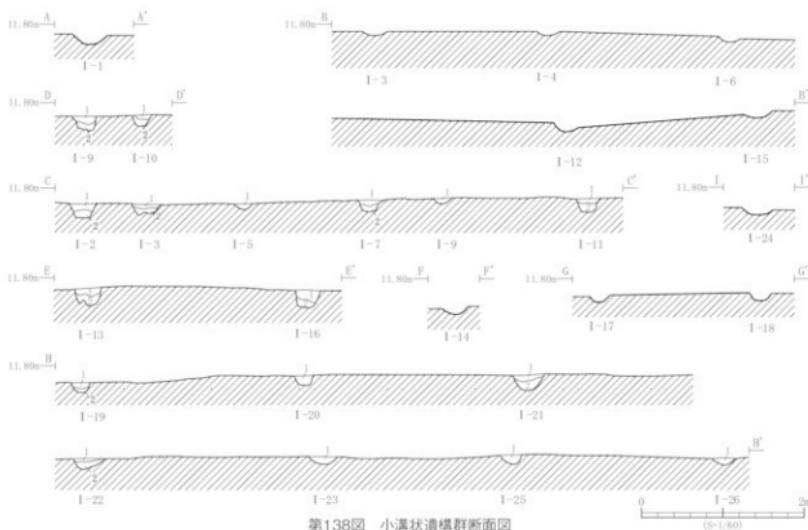
第135図 SI210竪穴住居跡平面図・断面図、振り方平面図



第136図 SI210堅穴住居跡出土遺物



第137図 SD211・326溝跡断面図



第138図 小溝状構造群断面図

第4節 下ノ内跡2C区の調査

小溝状遺跡土層記

遺構	層位	土色	土性	備考
1-2	1 [HY37-32-4] 黄褐色 2 [HY36-29] 黄褐色	シルト	V層のブロックを少量、マンガンを含む。 にひい黄褐色シルト小ブロックを含む。	
1-3	1 [HY37-32-4] 黄褐色 2 [HY36-29] 黄褐色	シルト	V層のブロックを少量、マンガンを含む。 にひい黄褐色シルト小ブロックを含む。	
1-5	1 [HY37-32-4] 黄褐色	シルト	V層のブロックを少量、マンガンを含む。	
1-7	1 [HY37-32-4] 黄褐色 2 [HY36-29] 黄褐色	シルト	V層のブロックを少量、マンガンを含む。 にひい黄褐色シルト小ブロックを含む。	
1-9	1 [HY37-32-4] 黄褐色 2 [HY36-29] 黄褐色	シルト	V層のブロックを少量、マンガンを含む。 にひい黄褐色シルト小ブロックを含む。	
1-10	1 [HY37-32-4] 黄褐色 2 [HY36-29] 黄褐色	シルト	V層のブロックを少量、マンガンを含む。 にひい黄褐色シルト小ブロックを含む。	
1-11	1 [HY37-32-4] 黄褐色 2 [HY36-29] 黄褐色	シルト	V層のブロックを少量、マンガンを含む。 にひい黄褐色シルト小ブロックを含む。	
1-13	1 [HY37-32-4] 黄褐色	シルト	V層のブロックを少量、マンガンを含む。	

(3) VI層検出の遺構と遺物 (第139図)

1) 穴穴住居跡

S1212 穴穴住居跡 (第140図、図版12)

【位置】 W 310・N 20グリッドに位置し、北側の調査区外へ延びる。

【新旧関係】 III層検出のSD 6により東側を削平されている。

【規模・形態】 検出された範囲は南北2.48m、東西1.78mで、平面形は方形ないしは長方形であるものと思われる。周溝・カマド・柱穴は検出されていない。

【堆積土・構築土】 4層に分層した。全て住居堆積土である。

【壁面】 床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西壁では検出面から68cmである。

【床面】 挖り方底面を直接床面にしている。ほぼ平坦で特に目立った硬化面などはみられなかった。

【出土遺物】 堆積土から少量の土器片が出土しており第141図に図示した。有段丸底坏である。口縁部が若干内側に屈曲する。本住居跡の年代は、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

2) 土坑

SK213土坑 (第142図、図版12) W 310・N 20グリッドで検出した。平面形は梢円形で、長軸方向はN-4°-Eである。規模は長軸82cm、短軸68cm、深さ25cmで、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。断面形はU字形で、底面は擂鉢状である。堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

SK214土坑 (第142図) W 310・N 10グリッドで検出した。平面形は不整な梢円形で、長軸方向はN-4°-Eである。規模は長軸95cm、短軸50～68cm、深さ20～28cmで、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は逆台形で、底面には凸凹がある。堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

SK216土坑 (第142図、図版12) W 300・N 10グリッドで検出し、小溝状遺構I-26と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は梢円形で、長軸方向はN-48°-Wである。規模は長軸137cm、短軸112cm、深さ17cmで、壁面は開きぎみに立ち上がる。断面形はU字形で、底面は浅い皿状である。堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

SK294土坑 (第142図) W 310・N 0-S0～S10グリッドで検出し、一部で搅乱により削平されている。平面形は梢円形で、長軸方向はN-26°-Eである。規模は長軸162cm、短軸130cm、深さ10cmで、壁面は緩やかに立ち上がる。断面形は皿状で、底面は擂鉢状である。遺物は出土していない。

3) 性格不明遺構

SX295性格不明遺構 (第143図) W 310～320・N 20グリッドで検出し、北側の調査区外へ延びる。P309～312と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不整形で、検出した規模は東西315cm、南北30～65cm、深さ6cmである。断面形は皿状である。遺物は出土していない。

SX296性格不明遺構 (第143図) W 300・N 0-S0グリッドで検出し、東側の調査区外へ延びる。平面形は構状



第139図 下ノ内道路2C区V面構造配置図

と思われ、長軸方向はN-72°-Wである。検出した規模は長軸145cm、短軸48~105cm、深さ11cmである。断面形は皿状である。遺物は出土していない。

SX297性格不明遺構（第143図） W300・N0-S0グリッドで検出し、V層検出のSD211により南側を削平されている。P334と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不整形で、検出した規模は北西から南東302cm、北東から南西100cm、深さ7cmである。断面形は皿状である。遺物は出土していない。

SX298性格不明遺構（第143図） W300・N0-S0~S10グリッドで検出した。平面形は不整形で、長軸方向はN-32°-Wである。規模は長軸335cm、短軸40~140cm、深さ11~13cmである。断面形は擂鉢状である。遺物は出土していない。

SX299性格不明遺構（第143図） W300・N0-S0~S10グリッドで検出した。平面形は不整梢円形で、長軸方向はN-81°-Eである。規模は長軸167cm、短軸60cm、深さ5~13cmである。断面形は皿状である。遺物は出土していない。

SX300性格不明遺構（第143図） W300・S10グリッドで検出した。平面形は不整形で、長軸方向はN-60°-Eである。規模は長軸182cm、短軸45~70cm、深さ15cmである。断面形は皿状である。遺物は出土していない。

SX301性格不明遺構（第143図） W300・S10グリッドで検出した。平面形は不整形で、長軸方向はN-67°-Eである。規模は長軸135cm、短軸70~100cm、深さ12cmである。断面形は皿状である。遺物は出土していない。

SX302性格不明遺構（第143図） W300・S10グリッドで検出した。平面形は不整梢円形で、長軸方向はN-18°-Eである。規模は南北120cm、東西95cm、深さ9cmである。断面形は皿状である。遺物は出土していない。

SX303性格不明遺構（第143図） W300・S10グリッドで検出した。平面形は方形に近い不整形で、規模は一辺65cm、深さ15cmである。断面形はU字形である。遺物は出土していない。

SX304性格不明遺構（第143図） W310・S10グリッドで検出し、西側の調査区外へ延びる。平面形は不整な梢円形と思われ、長軸方向はN-69°-Wである。検出した規模は長軸235cm、短軸105~145cm、深さ17cmである。断面形は皿状で、遺物は出土していない。

SX305性格不明遺構（第143図） W310・S10グリッドで検出し、西側の調査区外へ延びる。P337・338と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不整形で、検出した規模は南北180cm、東西43~100cm、深さ8~14cmである。断面形は皿状である。遺物は出土していない。

SX306性格不明遺構（第143図） W300・S10グリッドで検出した。平面形は不整梢円形で、長軸方向はN-29°-Eである。規模は長軸112cm、短軸60cm、深さ10~16cm、断面形はU字形で、底面の北東側にはピット状の窪みがある。遺物は出土していない。

SX307性格不明遺構（第143図） W310・S10グリッドで検出し、西側の調査区外へ延びる。P348・349と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不明で、検出した規模は南北180cm、東西70cm、深さは不明である。遺物は出土していない。

4) 溝跡

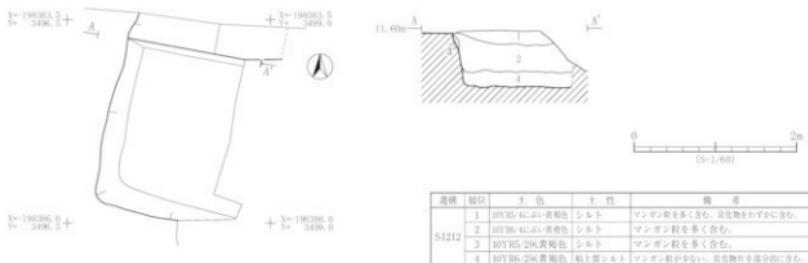
SD215溝跡（第144図） W290~300・N0-S0グリッドで検出した。方向はN-72°-Wで、規模は長さ3.00m、幅77~111cm、深さ10~18cmである。断面形はU字形で、堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

5) 小溝状遺群

畑耕作の痕跡と考えられる遺構群であり、方向と重複関係からI~Ⅲ群に分けられ、I群→II群→Ⅲ群の変遷が確認できる。

I群（第139~145図） W290~300・N0-S0~N10グリッドで検出した。II・Ⅲ群と重複関係にあり、Ⅲ群より古い。北西~南東方向の遺構群で、34条の小溝で構成されている。方向はN-29~67°-Wで、長さ0.75~15.90m、幅12~52cm、

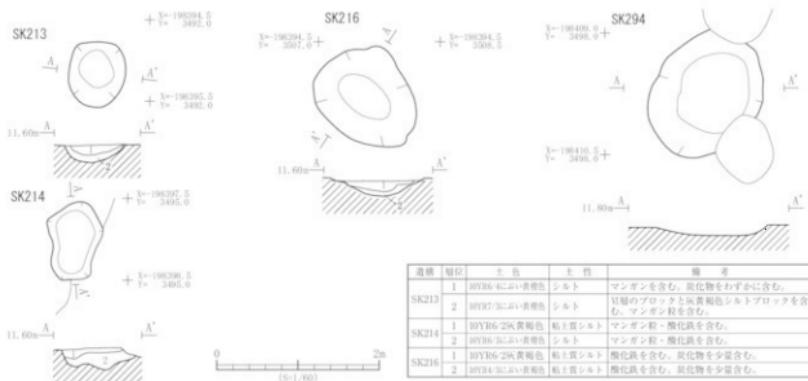
第4節 下ノ内遺跡2C区の調査



第140図 SI212豎穴住居跡平面図・断面図



第141図 SI212豎穴住居跡出土遺物

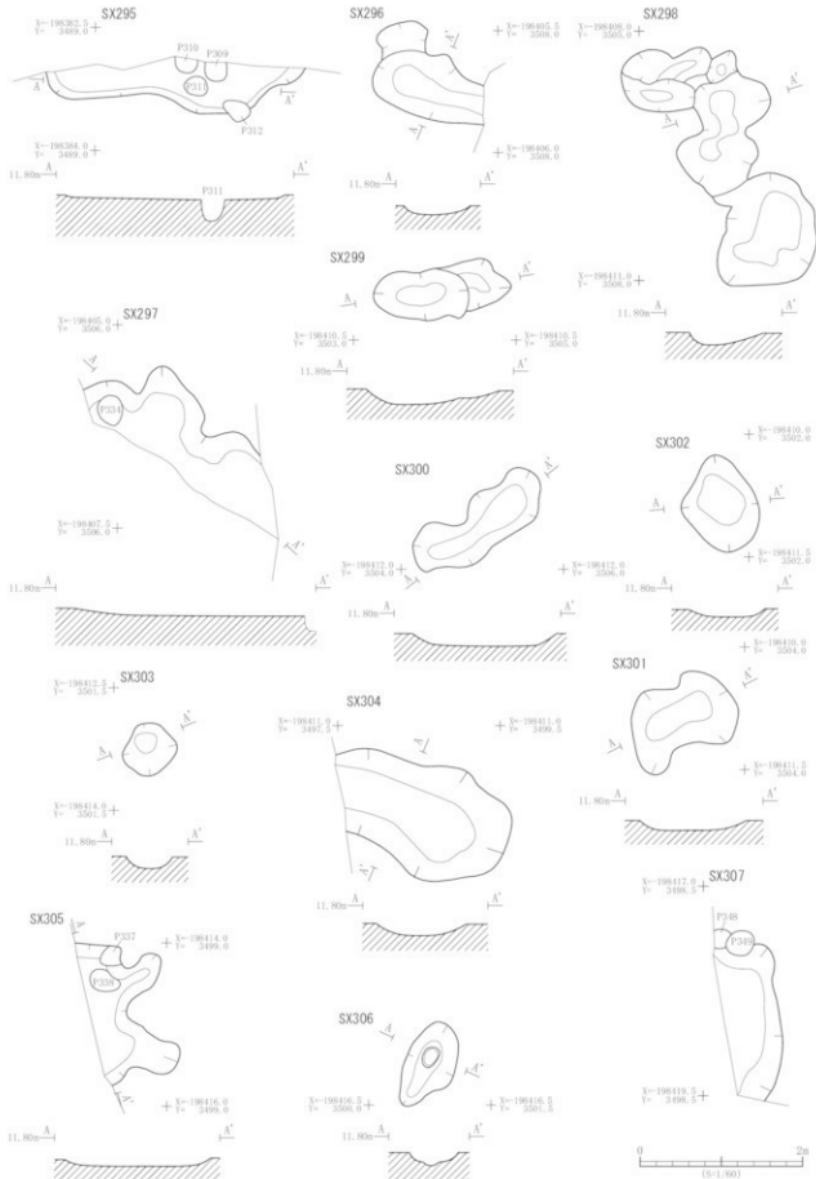


第142図 SK213・314・216・294土坑平面図・断面図

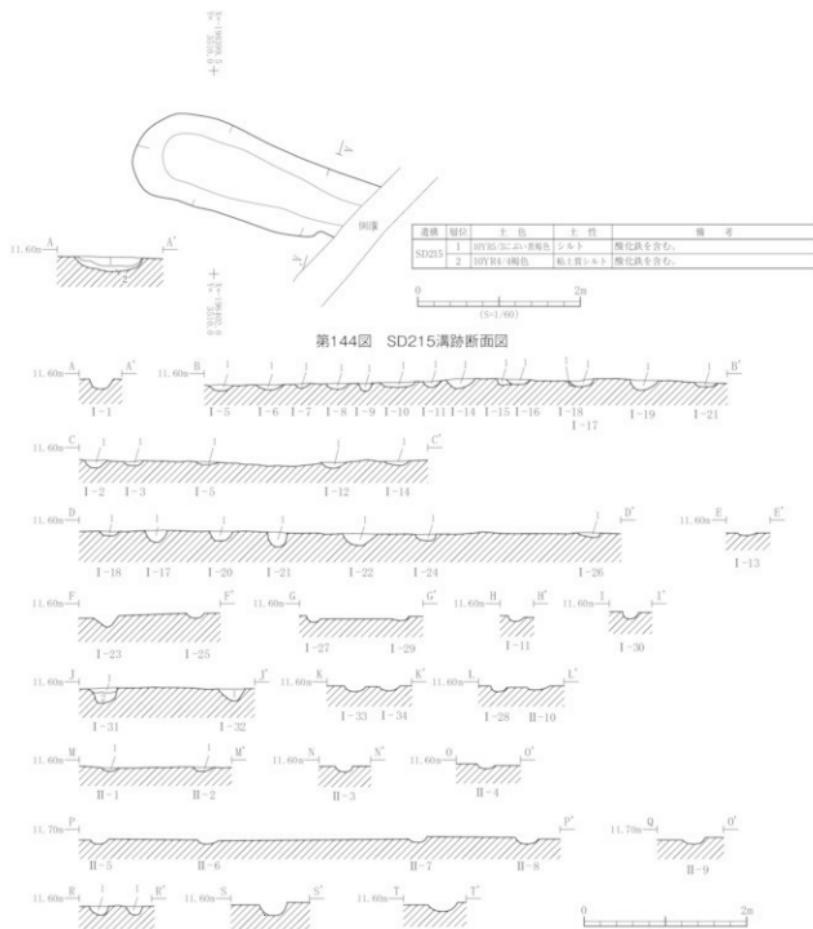
深さ1~19cm、小溝の間隔は0~2.8mである。遺物は出土していない。

II群（第139・145図） W290~310・N10~SI0グリッドで検出した。I群と重複関係にあり、本群が新しい。散漫な分布状況である。東西方向の遺構群で、12条の小溝で構成されている。方向はN-58°~84°-E・N-80°~89°-Wで、長さ0.80~14.90m、幅10~60cm、深さ2~11cm、小溝の間隔は0.90~11.0mである。遺物は出土していない。

III群（第139・145図） W290~310・N0~10グリッドで検出した。I群と重複関係にあり、本群が新しい。調査区北側と西側で検出されている。南北あるいは北西から南東方向の遺構群で、4条の小溝で構成されている。方向はN-8°~30°-W・N-11°-Eで、長さ0.42~6.35m、幅15~48cm、深さ3~25cm、小溝の間隔は0.20~14.50mである。遺物は出土していない。



第143図 SX295~307性格不明遺構平面図・断面図



第144図 SD215溝跡断面図



第145図 小溝跡構群断面図

6) ピット（第139図） 47基のピット（P308~354）を検出した。調査区全域に散漫に分布している。遺物は土師器小破片が出土した。

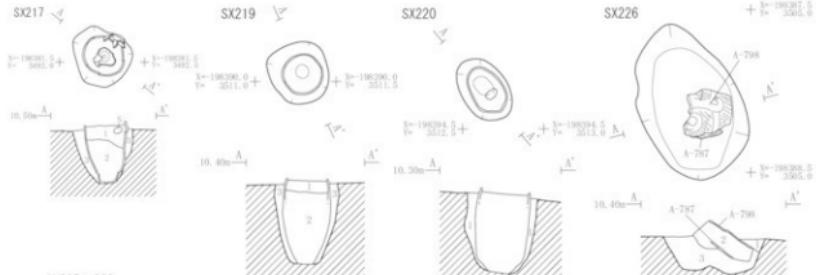
(4) XI層検出の遺構と遺物（第147図）

1) 埋設土器

SX217埋設土器（第146図、図版16） W310・N20グリッドで検出した。掘り方の平面形は長軸44cm、短軸40cmの楕円形で、底部が穿孔された深鉢が正位の状態で埋設されていた。検出面から掘り方底面までの深さは38cmで、断面形はU字形である。堆積土は3層に分層され、3層は掘り方理土である。埋設されていた深鉢を第148図に図示した。4単位の波状口縁である。突起の下部は弧状沈線文で区画し、刺突文が充填される。胴部上半には沈線文区画により「S」字状文が横位に連結して文様が展開する。区画内は継位の沈線文で埋められ、胴部下半も同様に継位の沈線が施される。底部は網代痕が認められ、穿孔されている。

SX219埋設土器（第146図） W290・N10~20グリッドで検出した。掘り方の平面形は径40cmのほぼ円形で、深鉢が正位の状態で埋設されていた。検出面から掘り方底面までの深さは50cmで、断面形はU字形である。堆積土は3層に分層され、3層は掘り方理土である。埋設されていた深鉢を第149図に図示した。胴部中位に最大径を持ち、口縁部に向かって緩やかに湾曲する橢形の器形である。

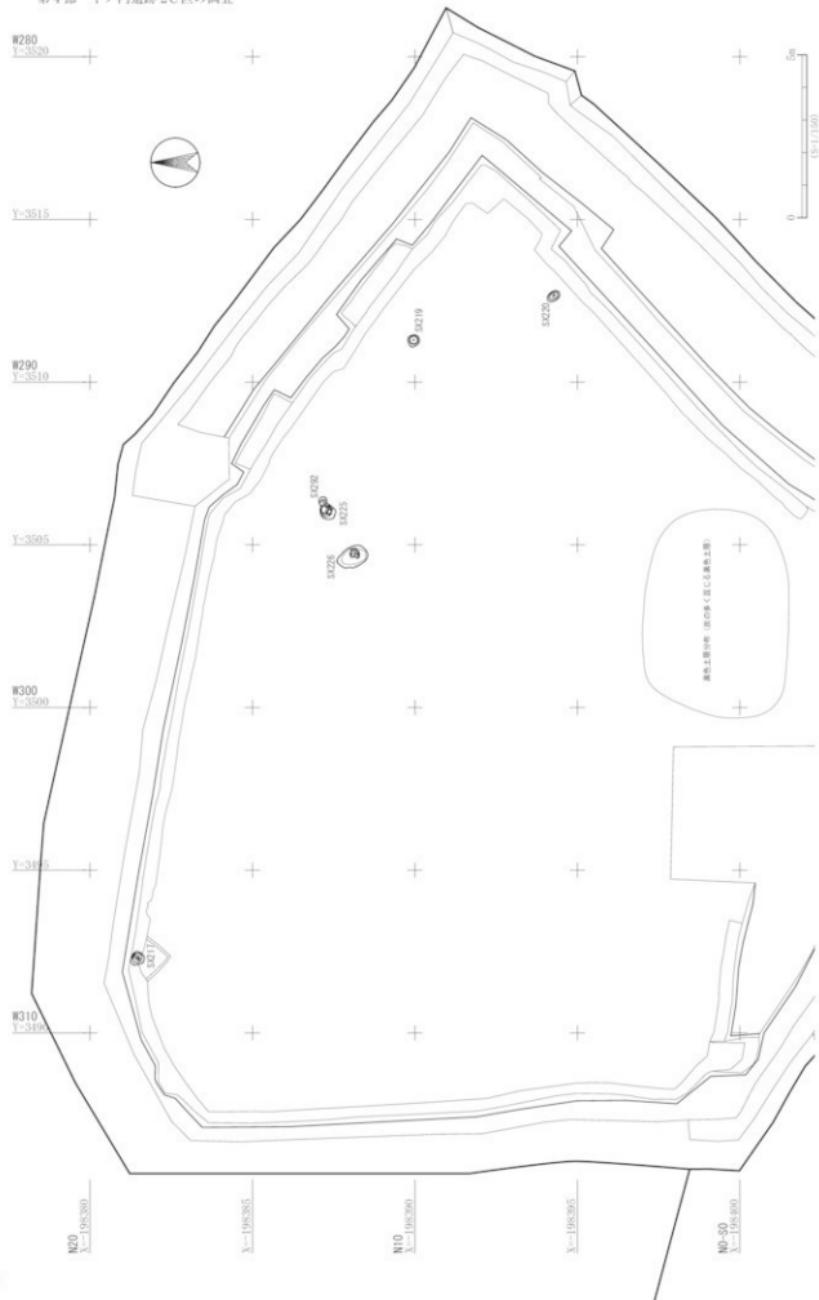
SX220埋設土器（第146図、図版16） W290・N10グリッドで検出した。掘り方の平面形は長軸43cm、短軸28cmの楕円形で、底部が穿孔された深鉢が正位の状態で埋設されていた。長軸方向はN-32°-Wである。検出面から掘り方底面までの深さは50cmで、断面形はU字形である。埋設されていた深鉢を第150図に図示した。胴部に最大径を持ち口縁部が緩やかに内済する橢形の深鉢である。口縁部は楕円形で長軸32cm、短軸20cmである。口縁部に1条の沈線文が巡る。底部は木葉痕が認められ、穿孔されている。また、埋設された土器内部から敲石1点が出土しており、埋設土器内に納められていたものと思われる。



遺構	位	主	主	備
	位	色	性	考
SX217	1	0YTR5-26K-青褐色	粘土質シルト	遺構の小プロックと灰褐色をわずかに含む。
	2	0YTR6-3-4K-青褐色		1層に比べて、色調が明るい。
	3	0YTR6-3-4K-青褐色	粘土質シルト	堅密な土体、色調が明るい。掘り方理土。
SX219	1	0YTR5-26K-青褐色	粘土質シルト	堅密な土体。
	2	0YTR5-26K-青褐色	粘土質シルト	1層に比べて、色調が明るく、疎っぽい。
	3	0YTR5-26K-青褐色	粘土質シルト	堅密な小プロックを多量含む。掘り方理土。
SX220	1	0YTR5-26K-青褐色	粘土質シルト	焼成跡と下層に遺構のプロックを含む。掘り方理土。
	2	0YTR5-26K-青褐色	シルト	灰化物をわずかに含む。
	3	26KV-1-7K-黄褐色	シルト	遺構のプロックを含む。
SX225	1	26KV-1-7K-黄褐色	シルト	遺構のプロックが主。
	2	26KV-1-7K-黄褐色	シルト	褐色土の小プロックと其他の部分を多量含む。
	3	26KV-1-7K-黄褐色	シルト	遺構のプロックを含む。
	4	26KV-1-7K-黄褐色	シルト	褐色土の小プロックと其他の部分を多量含む。
	5	0YTR5-26K-青褐色	シルト	遺構のプロックを含む。掘り方理土。
	6	0YTR5-26K-青褐色	シルト	遺構のプロックを多量含む。掘り方理土。
SX226	1	0YTR5-6-青褐色	シルト	褐色土の小プロックを多量含む。
	2	0YTR5-6-青褐色	シルト	褐色土質シルトを含む。
	3	-	-	黄褐色シルト・褐色土質シルト・灰黃褐色土を含む。

第146図 SX217・219・220・225・226埋設土器、SX292性格不明遺構平面図・断面図

第4節 下ノ内遺跡2C区の調査



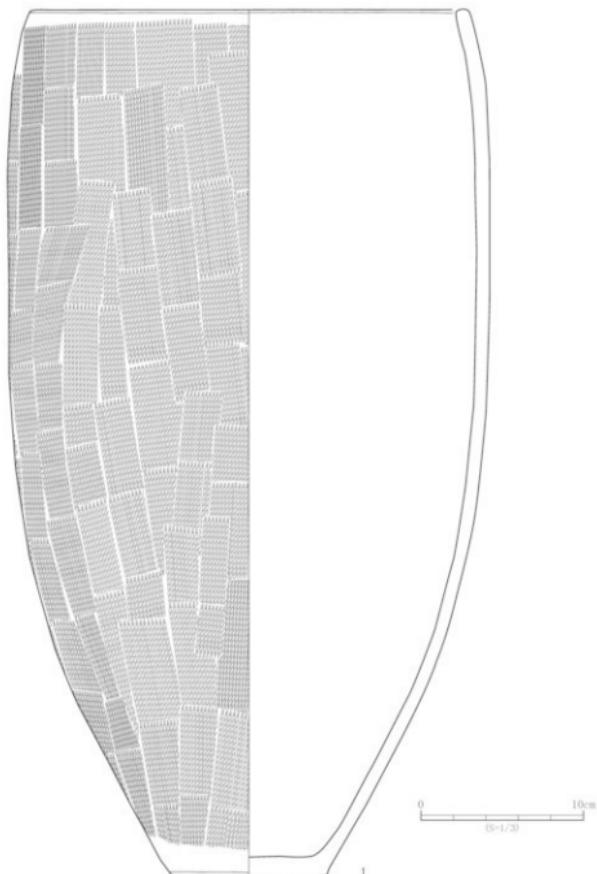
第147図 下ノ内遺跡2C区X層構成配置図



第148図 SX217埋設土器

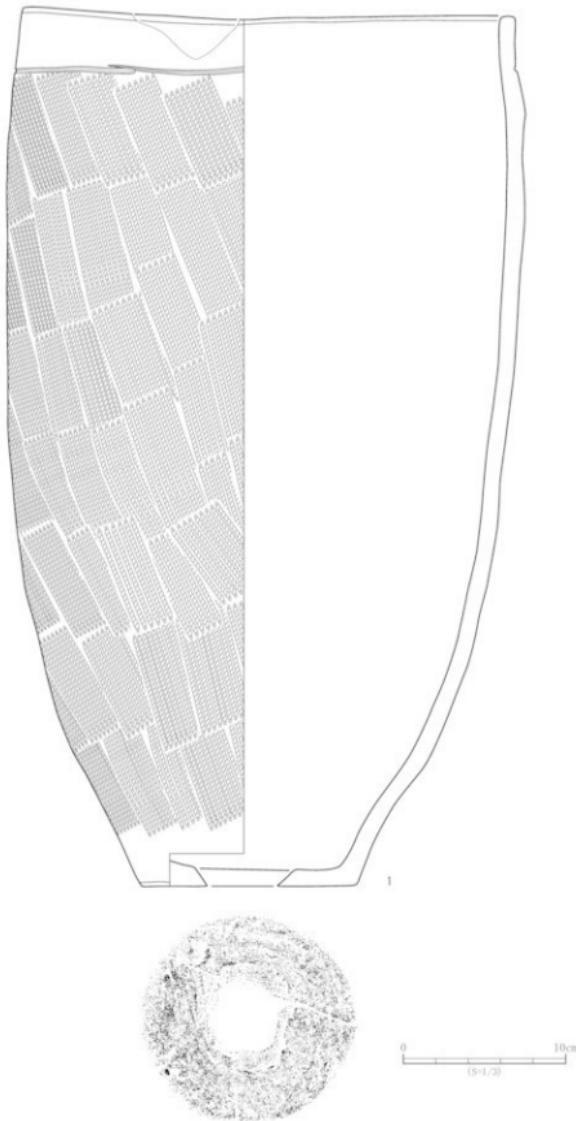
No	登録番号	出土遺物	層	種	器	様	文様等	備考	写真図版
1	A-791	SX217	-	陶土器	深鉢	口縁・側面・三角形切欠	滑び口縁・深鉢文(内・外)・斜め文・L字文・条状文・乳突状・側面凹板	旋削穿孔	40-1

SX225埋設土器（第146図、図版17） W300・N20グリッドで検出した。SX292と重複関係にあり、本遺構が古い。掘り方の平面形は径48cmの不整な円形で、深鉢が口縁部を東側に傾けた斜位の状態で埋設されていた。検出面から掘り方底面までの深さは40cmで、断面形はU字形である。上面から石皿が深鉢の口縁部に蓋をしたような状態で検出されており、東側に接して存在するSX292と一緒に遺構の可能性もある。堆積土は6層に分層され、5・6層は掘り方埋土である。埋設されていた深鉢を第151図に図示した。胴部中位の棱から口縁部に向かってゆるやかに外反する。口縁部には小さな山形の突起を有し、沈線文で「O」字状及び「C」字状文が横位連結して文様が展開し、区画内には刺突文が施文される。また、底部付近では沈線による無文帯が巡る。底部は木葉痕が認められ、穿孔されている。また第152図に石皿を図示した。大型扁平碟の片面に使用による研磨面が認められるもので、使用面が



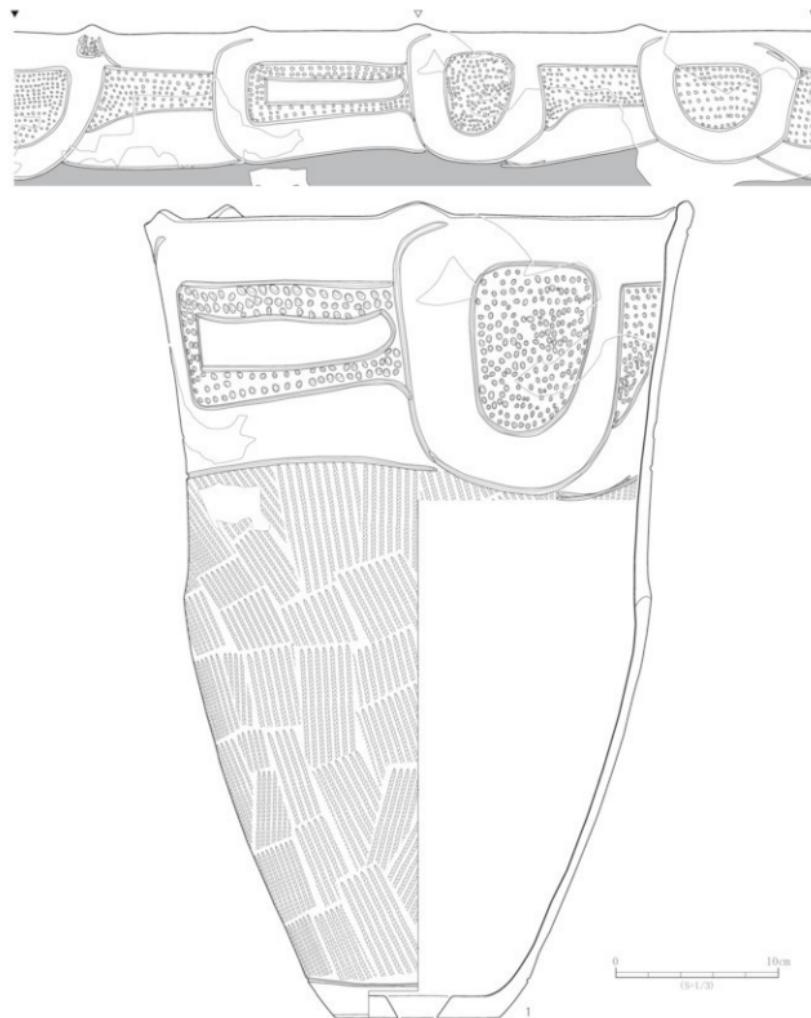
No.	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	文様等	備考	写真図版
1	A-800	SX219	-	陶土器	深鉢	口縁一部-U形文 底部-ナデ		10-2

第149図 SX219埋設土器



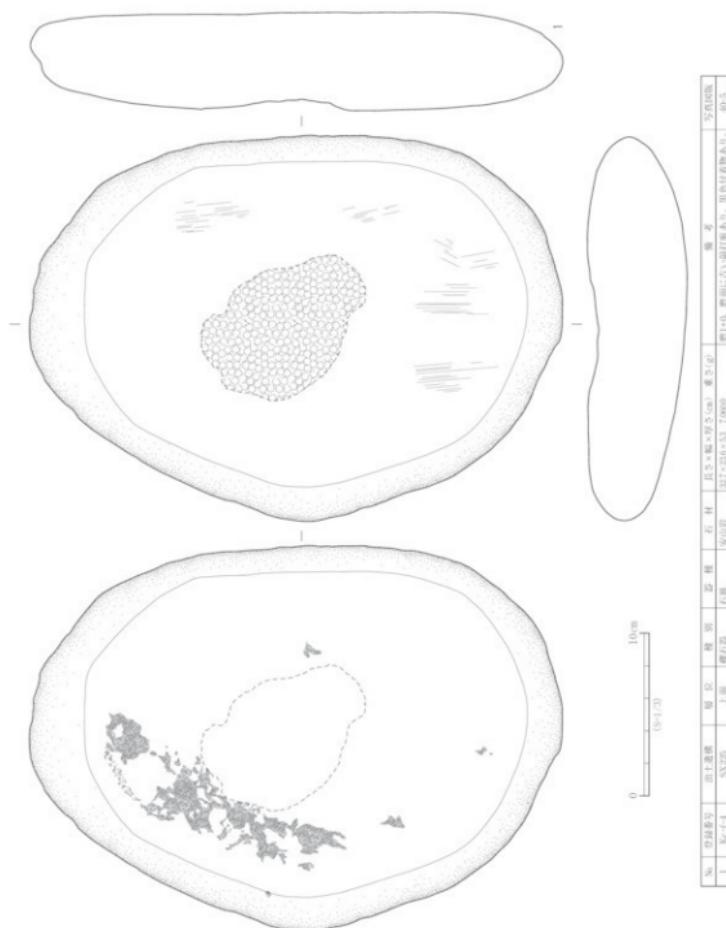
No	登録番号	出土遺物	層位	種別	器種	文様等	備考	写真図版
1	A-726	SX220	-	陶土器	深鉢	口縁部・沈底文、胸部・熱帯文、底部・子弾	底部穿孔。	40-3

第150図 SX220埋設土器



No.	登録番号	出土遺物	層位	種別	器種	文様等	備考	写真図版
1	A-799	SX225	-	陶土器	深鉢	口縁部・山形小切縁・沈面文(両面)・「(6)字鉢」(C)字鉢・脚部・火照文・沈面文(左端)・十字脚穿孔。		40-4

第151図 SX225埋設土器



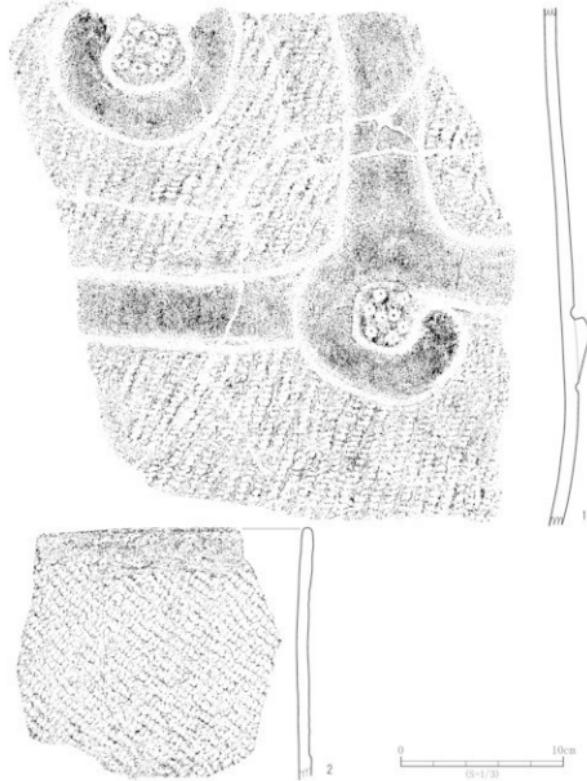
第152図 SX225埋設土器出土遺物

堆まない石皿である。また、使用面の中央部には使用前の敲打痕が観察され、表面の凸部を平坦に調整した痕跡と考えられる。なお、使用面には黒色付着物が観察された。

SX226埋設土器（第146図、図版16） W300・N20グリッドで検出した。平面形は梢円形で、長軸方向はN-29°-Wである。規模は長軸95cm、短軸62cm、深さ20cmで、断面形はU字形である。堆積土は3層に分層され、3層は掘り方理土である。遺物は堆積土から深鉢の大型破片が2点重なった状態で出土しており、第153図に図示した。1は深鉢胴部の破片である。隆沈線文区画の無文帯が横位に連続して連結部が「O」字状文となり、隆線の先端は縦状となる。「O」字状区画内には円形刺突文が充填されている。2は深鉢の口縁部破片である。

2) 性格不明遺構

SX292性格不明遺構（第146図、図版17） W300・N20グリッドで検出した。SX225と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は径25cmのほぼ円形で、検出面から底面までの深さは15cmである。長さ22cm、幅15cmの縦が検出され、西側に接するSX225からも同様の大きさの縦が検出されており一連のものとも考えられる。



No.	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	文様等	備考	写真図版
1	A-798	SX226	-	陶土器	深鉢	胴部・隆沈線文区画・「O」字状文・縦状隆面文・鉗突文・RL縫文		41-1
2	A-987	SX226	-	陶土器	深鉢	口縁部・LR縫文		41-2

第153図 SX226埋設土器



第154図 下ノ内道路2C区��前遺構配置図

(5) XII層検出の遺構と遺物 (第154図、図版11)

1) 穫穴住居跡

SI223 穫穴住居跡 (第155図、図版12)

【位置】 W 310~320・N 10~20グリッドに位置する。

【新旧関係】 SK230と重複関係にあり、本住居跡が古い。

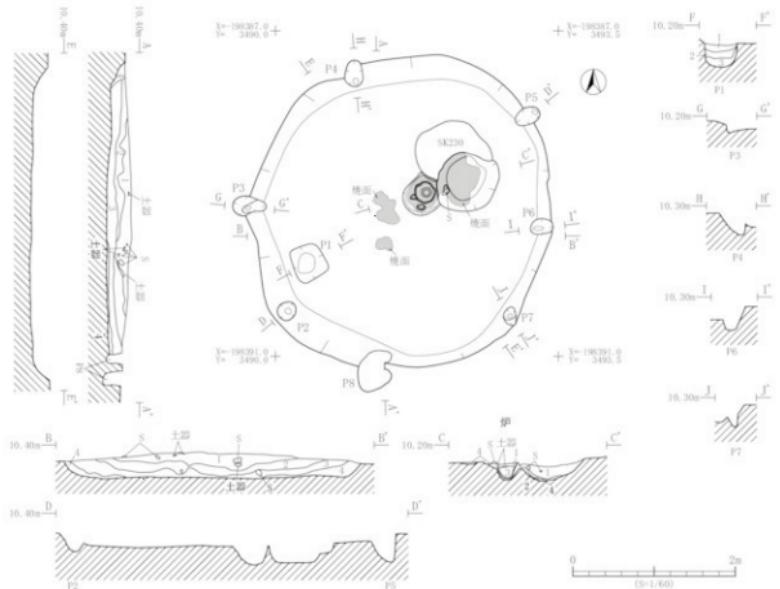
【規模・平面形】 長軸 (北東-南西) 4.05m、短軸 (北西-南東) 3.60mの不整円形である。

【堆積土】 4層に分層される。1層には炭化物・土器片が多く含まれ、2層及び4層には粘土ブロック、3層には炭化物と粘土ブロックを含有する。

【壁面】 壁は検出面から8~20cmで、床面から比較的急角度で立ち上がる。

【床面】 挖り方の底面であるXII層を直接床面としている。

【柱穴】 床面から1個 (P1)、壁沿いから6個 (P2~P7) の合計7個のピットが検出された。位置関係から壁沿いに配置が認められるP2~P7が柱穴になるものと考えられる。P2~P7は平面形が円形または楕円形で、上端の規模は大小認められるが、下端径については5~10cmの範囲内ではほぼ一定している。断面形でみるとP2・P3・

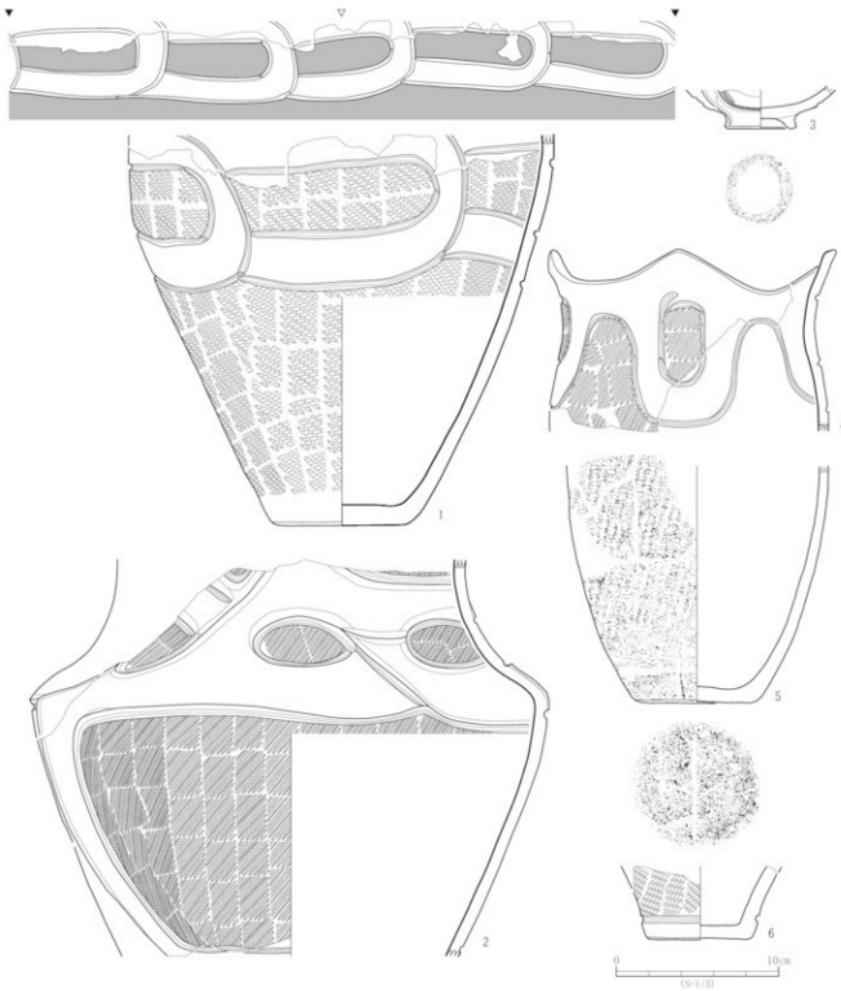


遺構			
層位	土 色	主 性	備 考
SI223	1 10YR3/3褐色	シルト質粘土 内深約50~100mm。炭化物・土器片を多量含む。	上面に土器片を含み、炭化物を多く含む。 下部は比較的化する。
	2 10YR4/4褐色	シルト質粘土 壁面が土体・周囲地盤をブロック状、炭化物を含む。壁厚約20~30cmを若干含む。	-
SI223 P1跡	3 10YR5/6黄褐色	シルト質粘土 壁面が土体・周囲地盤をブロック状、炭化物を含む。壁厚約20~30cmを若干含む。	褐色粘土をブロック状、炭化物を若干含む。
	4 10YR6/4C灰褐色	シルト質粘土 壁面が土体・周囲地盤をブロック状、炭化物を含む。壁厚約20~30cmを若干含む。	下部に壁厚約2cmの炭化物を層状に、壁 (約50mm) を若干含む。
SI223 P2跡	1 10YR4/6褐色	シルト質粘土 炭化物を含む。壁厚約20~30cmを若干含む。	褐色粘土を土体・周囲地盤が供給する。
	2 10YR3/4褐色	粘土 炭化物を含む。壁厚約20~30cmを含む。	上部に土器片を含み、炭化物を多く含む。 下部は比較的化する。

遺構			
層位	土 色	主 性	備 考
SI223	3 10YR4/1褐色	粘土	上面に土器片を含み、炭化物を多く含む。 下部は比較的化する。
	4 -	-	褐色。
SI223 P1	1 10YR5/6黄褐色	粘土	褐色粘土をブロック状、炭化物を若干含む。
	2 10YR4/4褐色	粘土	下部に壁厚約2cmの炭化物を層状に、壁 (約50mm) を若干含む。
	3 10YR6/3C灰褐色	シルト質粘土	壁面が土体・周囲地盤が供給する。

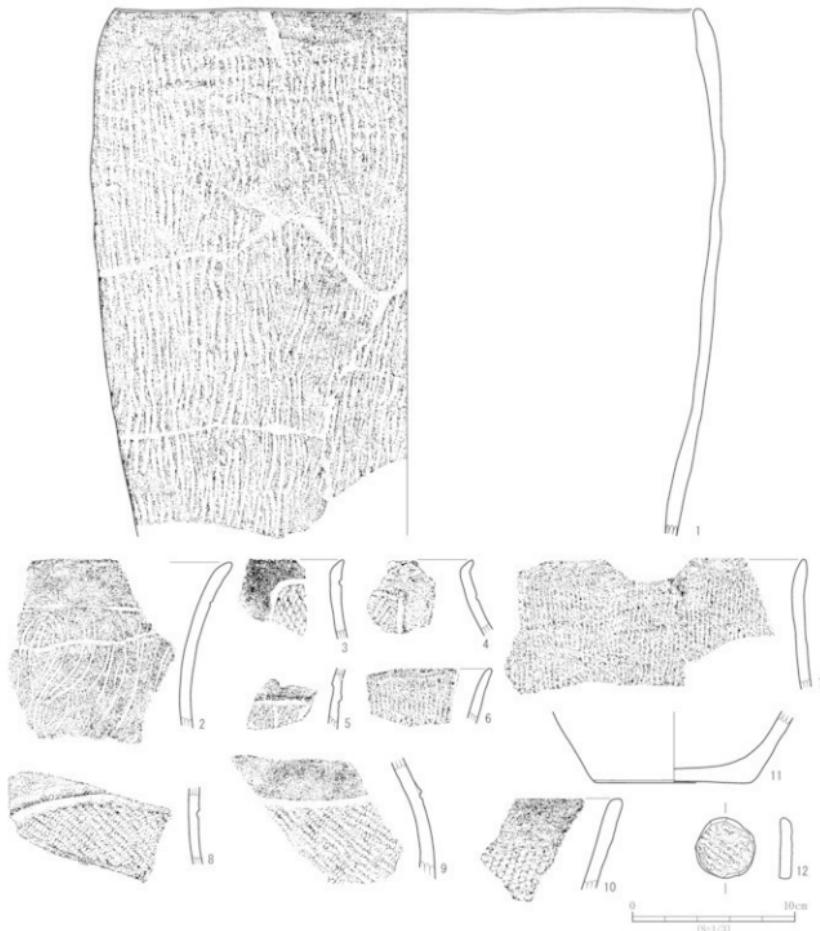
第155図 SI223竪穴住居跡平面図・断面図

第4節 下ノ内遺跡2C区の調査



No.	登録番号	出土遺物	層位	性質	器種	文様等	備考	写真版
1	A-736	SI1223b	-	陶土器	深鉢	側部:沈殿文区画・「コ」字状文・LR調文、底部:ナデ		41-3
2	A-792	SI1223	3	陶土器	深鉢	側部:背沈殿文区画・付加条文 (RL調文+L渦条文)		41-4
3	A-1021A	SI1223	1	陶土器	盆?	側部:飾面文、底部:ナデ	右付添。	41-6
4	A-1028	SI1223	1	陶土器	深鉢	1面:側面・山形変形・波状口縁・沈殿文区画・「O」字状・波状無文帯 RL調文		41-5
5	A-790	SI1223	1	陶土器	深鉢	側部:RL調文、底部:木製壓		41-6
6	A-102b	SI1223	1	陶土器	深鉢	側部:沈殿文、LR調文、底部:ナデ		-

第156図 SI1223竪穴住居跡出土遺物（1）



No.	登録番号	出土遺物	層	種	形	記	文様等	備考	写真回数
1	A-1093	SI223	2	碗	上部	深鉢	1188 - 鋼部-支脚系文		41-7
2	A-1093	SI223	1	碗	上部	深鉢	1188-1 - 滴垂文・斜折系文		41-9
3	A-10303	SI223	2	碗	上部	深鉢	1188-2 - 滴垂文・斜折系文		41-10
4	A-10291	SI223	1	碗	上部	鉢	1188-3 - 滴垂文・斜折系文		41-11
5	A-1032	SI223P1	3	碗	上部	深鉢	側部-横波瀧文・斜折系文	内外面に赤彩残る。	41-12
6	A-1034	SI223P1'	2	碗	上部	深鉢	1188-4 - 斜折系文・垂繩文	A-1032と同-	41-13
7	A-1035	SI223	1	碗	上部	深鉢	1188-5 - 斜折系文・垂繩文	A-1034と同-	41-14
8	A-1023	SI223	1	碗	上部	深鉢	側部-横波瀧文・L字繩文		41-15
9	A-1033A	SI223	2	碗	上部	深鉢	側部-沈繩文・L字繩文		41-16
10	A-1033	SI223	2	碗	上部	深鉢	1188-6 - 滴垂文		41-17
11	A-1029A	SI223	1	碗	上部	深鉢	側部-ナフ フローナフ	-	-
12	P-72	SI223	1	土製品	土製円盤	SL	11g	36×35×7mm	41-18

第157図 SI223堅穴住居出土遺物（2）



No.	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	石種	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	備考	写真図版
1	Ka-el-2	S1223	2	打削石器	石核	珪質頁岩	10.1×4.1×2.0	42.0	縦型。	41-21
2	Ka-el-3	S1223	3	打削石器	石核	珪質頁岩	7.3×3.7×1.2	24.5	縦型。	41-20
3	Ka-el-13	S1223	3	打削石器	不定形石器	珪質頁岩	5.1×1.9×0.7	4.9	削器。石刃状剥片素材。	41-19
4	Ka-el-2	S1223	3	打削石器	不定形石器	珪質頁岩	11.3×3.4×2.4	44.6	RF。石刃状剥片素材。	42-1
5	Ka-el-3	S1223	3	打削石器	不定形石器	珪質頁岩	8.3×2.8×1.2	20.9	RF。石刃状剥片素材。	42-2
6	Ka-el-14	S1223	1	打削石器	不定形石器	珪質頁岩	(31.1×14.0)×(11.1)	(16.4)	削器。下部欠損。先端面に加工跡有り。	42-3
7	Ka-el-15	S1223 6①	2	打削石器	不定形石器	珪質頁岩	(36.0×2.5)×(9.7)	(43)	削器。上部欠損。	42-4

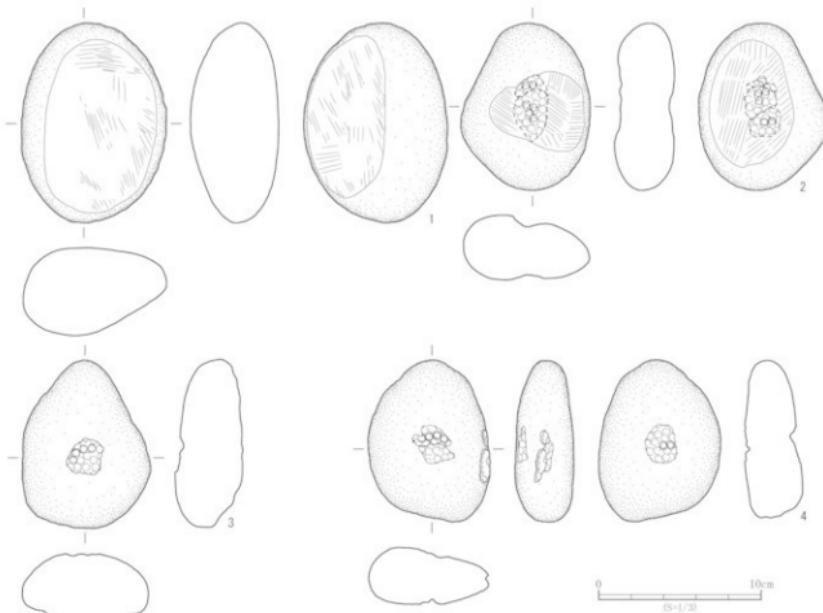
第158図 S1223堅穴住居跡出土遺物（3）

P5・P7の下端が壁際に寄っており、柱が斜めに据えられたものと考えられる。また、炉の南西で検出されたP1は平面形が隅丸方形で、規模は45cm×40cm、深さ27cmである。堆積土は3層に分層され、2層下部では炭化物層が検出された。また3層から赤色の施された深鉢小片（第157図5）が出土した。

【周溝】検出されなかった。

【その他の施設】住居中央の2ヶ所で焼面が確認されている。規模は中央のものが長軸45cm、短軸29cmの不整形な範囲に、その両側のものは同じく不整形で長さ23cm、幅15cmの範囲に赤化した範囲が認められた。

【炉】住居中央のやや北東寄りに位置する。北側がSK230との重複によって削平されているが、土器埋設部と掘り込み部からなる複式炉と考えられる。全体の規模は長さ126cm、最大幅75cmで、平面形は土器埋設部で括れるダルマ形で、長軸方向はN-38°-Eである。土器埋設部及び掘り込み部に焼面が認められた。土器埋設部は掘り方の平面形が楕円形と思われ、規模は現存長50cm、幅45cm、床面からの深さは20cmである。口縁部を欠く深鉢が正位で埋設されており、周辺から礫が検出されていることから土器の周りが礫で囲まれていた可能性がある。掘り込み部は楕円形を基調としたもので、長さ80cm、幅75cm、深さ25cmである。土器埋設部から掘り込み部中央にかけて焼け面が広がっている。



No.	登錄番号	出土遺構	場所	種別	器種	石材	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	備考	写真図版
1	Kc-a-8	SI223	2	礫石器	磨石	安山岩	12.1×8.7×5.3	7100	磨1+1,	42-5
2	Kc-a-9	SI223	1	礫石器	磨石	安山岩	10.0×7.8×5.3	3890	磨1+1, 四2+3,	42-6
3	Kc-a-6	SI223	1	礫石器	磨石	安山岩	10.1×7.8×4.2	3460	磨1+0,	42-7
4	Kc-a-7	SI223	1	礫石器	磨石	安山岩	9.9×7.4×3.6	2630	[磨1+1, 磨鏡1],	42-8

第159図 SI223堅穴住居出土遺物（4）

【出土遺物】堆積土及び床面直上より多量の縄文土器・石器が出土した。土器は第156・157図に図示した。第156図1は炉の埋設土器である。口縁部を欠損した深鉢で、沈線文で区画された「コ」字状文が連結して文様が横位に展開する。2は胴部に最大径をもつ口縁部が大きく聞く深鉢であり、降沈線文区画により「O」字状文などとなる。3は降沈線文区画が底部から胴部に及び、底部は高台状で、注口土器の可能性がある。4は胴部中位が張る深鉢で、口縁部は波状口縁となる。胴部上半には沈線文による波状及び「O」字状文がみられる。6は小型土器の底部であり、底部直上に沈線文が巡る。第157図1は口縁部が内湾する樽形の深鉢である。2は口縁部が強く外反する器形の深鉢で、口縁部直下には横位の沈線文が巡る。3・4は沈線文、5・8・9は降沈線文で区画される。12は土製円盤である。

石器は計52点出土した。器種別の内訳は石礫1点、石匙2点、不定形石器10点、二次加工のある剥片7点、微細剥離痕のある剥片5点、剥片12点、石核2点、磨石4点、凹石4点、砥石4点、石皿1点であり、そのうちの石匙2点、不定形石器5点、磨石2点、凹石2点を第158・159図に図示した。第158図1・2は石匙である。素材の用い方は1では剥片の端部につまみ部が作出され、打面部は除去されているが、2は打面部側につまみ部に用いており、打面も残されている。調整加工は器体の縁部を中心で施されている。3～7は不定形石器である。3・6・7は削器である。3の刃部には主要剥離面方向からだけではなく、正面から裏面に向かう二次加工も認められる。4・5は器体の一部に刃部加工が施されたRFである。第159図1・2は磨石である。1は表裏に研磨痕が観察され、2は表裏の研磨痕と共に研磨よりも古い凹みが認められる。3・4は凹石である。3は扁平疊の片面に凹みが認められるが、4には表裏の凹みと共に右側面に敲打痕が認められる。

S1227堅穴住居跡（第160～162図、図版12・13）

【位置】W300～310・N10～20グリッドに位置する。

【新旧関係】SK294と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

【規模・平面形】長軸（北西～南東）5.05m、短軸（北東～南西）4.95mの不整円形である。

【堆積土】5層に分層され、中央部下層の3層は炭化物を多量に含む。

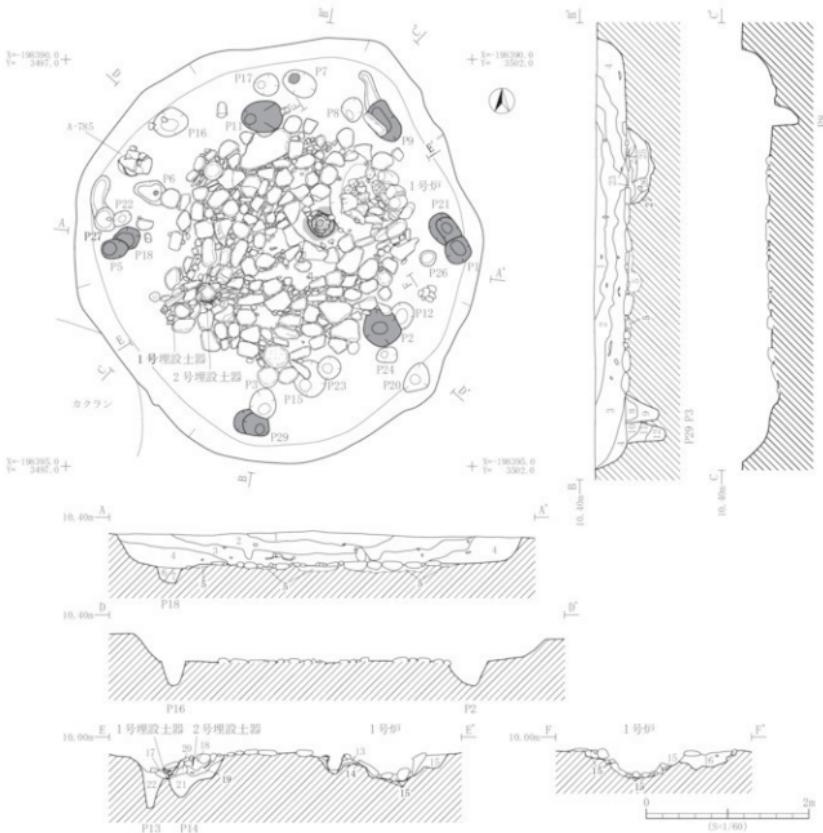
【壁面】壁高は床面から24～42cmで、床面から急角度で立ち上がる。

【床面】掘り方の底面であるⅡ層上に、礫が長軸（北東～南西）3.60m、短軸（北西～南東）2.95mの範囲に敷かれていた。礫はいずれも平坦な面を上にした状態で敷設され、大きさはP11南側の長さ74cmが最大で、その他は20～40cmのものが主体である。また、これらの隙間に10cm未満の小型の礫が詰められる。1・2号埋設土器から炉に向かって「ハ」の字状に礫の長軸方向を向けられている傾向もみて取れる（図版12）。

【柱穴】計32個のビットが検出された。規模は径15～54cm、深さは10～72cmである。敷石範囲や炉の重複等から建て替えが行われたものと推測される。位置関係から敷石を伴う新炉段階の柱穴はP1・2・5・9・11・18・21、旧炉段階ではP2・3・7・16・27などが想定される。これら以外のビットについては何らかの補助的な役割のものと考えられる。P6・7から柱痕が確認されている。

【周溝】住居跡西側と北東側の壁際でビットと重複して約40cmの溝を確認した。断面形はU字形で、規模は幅8～23cm、深さは5cm程度である。溝の規模が小さいことから周溝とは考え難い。

【炉】堅穴の北東側に位置し、土器埋設部と敷石石組部からなる複式炉である。また、敷石を除去したところ炉の北側から埋設土器と北東側の落ち込みが検出され、敷石敷設以前の複式炉と考えられる。この段階の炉を2号炉とし、敷石を伴う新段階の炉を1号炉とする。1号炉の規模は長さ156cm、最大幅130cmで平面形は敷石石組部が広がる釣鐘形で、長軸方向はN-58°～Eである。炉の縁石はその他の敷石部分と同じ平坦面を上に向けており、ほぼ同一の高さである。土器埋設部には底部の一部を欠損する深鉢が正位の状態で埋設され、周囲は被熱により赤変していた。敷石石組部の底面に敷かれている礫は熱で脆くなり変色している。2号炉は土器埋設部と掘り込み部からな



遺構	層位	土色	土性	備考	遺構	層位	土色	土性	備考
S1227	1	10YR4/4褐色	シルト	炭化物・礫φ30~200mm・土器片を含む。	15	10YR6/5に近い黄褐色	砂質シルト	礫φ30mm以下を多量。炭化物をわずかに含む。(17-15層半数あり)	
	2	10YR5.6明黄色	粘土質シルト	土器片を含む。	16	10YR6.4-5.5黄褐色	砂質シルト	縛繩の小プロックと炭化物を多量含む。	
	3	10YR3/4褐色	粘土質シルト	炭化物を大量に含み、礫φ30~200mmを含む。	17	5G5/1暗紅褐色	砂質シルト	グリ化している。	
	4	10YR5.6黃褐色	粘土	粘性。縮まりややある。	18	5G6/1暗紅褐色	砂質シルト	グリ化している。	
	5	10YR7.75-4.1黃褐色	シルト	縛繩のプロックと炭化物を少量含む。繩り方埋土。	19	5G4/1暗紅褐色	砂質シルト	縛繩のプロックを少量含む。グリ化している。	
	6	5G6/1暗紅褐色	砂質シルト	縛繩のシルトプロックを含む。	20	23G7.9/オリーブ色	砂質シルト	縛繩のプロックを少量含む。グリ化している。	
	7	5G5/1暗紅褐色	シルト	(6-7層ピット18)					
	8	10YR4/4褐色	粘土質シルト	礫φ50mmを含む。					
	9	10YR5.6黃褐色	粘土質シルト	粘性。縮まりややあり。迷.-9層ピット3)					
	10	10YR5.25-4.5黃褐色	シルト	縛繩のプロックを少量含む。					
	11	-	-	縛繩の下床。に近い黃褐色シルトプロックを含む。(10-12層ピット29)					
	12	10YR5.4/2.5黃褐色	シルト						
	13	-	-	縛繩の下床。に近い黃褐色シルトプロックと炭化物をわずかに含む。					
	14	10YR5.25-4.5黃褐色	シルト	縛繩のプロックと炭化物をわずかに含む。					
S1227					21	23G1/オリーブ色	砂質シルト	縛繩のプロックを少量含む。(17-21層ピット14)	
					22	5G5/1暗紅褐色	砂質シルト	縛繩のプロックと炭化物を多量含む。(ピット13)	
					23	10YR6.4-5.5黄褐色	シルト	炭化物をわずかに含む。	
					24	10YR3/2.5-4.5黃褐色	砂質	-	
					25	-	-	に近い黃褐色シルトプロックの遺存層。炭化物を多量含む。	
					26	10YR5/2.5黃褐色	シルト	炭化物を多量含む。縛繩のプロックと繩を含む。	
					27	10YR6.3-5.5黄褐色	砂質シルト	炭化物をわずかに含む。(23-27層2号を跡)	

第160図 S1227堅穴住居平面図・断面図